

上小笠原遺跡（第1・2・3地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XX

2013

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第22集

上小笠原遺跡（第1・2・3地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XX

2013

白岡市教育委員会



第2号住居跡全景



第57号土坑半截状況

卷頭図版2



第57号土坑出土土器展開写真

序

このたび白岡市教育委員会では、『上小笠原遺跡（第1・2・3地点）』の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあって、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目ざましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がり、上小笠原遺跡もそのような田園の一角に存在しています。

上小笠原遺跡第1・2地点においては、今から約3千年前の縄文時代後期の集落があらわになりました。複雑に重複する住居跡の発見や豊富な遺物の出土からは、太古の昔に根付いた人々の活発な活動が窺われます。第3地点では、市域でも希少な旧石器時代のナイフ形石器が発見されました。今回の調査成果によって、白岡の黎明期を描き出す新たな資料が加えられたことを喜ばしく思います。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成にあたり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

白岡市教育委員会
教育長 福原良男

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する上小笠原遺跡（第1・2・3地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。
 - （第1地点）白岡町（当時）大字彦兵衛字下小笠原120-1・120-2
 - （第2地点）彦兵衛字下小笠原121-2
 - （第3地点）彦兵衛字上小笠原154-1
- 3 発掘調査は、白岡町教育委員会（当時）が主体となって実施した。調査費用及び整理作業費用は白岡町教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。
 - （第1地点）平成13年6月1日から平成13年8月10日（国庫補助事業）
 - （第2地点）平成13年8月28日から平成13年9月28日
 - （第3地点）平成21年1月15日から平成21年1月21日（国庫補助事業）
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
 - （第1地点）発掘届は平成13年6月1日付け教委第302号で進達、発掘調査の指示は平成13年6月19日付け教文第3-203号で受けた。発掘調査通知は、平成13年6月2日付け教委第309号である。
 - （第2地点）発掘届は平成13年8月20日付け教委第636号で進達、発掘調査の指示は平成13年8月31日付け教文第3-463号で受けた。発掘調査通知は、平成13年8月20日付け教委第636号である。
 - （第3地点）発掘届は平成21年1月16日付け教生第236号で進達、発掘調査の指示は平成21年2月13日付け教生文第4-1021号で受けた。発掘調査通知は、平成21年1月17日付け教生文第238号である。
- 6 発掘調査は、松崎 慶喜（第1・2・3地点）と入江 正宏（第1・2地点）が担当した。

整理作業は、第1・2地点を平成23年度白岡町緊急雇用創出基金事業（上小笠原遺跡遺物整理事業）として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）に委託した。第3地点については杉山 和徳が担当した。

報告書作成作業は、奥野 麦生と松崎の協力を得て杉山が担当した。
- 7 遺物の実測は、細田 勝（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）と奥野が担当した。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。
 - I、II-1、2、III-1-(2)、(4)、2：杉山 和徳
 - II-3、III-1-(1)、(3)：松崎 慶喜（大宮開成中学・高等学校）
 - IV：株式会社バリノ・サーヴェイ株式会社
 - V：奥野 麦生
- 9 遺跡原点は、日本測地系平面直角座標第9系 $X = 1,305,000\text{m}$ 、 $Y = -12,005,000\text{m}$ である。使用した基準点は白岡町1級多角点9A コウ1135-1 ($X = 1,302,901\text{m}$ 、 $Y = -12,005,646\text{m}$)、2級多角点9B コウ276-3である。巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 10 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構：1/60 遺物：土器拓影図・石器実測図1/3、1/2、1/1、土器実測図1/3、1/4

- 11 挿図と表中の略号は以下のとおりである。

H：住居跡 SK：土坑 FP：屋外炉跡 P：ピット

- 12 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である小峰 絹枝様、鈴木 晴治様、小山 重雄様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。

新屋 雅明（故人）、石川 正美、大屋 道則、小宮 雪晴、田中 和之、

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育局生涯学習文化財課、

白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

- 13 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 美代子、石井 匠、桂 都、金子 悦子、川島 みつ、坂田 玲子、佐久間 福子、座古 順子、

佐藤 利勝、高橋 安代、竹内 玖仁代、田中 玉緒、寺岡 あゆ美、寺岡 百合子、鳥海 恵子、

中尾 亜子、並木 摩利男、蓮田 富江、初見 文江、増田 香織、水沢 和子、渡辺 トシ子、渡辺 英子

（50音順、敬称略）。

- 14 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（平成24年度）

調査主体者 白岡市教育委員会

事務局 教 育 長 福原良男

教 育 部 長 黒須 誠

生涯学習課長 鬼久保 一

生涯学習課長補佐 大久保 賢一

学習支援担当/ 文化振興担当主査 奥野 麦生（調査担当） 同主事 杉山 和徳（調査担当）

学習支援担当主任 松澤 純一 同主事 平山 雅基

目 次

卷頭図版		III 調査の成果	10
序		1 第1・2地点の遺構と遺物	10
例言		(1) 住居跡	10
目次		(2) 土坑	58
I 調査の概要	1	(3) 屋外炉跡	80
1 調査に至る経緯	1	(4) グリッド出土遺物	81
2 調査の経過	1	2 第3地点の遺物	101
(1) 上小笠原遺跡第1・2地点	1	IV 自然科学分析	102
(2) 上小笠原遺跡第3地点	2	1 上小笠原遺跡の放射性炭素年代測定	102
II 位置と環境	3	V 考 察	105
1 遺跡の立地と地理的環境	3	1 土器文様の構造的理解について	105
2 歴史的環境	3		
3 各地点の概要	5	写真図版	
		報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 上小笠原遺跡と周辺の遺跡分布図	4	第17図 第4号住居跡 (1)	22
第2図 上小笠原遺跡の位置と発掘調査区	6	第18図 第4号住居跡 (2)	23
第3図 第1・2地点全測図	8	第19図 第4号住居跡出土遺物	23
第4図 第1・2地点基本層序	9	第20図 第5号住居跡 (1)	25
第5図 第3地点全測図及び基本土層	9	第21図 第5号住居跡 (2)	26
第6図 第1A号住居跡	10	第22図 第5号住居跡遺物分布図	27
第7図 第1B号住居跡	11	第23図 第5号住居跡礎分布図	28
第8図 第1A・B号住居跡出土遺物	11	第24図 第5号住居跡出土遺物 (1)	29
第9図 第2号住居跡	13	第25図 第5号住居跡出土遺物 (2)	30
第10図 第2号住居跡出土遺物 (1)	15	第26図 第5号住居跡出土遺物 (3)	31
第11図 第2号住居跡出土遺物 (2)	16	第27図 第5号住居跡出土遺物 (4)	32
第12図 第3A号住居跡 (1)	17	第28図 第5号住居跡出土遺物 (5)	33
第13図 第3A号住居跡 (2)	18	第29図 第5号住居跡出土遺物 (6)	34
第14図 第3A・B号住居跡出土遺物 (1)	18	第30図 第6号住居跡	35
第15図 第3B号住居跡	19	第31図 第6号住居跡遺物分布状況	36
第16図 第3A・B号住居跡出土遺物	21	第32図 第6号住居跡出土遺物 (1)	37

第33図	第6号住居跡出土遺物 (2) ……………	38	第61図	第29・32・34~38・40・41号土坑 ……	69
第34図	第6号住居跡出土遺物 (3) ……………	39	第62図	土坑出土遺物 (3) ……………	70
第35図	第6号住居跡出土遺物 (4) ……………	40	第63図	第39・42~48・50~53号土坑 ………	73
第36図	第7号住居跡 ……………	41	第64図	第49・54~59号土坑 ……………	76
第37図	第7号住居跡出土遺物 ……………	42	第65図	土坑出土遺物 (4) ……………	78
第38図	第8号住居跡 (1) ……………	43	第66図	土坑出土遺物 (5) ……………	79
第39図	第8号住居跡 (2) ……………	44	第67図	屋外炉跡 ……………	80
第40図	第8号住居跡出土遺物 ……………	44	第68図	グリッド出土遺物 (1) ……………	82
第41図	第9号住居跡 ……………	45	第69図	グリッド出土遺物 (2) ……………	83
第42図	第10号住居跡 (1) ……………	46	第70図	グリッド出土遺物 (3) ……………	84
第43図	第10号住居跡 (2) ……………	47	第71図	グリッド出土遺物 (4) ……………	85
第44図	第12号住居跡 ……………	47	第72図	グリッド出土遺物 (5) ……………	86
第45図	第11号住居跡 ……………	48	第73図	グリッド出土遺物 (6) ……………	88
第46図	第9~12号住居跡出土遺物 ……………	49	第74図	グリッド出土遺物 (7) ……………	89
第47図	第13号住居跡 ……………	50	第75図	グリッドピット (1) ……………	90
第48図	第13号住居跡出土遺物 (1) ……………	51	第76図	グリッドピット (2) ……………	91
第49図	第13号住居跡出土遺物 (2) ……………	52	第77図	グリッドピット (3) ……………	92
第50図	第13号住居跡出土遺物 (3) ……………	53	第78図	グリッドピット (4) ……………	93
第51図	第14号住居跡 ……………	54	第79図	グリッドピット (5) ……………	94
第52図	第15号住居跡 ……………	55	第80図	グリッドピット (6) ……………	95
第53図	第14号住居跡出土遺物 ……………	56	第81図	グリッドピット (7) ……………	96
第54図	第16号住居跡 ……………	57	第82図	第3地点出土遺物 ……………	101
第55図	第16号住居跡出土遺物 ……………	58	第83図	上小笠原遺跡出土例 ……………	107
第56図	第1~8号土坑 ……………	59	第84図	入耕地遺跡第2地点出土例 ……………	109
第57図	土坑出土遺物 (1) ……………	60	第85図	前田遺跡出土例 ……………	112
第58図	第9~21号土坑 ……………	63	第86図	上小笠原遺跡出土例2 ……………	115
第59図	土坑出土遺物 (2) ……………	64	第87図	器面分割と視覚認識範囲 ……………	117
第60図	第22~28・30・31・33号土坑 ………	67			

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表 ……………	5	第4表	石器計測表 ……………	100
第2表	住居跡ピット一覧表 ……………	97	第5表	放射性炭素年代測定及び炭化材 同定結果 ……………	103
第3表	グリッドピット一覧表 ……………	98			

写真図版目次

- 巻頭図版1 第2号住居跡全景
第57号土坑半截状況
- 巻頭図版2 第57号土坑出土土器展開写真
- 図版1 掘削作業状況
実測作業状況
現地説明会の様子 (1)
現地説明会の様子 (2)
- 図版2 第1地点調査区南側全景
第2地点調査区南側全景
- 図版3 第1地点調査区北側全景
第2地点調査区北側全景
- 図版4 第1A・B号住居跡
第2号住居跡
第2・3A・B号住居跡
- 図版5 第4・10号住居跡
第5号住居跡
第6号住居跡
- 図版6 第2号住居跡遺物出土状況
第4号住居跡炉跡
第5号住居跡遺物出土状況
第5・6号住居跡遺物出土状況
第5号住居跡炭化材検出状況
第10号住居跡炉跡
- 図版7 第7・8・11号住居跡
第9号住居跡
第12号住居跡
- 図版8 第2号土坑
第6号土坑
第8号土坑
第10号土坑
第13号土坑
第14号土坑
第15号土坑
- 第17号土坑
- 図版9 第19号土坑
第20号土坑
第21号土坑
第22号土坑
第24号土坑
第32号土坑
第34号土坑
第35号土坑
- 図版10 第39号土坑
第45号土坑
第49号土坑
第53号土坑
第55号土坑
第56号土坑
第57号土坑遺物出土状況
第4号屋外炉跡
- 図版11 第1A・B号住居跡 (第8図1~10)
第2号住居跡
(第10図1~44・第11図1~3)
第3A・B号住居跡 (第16図1~50)
- 図版12 第3A・B号住居跡 (第14図1)
第4号住居跡 (第19図1~10)
第5号住居跡 (第24図1)
第5号住居跡 (第24図2)
第5号住居跡 (第24図3)
第5号住居跡 (第24図4)
第5号住居跡
(第28図1~8・第29図1・2)
- 図版13 第5号住居跡
(第25図1~39・第26図1~35・第27図1~34)
- 図版14 第6号住居跡 (第32図1)
第6号住居跡 (第33図1)
第6号住居跡 (第33図2)

- 第6号住居跡
(第34図1～37・第35図1～15)
- 図版15 第6号住居跡 (第35図16～23)
第7号住居跡 (第37図1～10)
第8号住居跡 (第40図1)
第8号住居跡 (第40図2)
第8号住居跡 (第40図3)
第8号住居跡 (第40図4)
第9～12号住居跡 (第46図1～37)
- 図版16 第13号住居跡 (第48図1)
第13号住居跡 (第48図2)
第13号住居跡 (第48図3)
第13号住居跡 (第48図4)
第13号住居跡 (第48図5)
第13号住居跡 (第49図1～39)
- 図版17 第13号住居跡 (第50図1～13)
第14号住居跡 (第53図1～15)
第16号住居跡 (第55図1～28)
土坑出土遺物 (第57図1～25)
- 図版18 土坑出土遺物 (第59図1～13・15～24)
土坑出土遺物 (第59図14)
土坑出土遺物 (第62図1～16)
- 図版19 土坑出土遺物 (第65図1)
土坑出土遺物 (第65図2～21)
土坑出土遺物 (第65図22)
土坑出土遺物 (第66図1)
土坑出土遺物 (第66図2)
- 図版20 グリッド出土遺物
(第68図1～26・第69図1～31・
第70図1～24)
- 図版21 グリッド出土遺物
(第70図25～33・第71図1～45・
第72図1～30)
- 図版22 グリッド出土遺物 (第73図1)
グリッド出土遺物 (第73図2～13)
グリッド出土遺物 (第74図1～13)
第3地点調査区全景
ナイフ形石器出土状況
第3地点出土遺物 (第82図1～5)

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.88km²の町で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅が目立って増え、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する上小笠原遺跡（第1・2・3地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

(1) 上小笠原遺跡第1・2地点

上小笠原遺跡では、平成13年5月25・28日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に第1・2地点の発掘調査を行った。第1・2地点は別地点としているものの、隣接した地点をほぼ期間を空けず継続して調査した。第1・2地点は、遺跡の北側に位置し、標高は約10mである。調査区北端の標高は8mで、南北の高低差は約2mを測るものの、調査区南側から北側に向かって緩やかに傾斜している。

上小笠原遺跡第1地点発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成13年6月1日 表土除去、周辺環境整備、基準杭設定
6月4日 遺構確認、谷部（埋没谷）掘削開始
6月11日～8月9日 遺構掘削、写真撮影、実測作業
8月10日 調査終了

上小笠原遺跡第2地点発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成13年8月28日 表土除去、周辺環境整備
8月29日 遺構確認

8月30日～9月28日 遺構掘削、写真撮影、実測作業

9月29日 調査終了

(2) 上小笠原遺跡第3地点

第3地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲から西方に50m程離れた隣接地にあたり、中川低地から入り込む支谷の最奥部といえる場所に位置する。周囲の標高は9～10mで、北方に向って緩やかに傾斜している。

平成20年12月24日に実施された試掘調査によって、ソフトローム層中から旧石器時代のナイフ形石器1点が出土した。同石器はその出土状況から流れ込みではなく、原位置を保って出土したものと思われることから、周辺を広く掘削し、ローム層面の詳細な調査が必要であると判断した。また、試掘調査の成果を受けて、上小笠原遺跡の変更増補を行い、ナイフ形石器出土地点を含むように、遺跡範囲を北西に拡大した。

平成21年1月15日から開始された本調査において、ナイフ形石器出土地点を中心に掘削を行った結果、さらに2点目のナイフ形石器が出土した。

上小笠原遺跡第3地点発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成21年1月15日 表土除去、機材搬入、遺構確認

1月16日 旧石器時代トレンチを設定

1月19日 実測作業開始

1月21日 調査終了、埋め戻し

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

上小笠原遺跡の位置する地域は、旧村名から日勝地区ともいわれ、地形的には大宮台地慈恩寺支台上にあたる。慈恩寺支台は西の元荒川、東の古利根川によって画された独立した台地である。北西から南東に9km程延びており、元荒川及びその支流の開析を受けている。北は久喜市太田袋付近から、南は春日部市花積付近まで展開する。支台東側から南端部までは中川低地に面し、西側は近世初頭まで利根川の旧流路であった日川低地に面している。また、慈恩寺支台の北部は、中川低地からの小支谷が複雑に入り込んでいる。当遺跡は宮代町逆井地区から入り込む一支谷奥部の、南岸台地縁辺部に展開している。発掘調査の成果から当遺跡と隣接する下小笠原遺跡との間には、小規模な埋没谷が存在することが判明している。

慈恩寺支台は周囲の沖積低地との比高差や支谷の開析状態に特徴がある。北部は関東造盆地運動の影響により沖積低地下への埋没化が顕著である。台地南縁部の春日部市花積付近の標高は18mほどだが、北上するにつれ標高を減じ、上小笠原遺跡付近では標高10m、沖積地との比高差は2m前後と低平になる。さらに北の白岡市高岩付近では標高9m程度となって、周囲の沖積地とほとんど比高差がなくなり、埋没台地となって久喜市方面へ延びると考えられている。また東縁部と西縁部とは対照的で、東縁部は比高差が少なく複雑に支谷が発達するのに対し、西縁部は明瞭な崖線をもちながら支谷は比較的未発達である。往古の人々はこのような台地の縁辺部や谷頭部を好んで選地したと見え、遺跡が多数分布する。中世期にはこの台地上を鎌倉街道中道が縦貫しており、このルートを手をトレースするように、近世初頭には日光御成道が整備された。

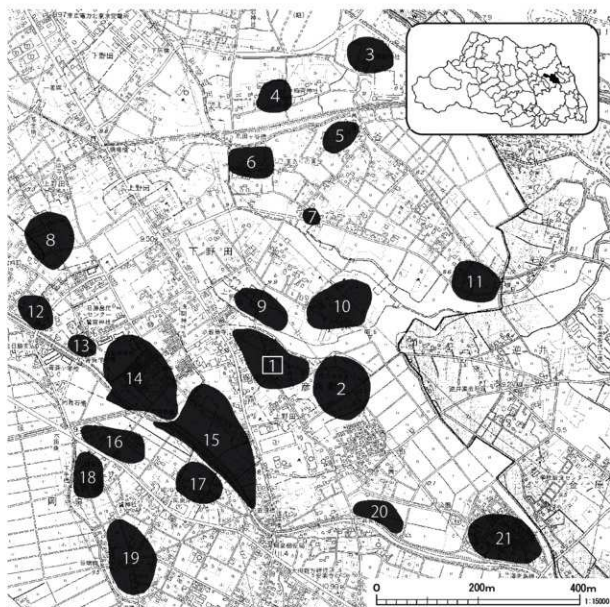
2 歴史的環境

大宮台地慈恩寺支台上に展開する遺跡の内、上小笠原遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、上小笠原遺跡のソフトローム層中からナイフ形石器が2点出土しているほか、市外の事例となるが宮代町の逆井遺跡から大宮台地唯一の細石刃の製作跡が検出されている。

縄文時代前半期の遺跡は少ないものの、本田下遺跡、大山遺跡、海老島遺跡では、早期末の条痕文期から前期初頭の花積下層式期にかけての炉穴や住居跡が検出されている。中期以降に遺跡数は大きく増加し、ほとんどの遺跡で遺構や遺物が確認される。清左衛門遺跡や赤砂利遺跡、本田下遺跡などが代表例な集落である。赤砂利遺跡では、加曽利EⅡ式期の住居跡をはじめ、中期後半から後期までの多くの住居跡が台地の縁辺にまで展開する。本田下遺跡では加曽利EⅢ式期の住居跡からヤマトシジミ、マガキ主体のブロック貝層が検出され、年代測定で約4,300年前のものと判明した。清左衛門遺跡では中期後半から晩期までの多数の住居跡が検出されたほか、石冠や人面土版など埼玉県内でも希少な遺物が出土したことで注目を集めた。埋没谷では堅果類の灰汁抜き等に用いたと考えられる木組み施設が発見されたほか、縄文時代後期の土器片を伴う地点貝層が検出され、マシジミやハイガイ、オオタニシに混じってニホンジカの骨も出土した。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。慈恩寺支台北東の宮代町の山崎山遺跡で古墳



第1図 上小笠原遺跡と周辺の遺跡分布図

時代前期の鍛冶工房跡が検出され、埼玉県内最古の事例とされるほか、慈恩寺支台南東端には春日部市の内牧塚内古墳群が所在し、古墳時代後期6～7世紀の古墳群が展開する。

奈良・平安時代には、慈恩寺支台一帯は武蔵国埼玉郡に属し、平安時代末には、武蔵国最大の荘園である太田荘が成立した。海老島遺跡では平安時代の住居跡が検出され、本村遺跡では平安時代の須惠器片が採集されている。慈恩寺支台南端先の自然堤防上では、春日部市の浜川戸遺跡などで大規模な集落が形成される。

中世以降、太田荘は鎌倉幕府や室町幕府の鎌倉府の直轄領を経て、戦国時代には、関東管領上杉氏に對峙する古河公方足利氏の前線域となった。また、丸山遺跡には中世城館（丸山城）の存在が伝承されている。赤砂利遺跡内に位置する大徳寺は、寺伝によれば開山は中世に遡る。寺の東側を通る道は日光御成道整備前の「本街道」と伝わり、これが鎌倉街道中道であると推定されている。発掘調査の成果としても、

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	上小笠原遺跡	彦兵衛字上小笠原・下小笠原	旧石器、縄文後	平成13・20
2	下小笠原遺跡	彦兵衛字下小笠原・下北山	縄文中・後	
3	諏訪遺跡	爪田ヶ谷字諏訪	時期不詳(中世か)	
4	中通遺跡	爪田ヶ谷字中通	縄文中、中世	
5	本田東遺跡	爪田ヶ谷字本田	縄文中・後	
6	本田西遺跡	爪田ヶ谷字本田	縄文中・後	
7	原遺跡	太田新井字原	中世以降	
8	宿本村遺跡	下野田字宿本村、上野田字本村	縄文	
9	鶴ヶ曾根西遺跡	下野田字鶴ヶ曾根	縄文中・後、中～近世	昭和62
10	鶴ヶ曾根東遺跡	下野田字鶴ヶ曾根	縄文中、近世	
11	洲崎遺跡	爪田ヶ谷字洲崎・谷中	縄文後	
12	本村遺跡	上野田字本村、下野田字宿赤砂利	縄文中・後、古代	
13	宿赤砂利遺跡	下野田宿赤砂利	縄文	
14	赤砂利遺跡	上野田字赤砂利、下野田字宿赤砂利、彦兵衛字八幡	縄文中・後、中～近世	平成5・7・11・12・22・24
15	清左衛門遺跡	彦兵衛字清左衛門・八幡、上野田字八幡	縄文中～晩、中～近世	平成13・14・15・20・22・23・24
16	台下遺跡	岡泉字台下	縄文中・後	
17	下道遺跡	岡泉字下道	縄文中	平成2
18	神台遺跡	岡泉字神台	縄文早・中、近世	昭和63
19	丸山遺跡	岡泉字丸山	縄文前～後、中世	
20	向野谷遺跡	太田新井字向野谷	縄文中	
21	海老島遺跡	太田新井字海老島	縄文早～後、平安	平成10

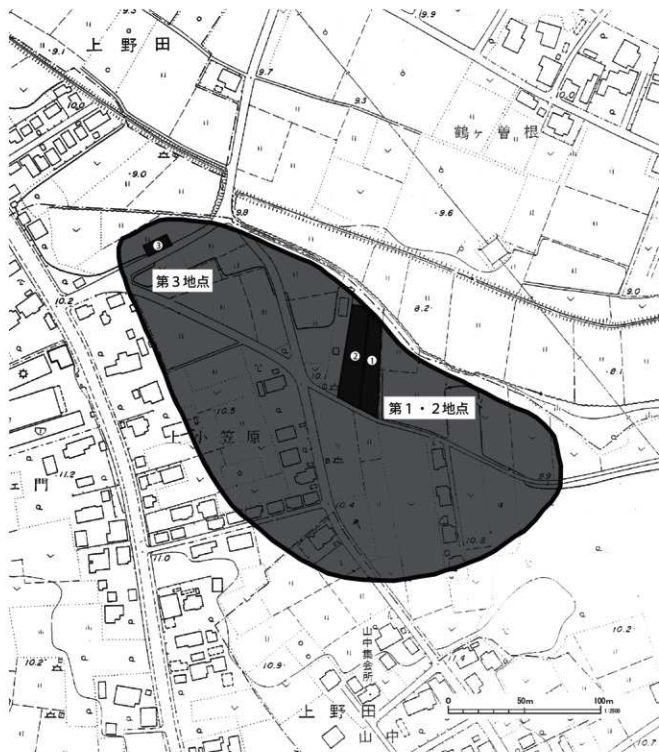
13世紀の以降の土坑群や溝、柱穴群が検出され、船載陶磁や和鏡、木製櫛などを出土しており、周辺に大徳寺旧堂宇や中世の集落が展開していた可能性が高い。

3 各地点の概要

上小笠原遺跡は白岡市彦兵衛字上小笠原及び下小笠原に所在する。付近は大宮台地慈恩寺支台西縁部にあたると、東方の中川低地から台地に深く入り込む主要な支谷「笠原沼の谷」に面した遺跡と見ることができる。この支谷は遺跡付近でも幅100m程を測り、遺跡はこの谷に北面する台地縁辺部に展開している。

第1・2地点は、北方の支谷に向かって緩やかに傾斜し、台地内部側となる南側で標高約10m、北方の支谷とは比高差1.5mほどである。しかし、遺構確認面であるソフトローム層は、とくにC4グリッドとE10グリッドを結ぶラインから急に北東方向へ傾斜を強めており、現地地形以上にメリハリのある埋没谷地形であることが判明した。興味深いのは、このライン付近に住居跡を始めとするほとんどの遺構が集中することである。縄文時代後期になると遺跡立地が台地緩斜面から低地(自然堤防)志向となることが知られているが(柳田ほか編1986)、当地点の主体時期も縄文時代後期前葉の堀之内式期であり、この指摘を裏付けるような状況といえよう。

埋没谷部分は黒色土が厚く堆積し、遺物包含層となっていた。同層中での遺構確認は困難で、下層のソフトローム層で行うこととなったが、住居跡などは突然柱穴プランが現れる有様であった。住居跡の本来



第2図 上小笠原遺跡の位置と発掘調査区

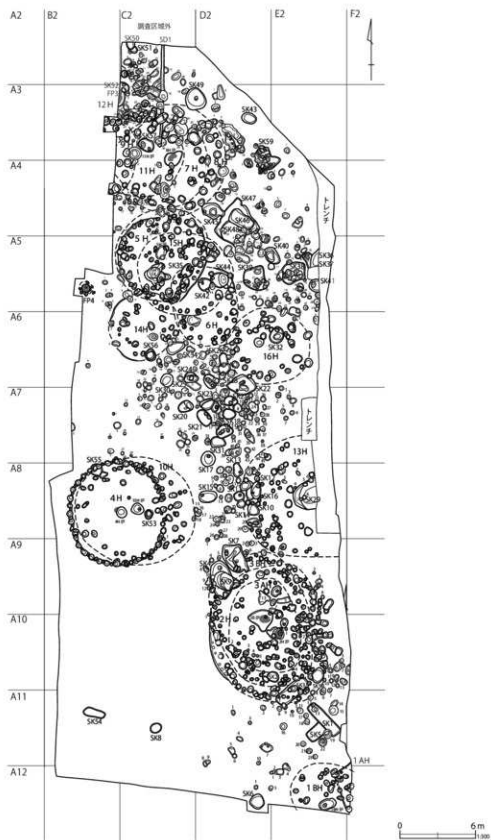
の生活面（壁の立ち上がり）が包含層中であつた可能性もあるが、炉検出のレベルから考えると、もともとそれほど掘り込みをもたない住居が多かつたのではないかと考える。また、おびたしい数のピットの中から整理作業時に新たに住居跡と認識したものも少なくない。最終的に18軒の住居跡と59基の土坑、2基の屋外炉を検出するに至つた。

調査区は常に湧水に悩まされ、調査開始が梅雨時期であったこともそれに拍車をかけた。排水トレンチやエンジンポンプを駆使したものの、夕立や大雨翌日は北半部が水没するなど、調査の進行を著しく妨げた。調査後半になってようやく地下水位が下がり、前半期に掘り上がらなかった住居跡の柱穴などはこの時期に完掘した。このような理由から、作業員の方々には暑さもあって過度の負担を強いたと思う。この場を借りてお礼を申し上げたい。

第3地点についても、当初遺跡の範囲外であったが、開発事業主の御理解により試掘調査を行ったところ、旧石器時代のナイフ形石器2点が出土した。出土したソフトローム層は現地形以上に北方へ傾斜しており、北側の支谷へかけて埋没谷地形となっていることが明らかになった。縄文時代後期の人々より遙か以前に、この谷沿いに獲物を求めて移動する狩人たちがいたのである。出土した旧石器であるが、該期の資料は市域でも白岡支台側で数例出土しているに過ぎず、慈恩寺支台側では市として初の出土例となった。支谷をはさんで対峙する逆井遺跡（宮代町）では細石刃を主とする旧石器時代のブロックが検出されている。同遺跡出土資料の中には、本遺跡と同じ珪質頁岩を素材とする資料も含まれている。わずか500mしか離れていない地点にある旧石器時代遺跡との関係性について、時期の隔たりがあるとはいえ、慈恩寺支台規模で考えるときには、注意を払う必要がある。何より白岡の黎明期を描き出す貴重な資料が追加された意義は大きい。なお当調査も、年末年始の寒風吹きすさぶ中、作業員の精力的な作業によりスムーズに終わることができた。調査中も傍らに待機していただいた開発事業主様を始め、関係者の方々にお礼を申し上げます。

引用文献

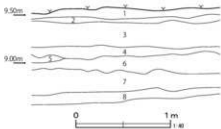
柳田敏司ほか編 1986 『川口市史 考古編』 川口市



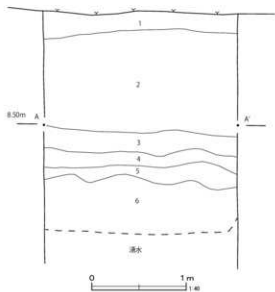
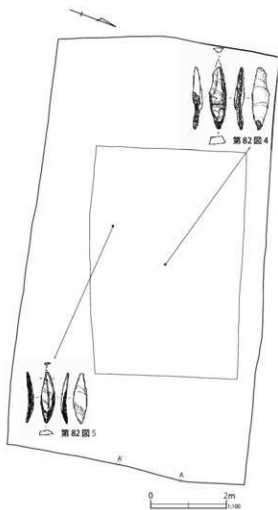
第3図 第1・2地点全測図

基本土層

- | | |
|----------|--|
| 1 灰褐色土層 | しまり・粘性なし ローム粒φ1~5mm、炭化物粒φ1mm多く含む(耕作土) |
| 2 橙褐色土層 | しまりあり 粘性なし ローム粒φ1~3mm非常に多く、炭化物粒φ1~3mm多く含む(水田床土) |
| 3 暗褐色土層 | しまりなし 粘性なし ローム粒φ1~5mm、ロームブロックφ1~5cm含む 炭土粒φ1~5mm少量、炭化物粒φ1~5mm多く含む |
| 4 黒色土層 | しまり・粘性あり ロームブロックφ1~8cm多く含む |
| 5 暗茶褐色土層 | しまり・粘性あり ロームブロックφ1~2cm多く含む |
| 6 暗茶褐色土層 | しまり・粘性あり ロームブロックφ2~5cm非常に多い |
| 7 黒褐色土層 | 硬土粒φ3mm極少量、炭化物粒含む |
| 8 黒褐色土層 | しまり・粘性あり ロームブロックφ1~6cm含む 鉄分が下層に集中する |
| 9 黒褐色土層 | しまり強・粘性あり ロームブロックφ1~5mm多く含む |



第4図 第1・2地点基本層序



基本土層

- | | |
|----------|---|
| 1 暗褐色土層 | しまりなし 粘性あり(水田耕作土) |
| 2 黒色土層 | しまり・粘性やや有 マンガン沈着 軟らかい |
| 3 暗黄褐色土層 | しまりあり 粘性やや有 2層と4層との境界り |
| 4 淡黄褐色土層 | しまり・粘性やや有 ソフトローム層、石礫出土層 |
| 5 淡黄褐色土層 | しまり・粘性あり ハードローム層 |
| 6 淡黒色土層 | 部分所にマンガン付着 硬い
しまり・粘性あり、ブランクバンド層 非常に硬い
下層は湧水で湿り抜けず |

第5図 第3地点全測図及び基本土層

III 調査の成果

1 第1・2地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1A・B号住居跡 (第6・7図)

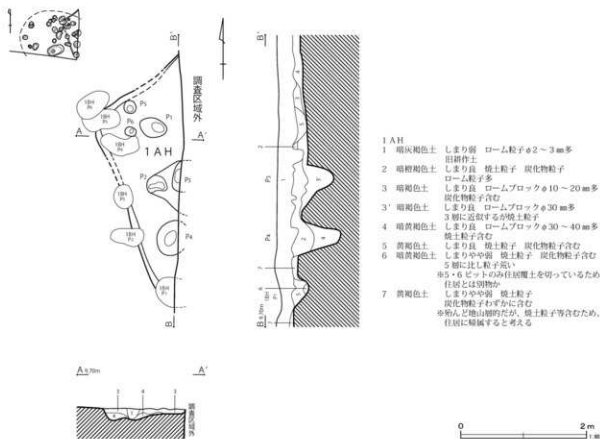
調査区南東隅の E12グリッドで検出され大半は区外である。検出時は住居跡プランと柱穴との関係がつかめず、1軒の住居跡の拡張関係として A 号住・B 号住に分けて捉えていたが、連続性があるかどうかは判然としない。A 号住は一辺が4m ほどの方形基調のプランと思われ、掘り込みは20cmほどである。炉は調査区内では確認できていない。

B 号住は直径4~5m ほどの楕円形基調のプランと思われる。A 号住との新旧関係は不明である。掘り込みは検出されず、柱穴配置に規則性は見られない。調査区南辺寄りに炉が検出されている。

当住居跡付近からは縄文時代後期前葉の堀之内1式土器が出土しており、該期の所産と思われる。

出土遺物 (第8図1~10)

土器 1~6は深鉢口縁部で、口唇直下に沈線が巡る。1は波状口縁となるもので、波頂部内外面に円形刺突が施され、外面に沈線による懸垂文が垂下する。7~10は胴部で、7は蛇行沈線を挟んでハの字状沈線が垂下し、9は蕨手文が施される。全て縄文時代後期前葉の堀之内1式土器である。



第6図 第1A号住居跡

第2号住居跡（第9図）

調査区南東のD9、10、E9、10グリッドにわたって検出され、本調査区で最も大型の住居跡である。後述する3A・B号住と重複し、正確な新旧関係は不明だが、これらの拡張後の様態とも考えられる。平面形は、壁柱穴列によって西側（奥壁側）が円弧を描き、東側（出入口部側）が直線基調となるD字状を呈する。東西径10.7×南北径10.3mを測る。出入口部にはハの字の対ピットをもつ。床面までの掘り込みは、南西部で10cmほど認められた以外は把握できなかった。これは断面図で分かるとおり、当所付近の遺構確認面（ソフトローム層）は緩やかに北東方向へ傾斜しているため、当住居跡は斜面上位側の南西部をわずかに掘り込んだ以外は、本来掘り込みをもたない構造であったと思われる。床面は南西部一帯が硬化していたほかは、全般に未発達であった。床面中央出入口部寄りに地床炉をもち、播鉢状で焼土が発達していた。

当住居跡は炉より奥壁寄りの柱穴配置に特徴がある。すなわち、主柱と見られる柱穴（P27・30・31・35・40・45・51・55・60）が約1.5～2m間隔で並ぶ間に、径の小ぶりな支柱と思われる柱穴を3つずつ、主柱より外側へオフセットして位置するという規則性が認められるのである。この関係は深さにも表れており、主柱は深さ1～1.3mと深いのに対し、支柱は0.5m前後という共通性がある。ただし炉より出入口側の柱穴には規則性はあまりないため、奥壁側と出入口側で異なる壁構造だった可能性がある。

当住居跡は前述のように掘り込みをほとんどもたないため、帰属する遺物の認定が困難だったが、概ね縄文時代後期前葉の堀之内1式期の所産と思われる。

出土遺物（第10図1～44、第11図1～3）

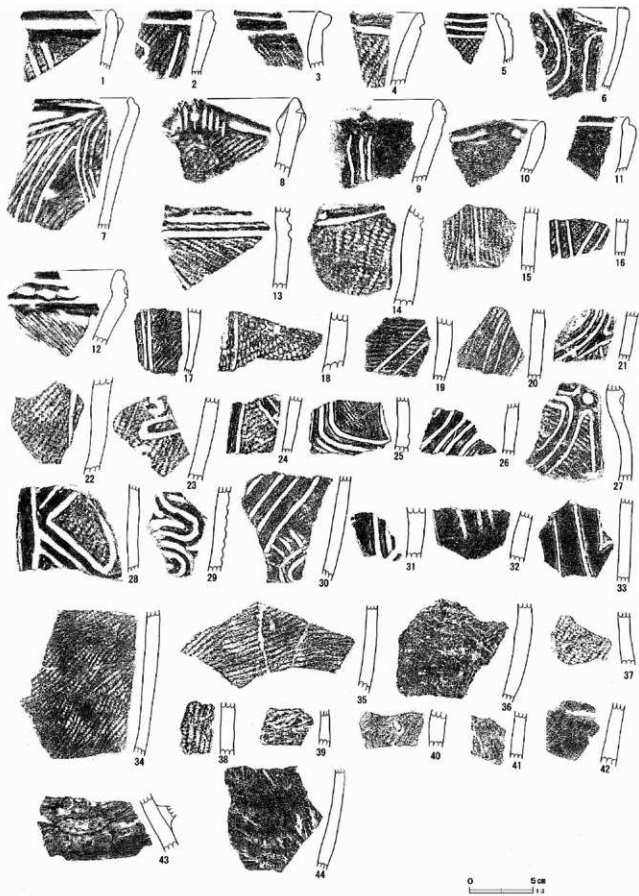
土器 第10図1～5・7・8は深鉢口縁部のうち、地文に縄文をもつものである。口唇直下に沈線が巡るのを標準とする。1・2・7は蛇行沈線、ハの字状沈線が垂下する。8は波状口縁となる資料で、波頂部は肥厚し、円形刺突の両側に縦位の短沈線が施され、内面にも刺突を有する。6は波状口縁をもちJ字状の沈線モチーフが展開する。9～12は深鉢のうち口縁部以下を無文とし頸部が括れる器形のものである。9・10は波状口縁で、9は波頂部下に三本沈線の懸垂文が垂下する。12は口縁直下の沈線間に列点を充填する。13～20・22・23は深鉢胴部で、16・19では縄文地文上に斜行沈線が、20ではハの字状沈線、23では蛇行沈線などが施される。21・24～28は沈線間の地文を磨り消し、パネル状の区画文を描出するものである。29～32は地文に縄文をもたず、多重の沈線でモチーフを描くものである。33は沈線でJ字状に区画を描出するものと思われる。34～39は縄文のみ看取され、40～44は無文の資料である。40では、斜位の刺突が認められる。第11図1は土製の蓋で、つまみの頂部は凹みとなる。推定径7.9cm、器高2.2cmを測る。内面は扁平で反りは認められない。全体に無文となるが、整形は比較的丁寧である。

石器 第11図2は炉跡から出土した磨石兼凹石で、表裏面中央に敲打による直径約2.5cm、深さ約0.8cmの窪みが認められる。周縁はよく敲打され、石鉢状に整形されている。3は磨石で、側縁下端部に顕著に擦痕が認められる。

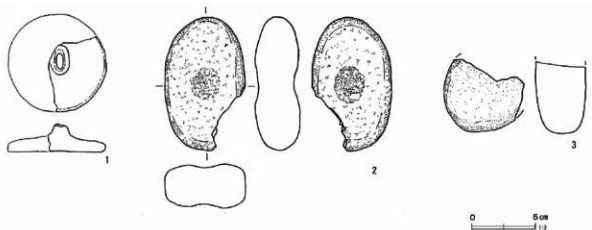
第3A・B号住居跡（第12・13図）

両住居跡とも第2号住居跡の内側やや北側にずれて重複する。いずれも2号住の拡張前の形態の可能性があるが、3A・B号住間の新旧は不明である。

第3A号住居跡は最も内側に位置し、平面形は南北方向に膨らむ楕円形を呈し、長径7.4×短径5.7mを



第10图 第2号住居跡出土遺物 (1)



第11図 第2号住居跡出土遺物(2)

測る。床面の掘り込みはない。柱穴は南半部に偏り、配置に規則性は認められない。深さもP34が2m超と突出して深く、P20・21・23・27が1m内外、ほかは概ね0.5m以下と浅い。P3からは深鉢形土器1個体が廃棄された状態で出土した(第13図)。

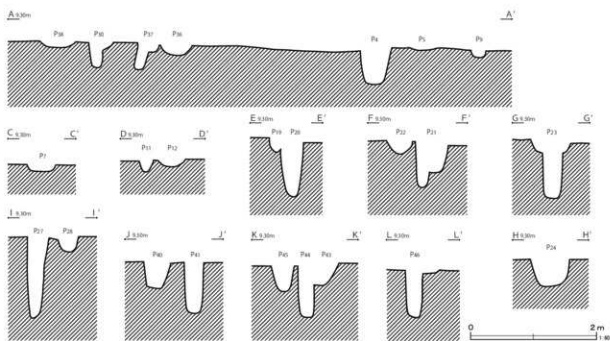
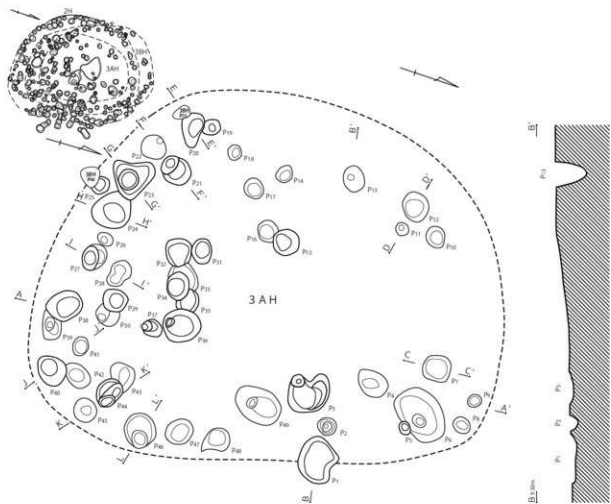
第3B号住居跡は3A号住よりも一回り大きく、長径10.3×短径8.7mの楕円形を呈する。2号住と同様に東側が出入口部となり、P1~4、P70~75などからなる対ピットをもつ。床面の掘り込みはない。中央に炬をもち、掘り込みは深くないが焼土が発達していた。柱穴は壁柱穴形態で、3A号住よりも整然としている。深さは0.5m前後である。

3A・B号住とも、出土遺物の帰属判断は困難だったが、縄文時代後期前葉の堀之内1式土器を主体とする。2号住と同様相を同じくすることから、3軒は連続的に営まれた住居跡と推定される。

出土遺物 (第14図1、第16図1~50)

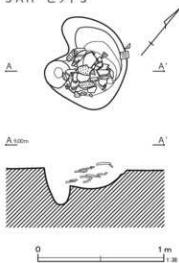
土器 第14図1は3A号住居跡P3から出土した平縁深鉢で、推定径33.6cm、現存高39.8cm、推定高46cmを測る。幅狭の口縁部下が括れ、胴上半部が緩く張る。やや外を開く口唇部に1条の沈線が引かれ、地文に単節縄文LRを横位施文したのち頸部付近から6単位の蕨手文を垂下させる。

第16図1~28は縄文を地文とし、沈線によるモチーフをもつものである。1~7は口縁部で、1~3・6・7は口唇部直下に横位の沈線が施される。8~28は胴部資料で、15~17は蕨手文、ハの字状沈線文が垂下するものである。18は渦巻状モチーフが横位連結するものと思われる。20~22・24は懸垂文間に斜行沈線や三角状のモチーフを配するものである。23は鉤の手状のモチーフが描かれる。25~28は縄文のみが見られる。25・26は同一個体の可能性が高い。原体は0段の太さの異なる単節縄文であろう。29~49は地文をもたず沈線のモチーフのみが認められる一群である。29~38は口縁部で、口縁直下に横位沈線が巡る資料が多いが、30は沈線ではなく円形刺突が巡り、波状線となる31・32は波頂部の円形刺突を起点として沈線が巡る。34~36は無文の口縁部をもつ壘形器形のものであろう。42・43は2条1組の沈線で曲線状モチーフを描く。46は鋭利な描線で三角形モチーフを描くもので、47は集合沈線が粗雑に蛇行垂下するものである。48は焼成後穿孔の円孔1孔が認められるもの、49は口縁付近の資料と思われ、肥厚させた粘土帯上に1条の横位沈線と平行する半截竹管による刺突列を施す。50は深鉢の底部である。



第12图 第3A号住居跡(1)

3AH ビット3



第13図 第3A号住居跡 (2)

第4号住居跡 (第17・18図)

調査区中央西寄りのB8、9グリッド、C8、9グリッドにかけて第4・10号住居跡が重複検出された。規模としては大型の部類といえよう。10号住が古く4号住が新しい。当グリッド付近は調査区内でも標高が高いエリアで、調査前の陸田造成による削平で遺構確認面がブラックバンド層 (V層) となってしまった。両住居跡とも2号住・3B号住に次いで大型の住居跡である。

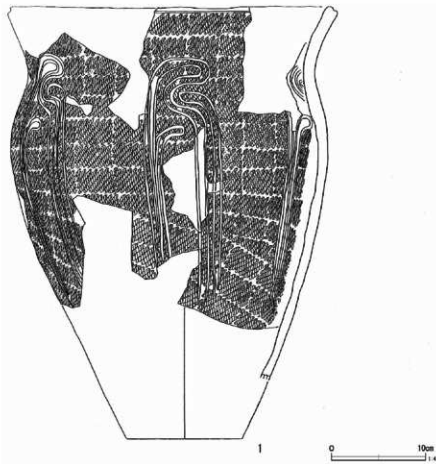
第4号住居跡は、長径9.1×短径8.7mの整った円形を呈する。北東側に出入口部となる対ビット (P1~3、P74~78) をもつ。当住居跡の特徴は、壁柱穴形態をとるなかで、主柱と思われる大きめの柱穴と、支柱と思われる一回り小さな柱穴が交互に並び、さらに奥壁側ではこれらの間が小溝で連結されることである。何らかの壁構造を示唆しているよう。深さにおいても主柱0.8m前後、支柱0.5m前後と定形性・相関関係が認められる。また柱穴のなかには底面中央が皿状に一段窪むものが複数あった。出入口部の対ビットは2列に並行するもので、いずれも主柱穴なりに深い。床面は掘り込みが見

られないが、削平を考慮しても炉の検出レベルから本来ほとんどなかったと思われる。炉はしっかり掘り込まれたものが中央部に位置し、発達した焼土 (一部は西側へ張り出す) と周辺の床面硬化が顕著であった。

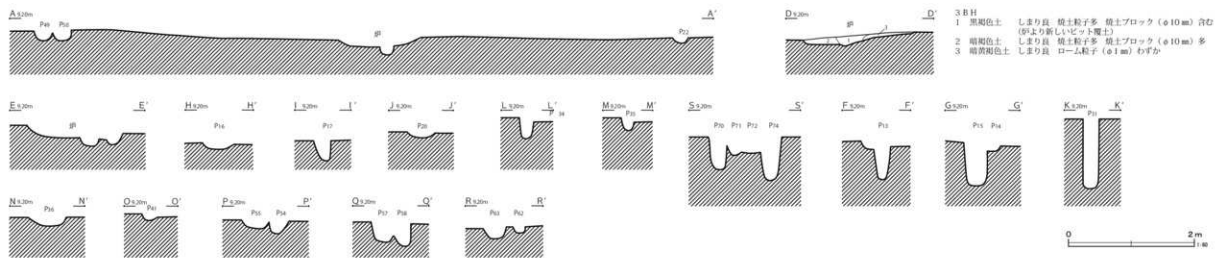
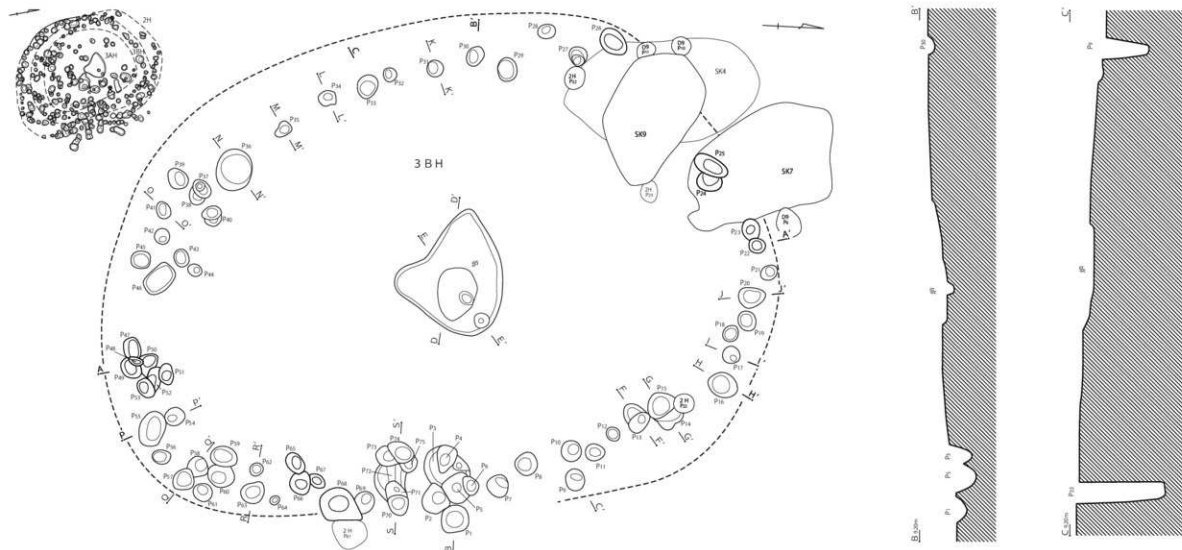
附属遺物は削平もあって明確にしえないが、柱穴から縄文時代後期前葉の堀之内1式土器が出土しており、該期の所産と思われる。

出土遺物 (第19図1~10)

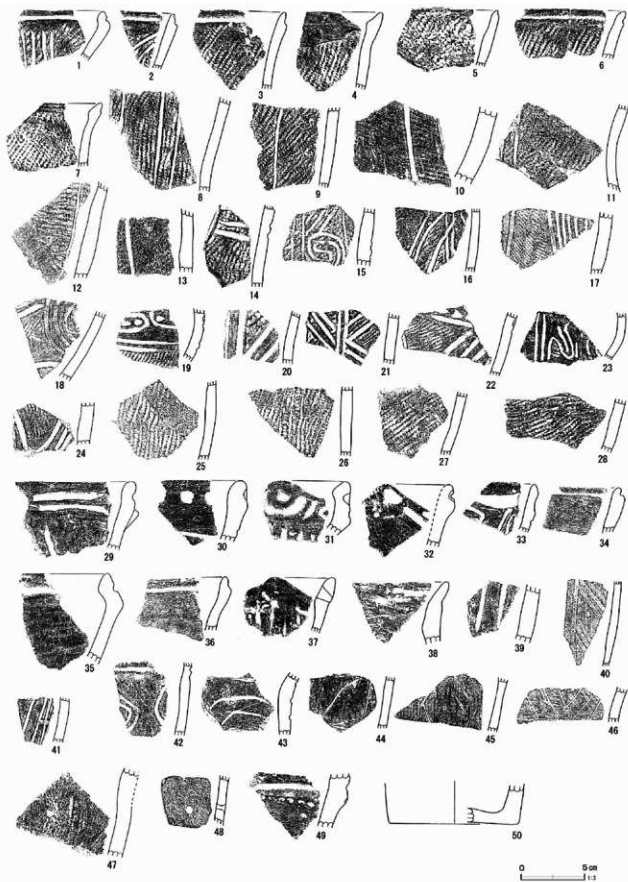
土器 1~10は縄文時代後期前葉の堀之内1式土器である。1~3は深鉢口縁部である。1は波状縁となるもので、波頂部の円形刺突に設けられた突起である。突起中央には直径1cm程の円孔が穿たれ、このまわ



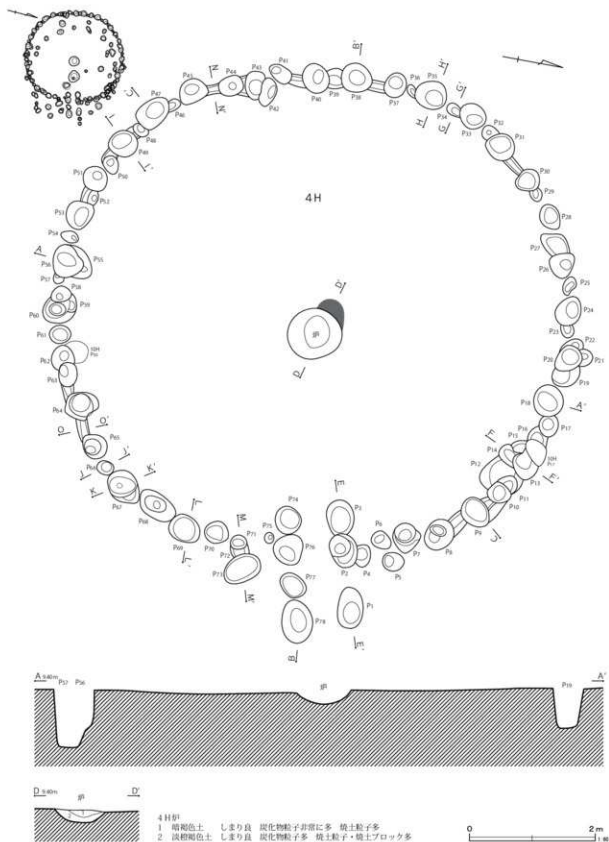
第14図 第3A・B号住居跡出土遺物 (1)



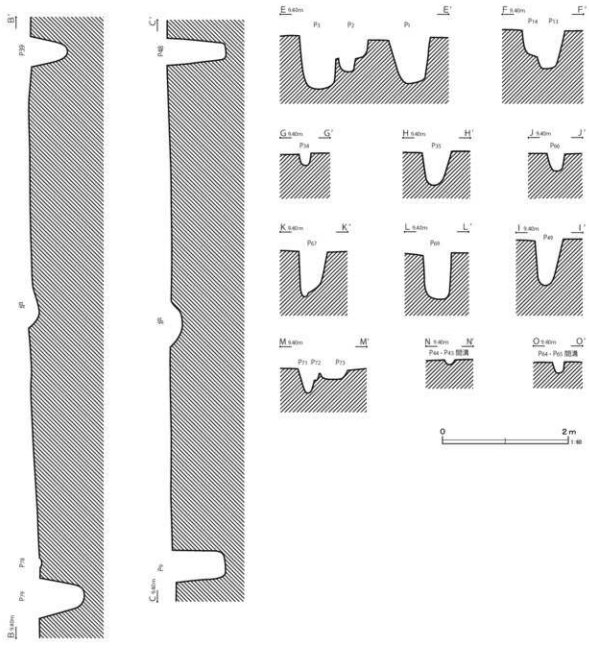
第15図 第3B号住居跡



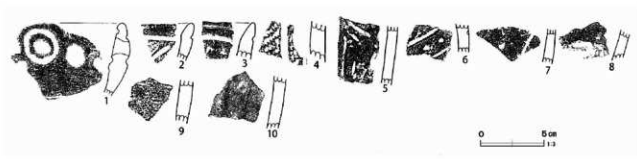
第16图 第3A·B号住居跡出土遺物



第17図 第4号住居跡 (1)



第18图 第4号住居跡 (2)



第19图 第4号住居跡出土遺物

りを環状の沈線が巡る。両脇には円形刺突が配される。2・3も口縁部の横位沈線下に何らかのモチーフが描かれるものであろう。4～10は胴部で、6・7は沈線間に刺突が充填される称名寺式系統の土器である。

第5号住居跡（第20～24図）

調査区北西寄りのC4、5、6グリッド、D5、6グリッド付近で検出された。6・14・15号住の3軒の住居跡と重複関係をもつ。4軒のうち明らかになっている新旧関係は5号住/14号住→6号住の順である。

第5号住居跡は長径7.8×短径7.1mの円形を呈し、主軸方向はN-58°-W、北東側に出入口部である対ビット（P16～22）をもつ。当調査地点のなかでは比較的明瞭な掘り込みをもつ住居跡だが、緩斜面に位置する関係か、壁の立ち上がりが確認されたのは斜面上位側（南～南西側）のみであった。柱穴は壁柱穴形態をとり、主柱と思われるビット（P7・11・24・31・39・45・58・62など）の間に、2本程度の支柱的なビットを外側へオフセットして配置（P28・30・32・34・43・44・49・53・57・64・1など）していることが分かる。床面は中央にかけて緩やかに傾斜し、中央やや対ビット寄りに炬を設ける。炬は楕円状にしっかりと掘り込まれ、焼土が発達していた。

当住居跡には廃絶時の状況が窺える。すなわち覆土中に多量の炭化材・焼土を含み、とくに柱穴列沿いでブロック状に検出された。また各柱穴覆土にも多量に混入することから、住居解体直後に部材の焼却が行われたと推定される。硬化していた床面もこれに起因するものであろう。なお床面炭化材（第20図資料№101・111）の放射性炭素年代測定を行ったところ、Na111が約3,800年前のクリ材と分析された（IV章参照）。

また、炬北側には土坑が存在し、覆土上層から多量の破砕礫が出土した（第23図）。土坑の覆土は住居跡のそれと一体であったことから、住居廃絶直後に掘り込まれ、遺物が廃棄されたのであろう。

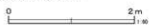
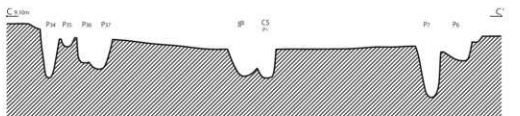
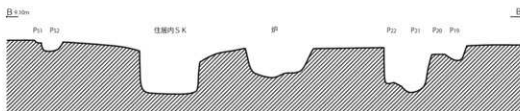
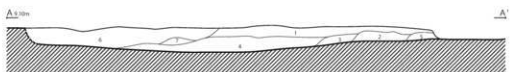
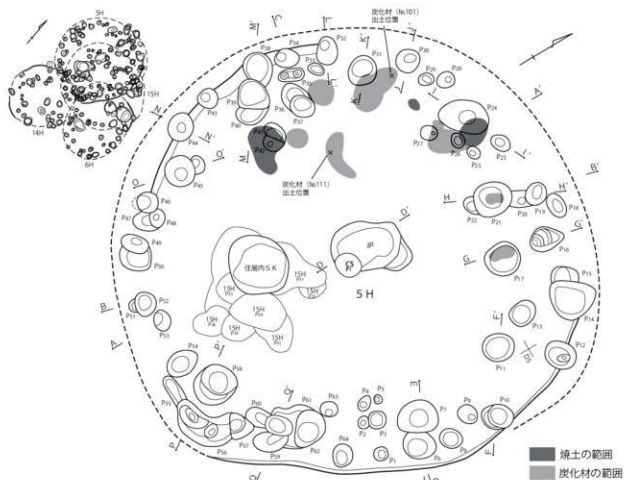
遺物は覆土中からまんべんなく出土し（第22・24～29図）、炭化材の年代測定からも当住居跡の帰属時期は縄文時代後期前葉の堀之内1式期と思われる。

出土遺物（第24図1～4、第25図1～39、第26図1～35、第27図1～34、第28図1～8、第29図1・2）

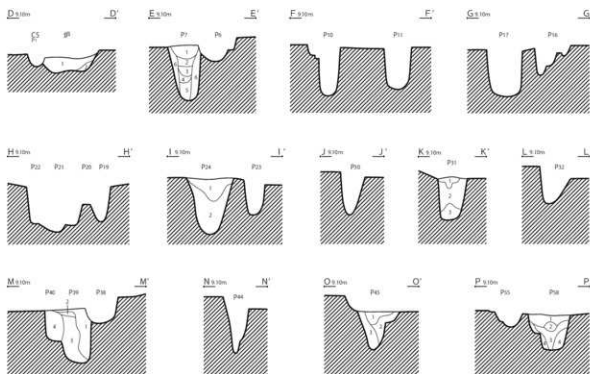
土器 第24図1は注口土器で、口径7.5cm、胴部の最大径は17cm、器高16.4cm（突起部を含む）を測る。器形は丸みを帯びた算盤玉状で、胴最大径部に隆帯が巡り、上半部側面に渦巻状のモチーフを、注口・把手方向の付け根に円環状のモチーフを配する。隆帯の端部や交点には円形刺突が施される。器面は丁寧に磨かれ、注口部と胴部下半に二次被熱が認められる。器面の剥落はこれによるものと考えられる。2は推定口径33.8cm、現存高27.6cm、推定高40cmを測る甕形土器である。口縁部は外反し、頸部以下が緩く張る。口縁部は無文で、頸部以下に単節LR縦位の縄文施文後、円形刺突を起点としてハの字状に3本1組の沈線を垂下させる。沈線間は地文が調整される。3は大形の壺の胴部で、現存高14.5cm、現存部の最大径30.8cmを測る。胴最大径部に隆帯を巡らせ、上半部に3条1組の沈線によるモチーフが描かれる文様体をもつ。無文の胴下半部は斜位の粗い調整が施され、輪積み痕が部分的に残る。4は甕ないし鉢形土器の底部で、底径9.2cm、現存高14cmを測る。外面は無文で、内面は粗雑な調整のため輪積み痕が残っている。

第25図1～3は深鉢胴部で、2本の沈線でJ字文・渦巻状文を描出し、縄文が充填される。縄文時代後期初頭の称名寺1式ないし並行する加曾利E式系統の土器であろう。

4～39と第26図1～35、第27図1～34は縄文時代後期前葉の堀之内式土器である。4～17・35・36は深鉢口縁部で、縄文を地文に直線状の懸垂文（7・9・15）、蕨手文（8・12・14）、対弧状沈線（13）などが施さ



第20図 第5号住居跡 (1)



5H(A-A')

- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | しまり良 ローム粒子φ1~2mm
炭化物粒子・焼土粒子多 |
| 2 暗褐色土 | しまり良 1層より黒み強い ローム粒子φ1~2mm
焼土粒子多 炭化物粒子・炭化材非常に多 |
| 3 暗褐色土 | しまり良 2層に近似 2層より炭化物がやや少ない |
| 4 暗褐色土 | しまり良 ローム粒子φ1~2mm 炭化物粒子
焼土粒子多 ロームブロックφ10mmわずか
1層より黒み強い |
| 5 暗褐色土 | しまり良 焼土粒子多 炭化物粒子含む |
| 6 暗褐色土 | しまり良 ローム粒子φ1~2mm 炭化物粒子
焼土粒子多 1層より黒み強い 4層に近似 |
| 7 暗褐色土 | しまり良 ローム粒子φ1~3mm多 焼土粒子わずか
4・6層より明らかに色調明る |

G'

- | | |
|--------|----------------------|
| 1 淡褐色土 | しまり良 砂礫土 焼土粒子・同ブロック多 |
| 2 棕色土 | 焼土ブロック多 |

P7

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 | しまり良 ローム粒子φ1mm多 炭化材含む |
| 2 暗褐色土 | しまり良 焼土粒子多 同ブロックφ5mm多
炭化物粒子含む |
| 3 焼土ブロック層 | しまり良 焼土ブロックφ50mm主体 炭化物粒子含む |
| 4 暗褐色土 | しまり良 焼土ブロックφ5mm多 2層に近似 |
| 5 焼土層 | しまり良 3層に近似するが焼土が均質に堆積 |
| 6 暗褐色土 | しまり良 焼土粒子多
ロームブロックφ20~30mmわずか |

P24

- | | |
|---------|---------------------------------------|
| 1 淡黒褐色土 | しまり良 焼土粒子非常に多
ローム粒子φ1~2mm多 炭化物粒子含む |
| 2 暗褐色土 | しまり良 粘性あり
ブラックロームブロックφ20~30mmわずか |

P31

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 淡黒褐色土 | しまり良 炭化材・炭化物粒子非常に多 焼土粒子含む |
| 2 黄褐色土 | しまり良 炭化材・炭化物粒子・焼土粒子含む |
| 3 黄褐色土 | しまり良 粘性あり 焼土ブロックφ50mm含む |

P39・40

- | | |
|--------|---|
| 1 黒褐色土 | しまり良 粘性中や有 ローム粒子φ1~2mm多
炭化物粒子・炭化材・焼土粒子含む |
| 2 黄褐色土 | しまり良 ローム粒子φ4mmわずか 焼土粒子含む
P39のほ 粗粒的、層が |
| 3 黄褐色土 | しまり良 粘性あり ローム粒子φ1~2mm多
同ブロックφ10~20mm多 |
| 4 暗褐色土 | しまり良 粘性あり
ロームブロックφ10~20mmわずか (P40覆土) |

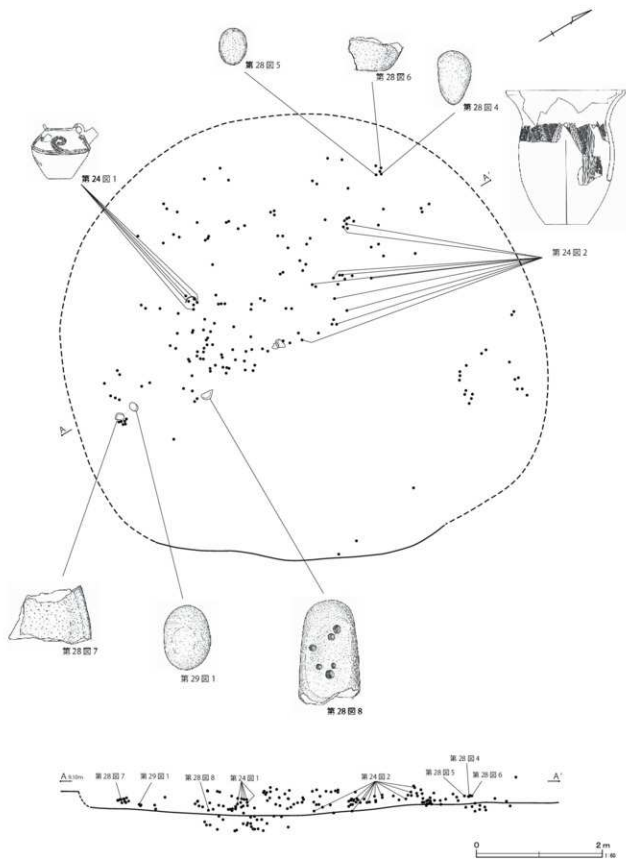
P45

- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | しまり良 ローム粒子φ1~2mm多
同ブロックφ1mmわずか 炭化材含む |
| 2 明褐色土 | しまり良 ロームブロックφ20~30mm少
炭化物粒子含む |
| 3 明褐色土 | しまり良 1層と2層との中間的な色合い
ローム粒子φ1~2mm多 |

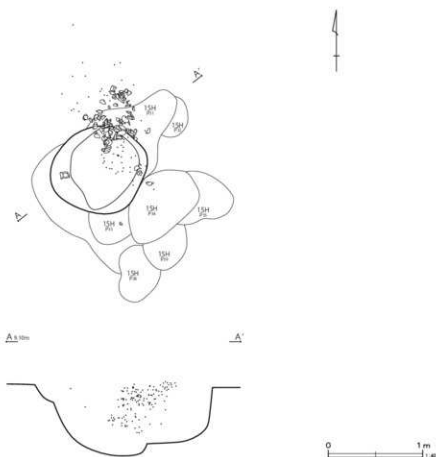
P58

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 1 淡黒褐色土 | しまり良 焼土粒子多 ローム粒子φ2~3mm多
炭化材少 |
| 2 焼土ブロック層 | しまり良 φ30mmほどの焼土ブロック多 炭化材含む |
| 3 暗褐色土 | しまり良 焼土粒子多 |
| 4 暗褐色土 | しまり良 焼土粒子わずか |

第21図 第5号住居跡 (2)



第22图 第5号住居跡遺物分布图



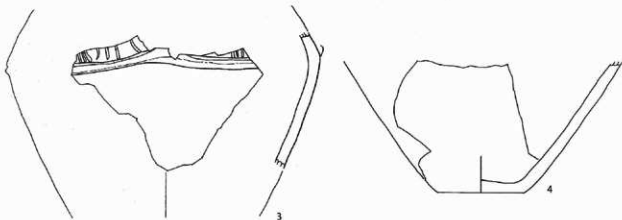
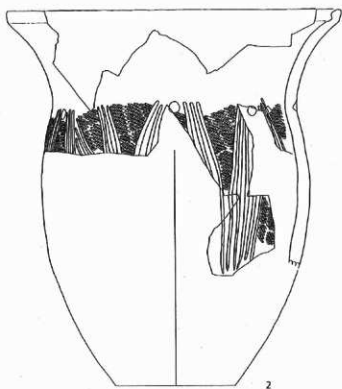
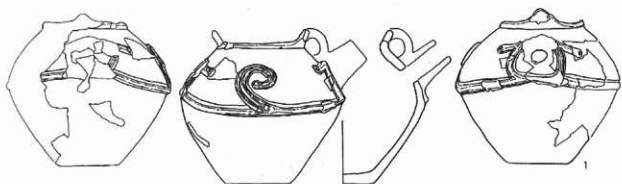
第23図 第5号住居跡礫分布図

れ、このようなモチーフの両側に斜行沈線が付加される（9・13・16など）。35はH状磨消文が配される。18～34・37～39と第26図1～3はこれらの胴部であろう。

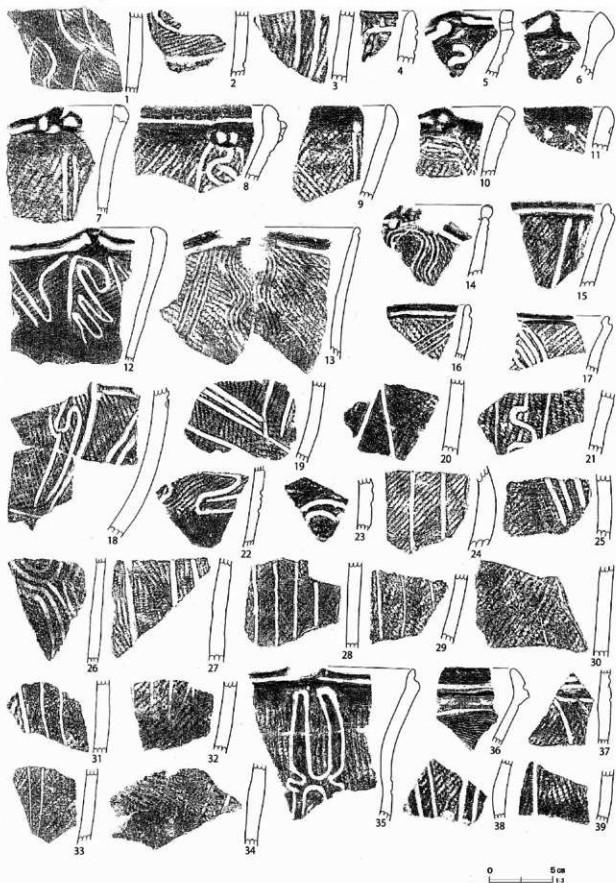
第26図4～9は、無文の口縁部をもち頭部で括れるタイプの深鉢胴部である。縄文地文上に逆U字状の沈線（4・5）、蕨手文（8）、ハの字状沈線（9）などが施される。

10～35は深鉢のうち地文をもたない一群で、10～15は2本組の沈線でJ字ないしV字状のモチーフを描き、図となる部分に列点を充填するものである。16～21もこれに類する口縁部資料と思われる。22は注口土器の口縁部で、口唇部が外側に突出する。23は無文の口縁部に逆V字状の隆帯を添付し、微隆起線で区画した胴部以下にランダムな集合沈線を垂下させるものである。東北地方南部の網取式系譜の土器である。24～35は胴部で、Y字状懸垂文（28）や蕨手文（29）、先端が巻き込むJ字状沈線モチーフ（30・31）、斜行沈線（32・35）などバラエティがある。以上10～35は前段階の称名寺Ⅱ式の系譜上にある堀之内Ⅰ式土器である。

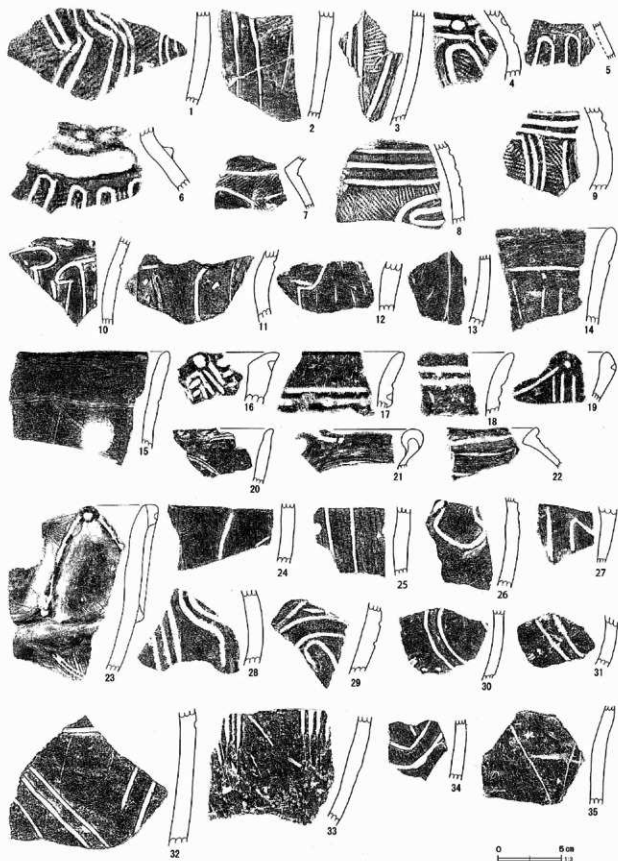
第27図1～3は深鉢頭部で、1は横位沈線に刺突列が並行し、2は刺突を伴う環状の貼付文が見られる。3も小さな環状貼付文が見られ、渦巻き状の隆帯モチーフの末端部と思われる。4～6は緩く膨らむ器形の深鉢胴部で、4は横位の隆帯が見られる。5は多重の対弧状懸垂文が見られる。6は沈線によるJ字状のモチーフが連接するものである。いずれも堀之内Ⅰ式に比定される。



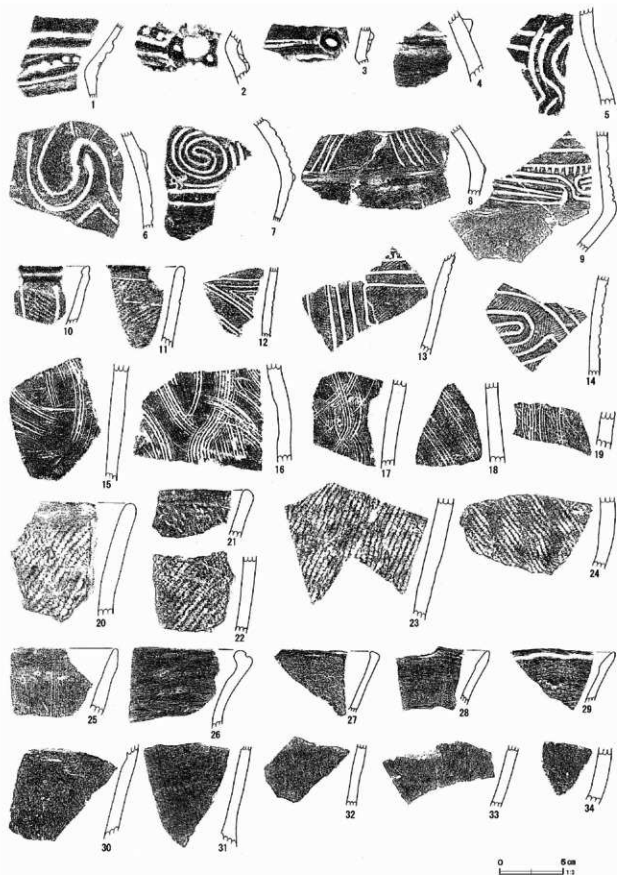
第24図 第5号住居跡出土遺物 (1)



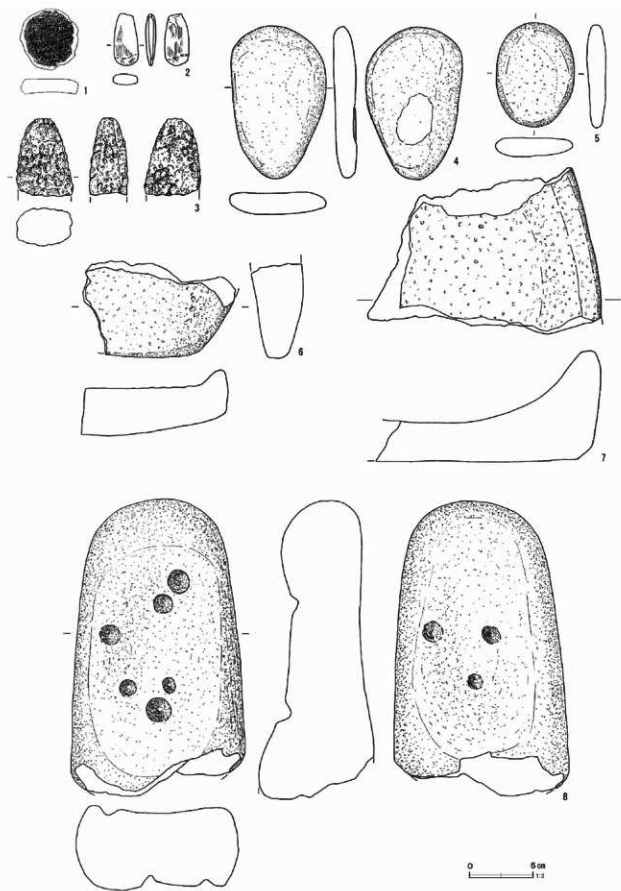
第25图 第5号住居跡出土遺物(2)



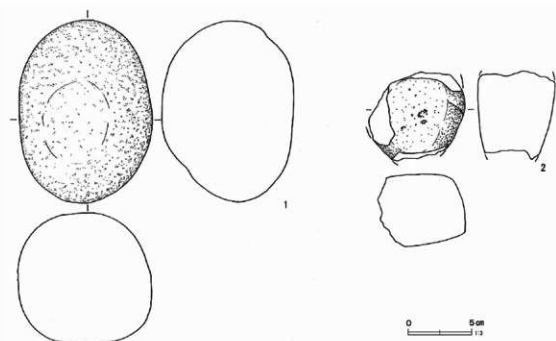
第26图 第5号住居跡出土遺物(3)



第27图 第5号住居跡出土遺物(4)



第28図 第5号住居跡出土遺物 (5)



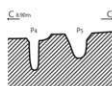
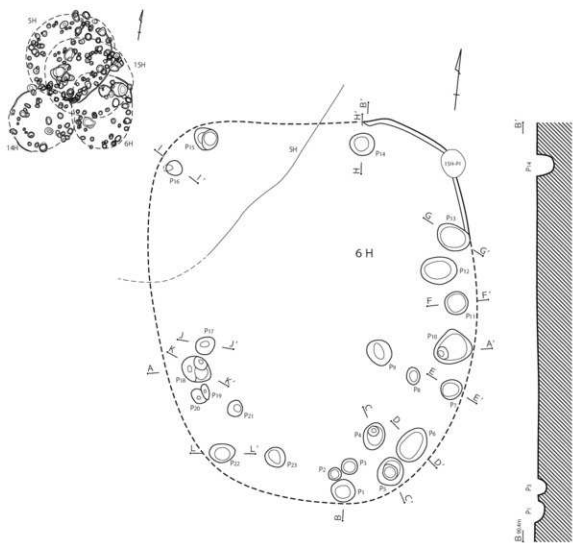
第29図 第5号住居跡出土遺物(6)

7・8は壺の肩部と思われる。7は渦巻文、8はハの字状沈線の下端部が見える。9は胴部下方に屈曲をもつもので、長円形の沈線モチーフで胴部文様帯下端を区画する。10・11は深鉢口縁部で、沈線区画内に縄文の充填されるモチーフをもつと思われる。12~14は縄文の充填された多重の三角形・四角形・渦巻形モチーフをもつものである。以上7~14は堀之内2式であろう。

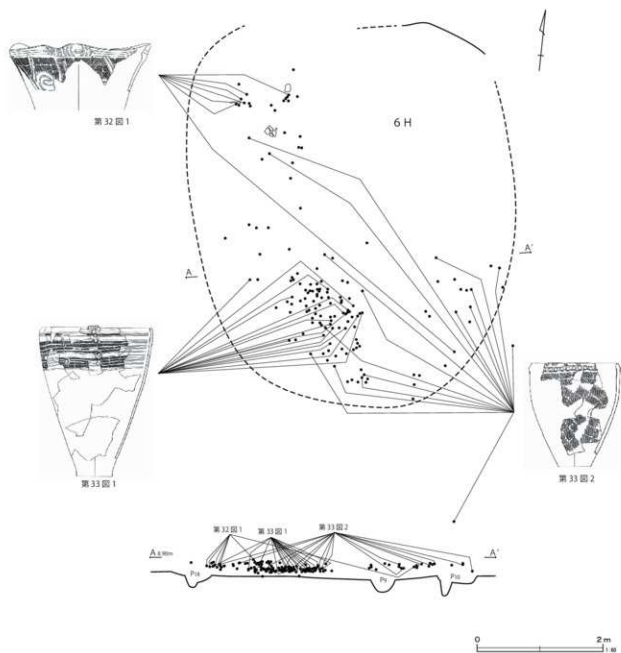
15~24は堀之内式期に伴う粗製土器である。15~19は粗雑な集合沈線が蛇行垂下する深鉢胴部である。20~24は縄文のみ施されるもの。25~34は無文のもので、25~29は前述第26図4~9のような深鉢土器の口縁部であろう。

土製品 第28図1は土製円盤である。表裏両面とも面取りされる。不整形円形を呈し、最大径5cmを測る。

石器 第28図2は磨製石斧である。該期に伴う小型のもので極めて丁寧に研磨されている。両側縁は明瞭な稜をもち、基端部には成形痕がわずかに残される。刃部は向きを変えて研磨され、円刃を成す。3は定角式磨製石斧で下端部を欠く。両側縁と基端部を形成した痕跡が認められることから、石材の特性によって著しい器面の劣化が認められる。4・5は扁平な礫を素材とした砥石と思われる。いずれも全体に被熱した痕跡があり、煤の付着が認められる。4の裏面中央部の剥落も被熱によるものと考えられる。6~8は石皿である。6・7は縁辺の形状を窺うことができる残欠である。6は側縁に丈の低いかえしが設けられるが、正面下端には、これが認められず、掃き出し口と思われる。7は6に比し、かえしの深いもので大型のものである磨面の使用も進行している。裏面は扁平に仕上げられており安定度は高い。粗い敲打痕が残される。側面は敲打後に研磨を経て仕上げられており、整形時の面取りが残っている。8はその特異な形状から石棒を転用した可能性が考えられる。下端部は欠損している。表裏両面とも石皿としての使用が認められる。両面に直径1~2cm、深さ0.5~1cmの凹みをもつ。側面には使用痕跡は認められなかった。第29図1・2は円礫を素材とした磨石である。1は面をもたず全体に良く磨れているが、特に下端部と右側縁の摩耗が顕著である。2は表裏に面をもち両面とも摩耗が著しい。また、被熱した痕跡が認められる。



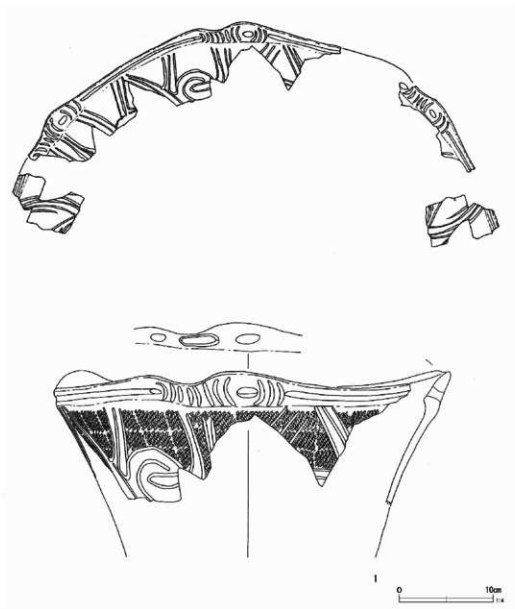
第30图 第6号住居跡



第31図 第6号住居跡遺物分布状況

第6号住居跡 (第30・31図)

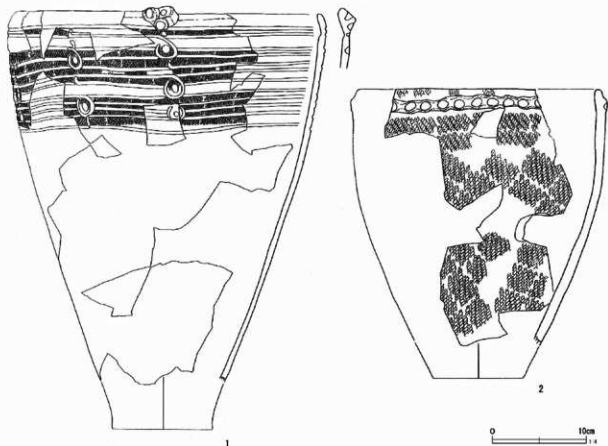
5号住の南東側に重複して位置する。上層の遺物包含層調査段階で5号住とともにおぼろげなプランとしては把握されていたが、土層断面での5号住との新旧把握は困難で、出土遺物で判断せざるを得なかった。当住居跡はローム面への掘り込みはほとんどなく、遺物分布、柱穴配置から長径6×短径5.2mほどの隅丸長方形を呈すると思われる。柱穴配置は南東～南西側に偏り、深さも一部を除き浅いものが多い。炉は検出されなかった。遺物は、住居跡南寄りに縄文時代後期中葉の加曾利 B1式土器が出土しており(第31図)、住居跡の平面形態と併せて該期の所産と思われる。



第32図 第6号住居跡出土遺物 (1)

出土遺物 (第32図1、第33図1・2、第34図1~37、第35図1~23)

土器 第32図1は縄文時代後期前葉の堀之内1式の深鉢口縁部である。緩やかに開く器形をもち、推定口径40.2cm、現存高14.1cmを測る。口唇部には3単位の小突起をもつが、展開図左端の突起のみ単独の山形で、他2単位は大小2連の緩波状形突起となるものと思われる。突起部は肥厚し、楕円孔の両側に対弧状沈線を施す。突起間をつなぐ横位沈線は深く施文され、内面に突出している。波状部の内面には沈線の楕円文をもつ。口縁部下にはX字状に入り組む渦巻状モチーフをもつものと思われ、モチーフ内は地文が調整される。



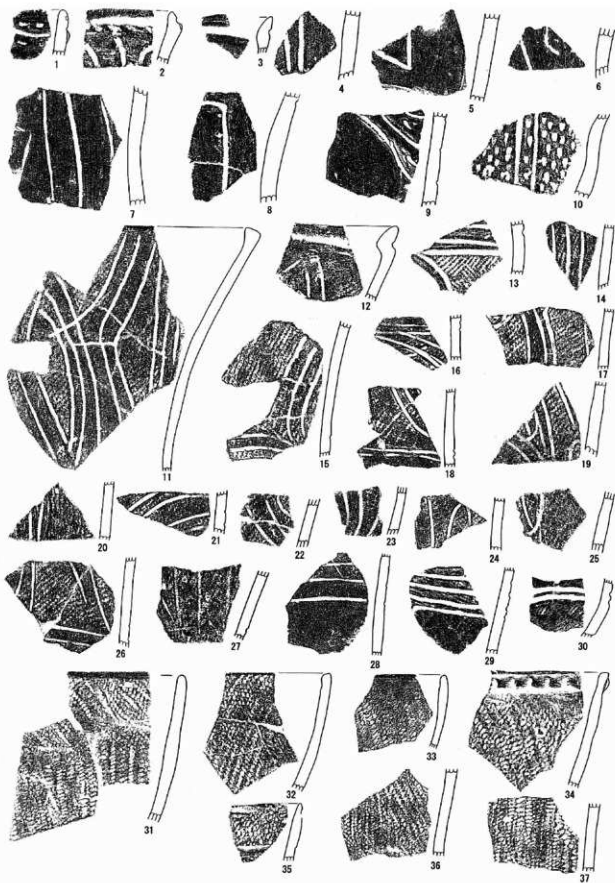
第33図 第6号住居跡出土遺物 (2)

第33図1・2は縄文後期中葉の加曾利B1式土器である。1は精製の深鉢で、底部から直線的に開き、口唇部が内屈する。推定口径32.2cm、現存高40cm、推定高45cmを測る。口縁部側面には円形刺突を有する貼付文を配する。胴上半部には沈線を重畳させ、横位回転の単節LR縄文を充填して3帯の縄文帯を形成する。沈線は口縁部貼付文下などで端部が巻き込み、2～3段の円形文となる。胴下半部は丁寧な縦位の磨きが施される。2は粗製の平縁深鉢で、口径24.6cm、現存高27.5cm、推定高31cmを測る。口縁部に指頭押圧の加えられた隆帯を巡らせ、地文に単節RL縄文を横位に施文する。

第34図1～9は沈線でJ字やV字状のモチーフを描く深鉢胴部である。1～3は口縁部、4～9は胴部である。1・2・9は図となる部分に列点を充填する。10は2本1組の沈線が垂下し、面的に列点が充填されるものである。10は北陸系三十稲場式の影響が見られる。11～27は後期前葉の堀之内1式土器で、縄文地文上に多重の沈線によるモチーフを描く。11は緩やかに外反する深鉢で、口唇内面が突出する。胴上半部に対弧状懸垂文、「く」の字状の懸垂文が垂下する。12は屈折した口唇部をもつ口縁部資料。以下、13～27などは該期に特有の蕨手文、ハの字状沈線、入組状の渦巻文が施されるものと思われる。28は胴部を巡る3条の沈線が観察される。29・30は後期中葉の加曾利B式で、沈線を重畳させ沈線間に縄文を充填する。

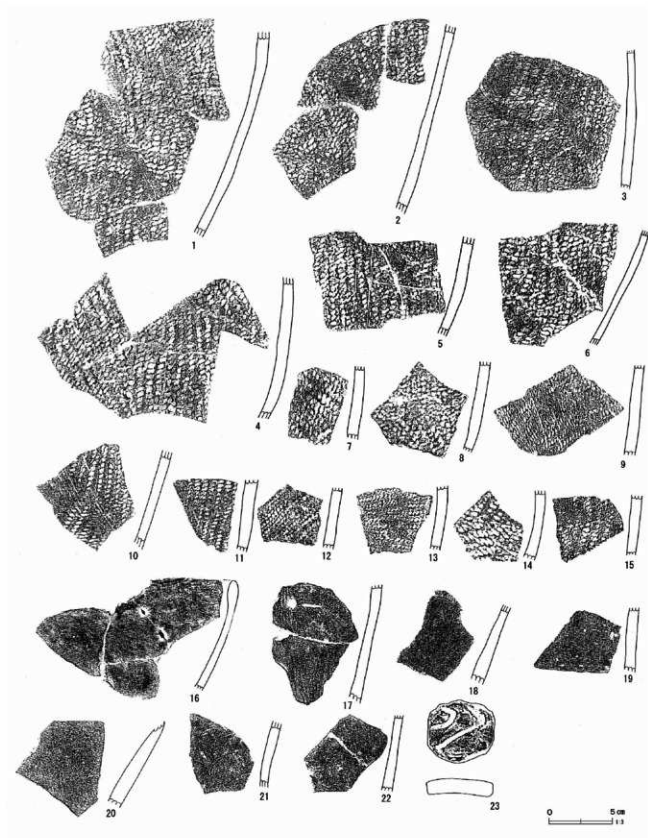
31～37と第35図1～15は加曾利B式に伴う粗製の深鉢形土器で、ある程度乾燥が進んだ器面に太目の縄文を施している。32は口唇内面に凹線が巡り、34は口唇直下に紐線文をもつ。16～22は無文のもので、16は口唇部がやや肥厚するものの、薄手に仕上げられている。

土製品 第35図23は土製円盤である。堀之内1式の深鉢胴部を転用しており、最大径5.2cmを測る。

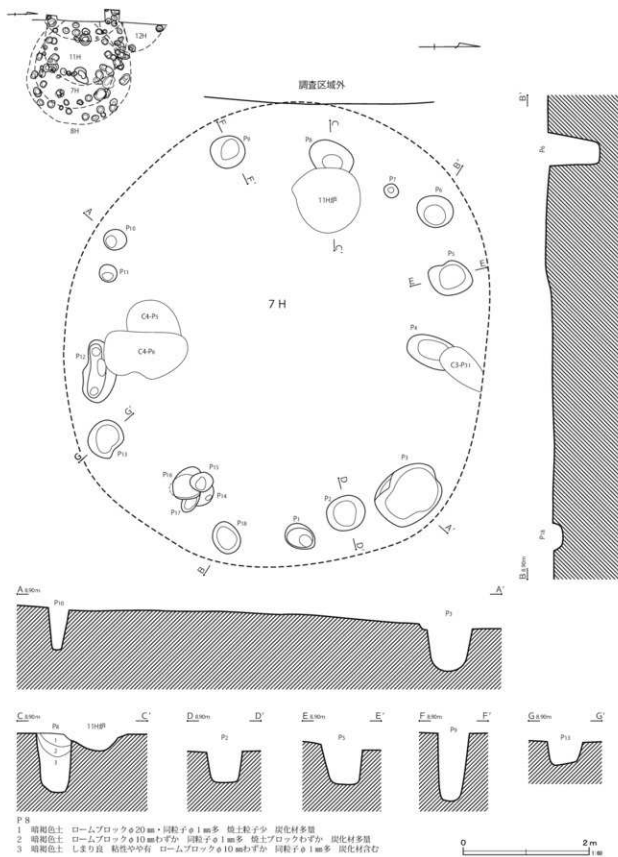


第34图 第6号住居跡出土遺物(3)

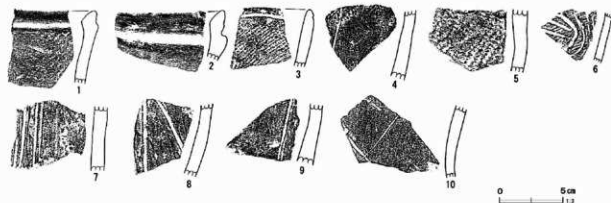
0 5cm
1:3



第35图 第6号住居跡出土遺物 (4)



第36図 第7号住居跡



第37図 第7号住居跡出土遺物

第7号住居跡 (第36図)

調査区北端の支谷に向かって標高がもっとも低くなる(約8.5m)、C2、3、4、D3、4グリッド付近で重複し合う。柱穴等の切り合いから明らかになっている新旧関係は、7号住→8号住→11号住→12号住である。いずれの住居跡も、遺構確認面であるソフトローム層上ですでに柱穴列が検出されてしまい、壁の立ち上がりの有無や使用時の床面状況は不明である。

当住居跡は8号住と同心円状に重複するが、両者の新旧関係は不明である。平面形は直径6.7mの円形を呈し、壁柱穴形態をとる。各柱穴はしっかり掘り込まれたものである。P8が後述の11号住の炉に切られている。本住居跡の炉は検出されなかった。

出土遺物 (第37図1~10)

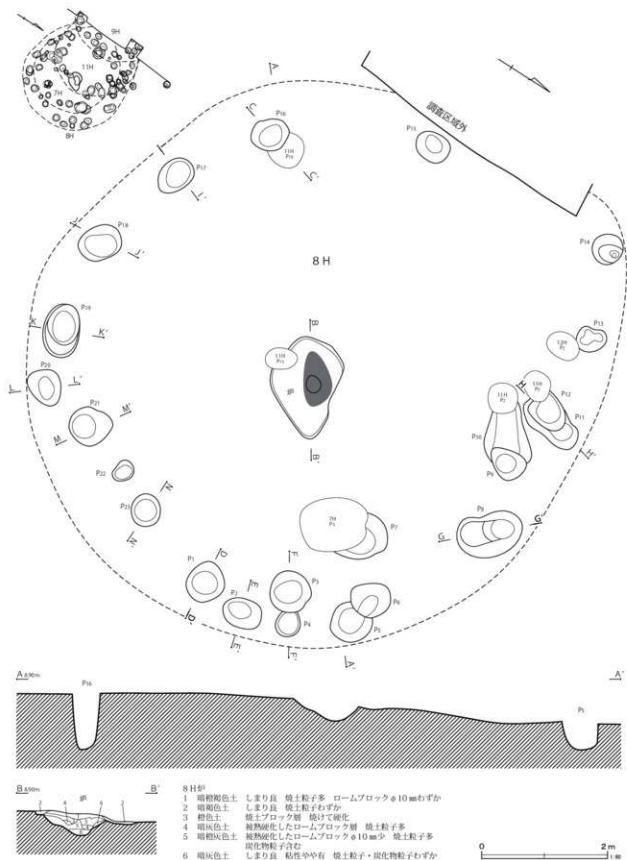
土器 1~3は深鉢口縁部で、口縁直下に沈線が巡る。4~10は深鉢胴部で、6は蛇形沈線が垂下する。3・5・7~10は縄文のみ、沈線のための粗製的な土器と思われる。いずれも縄文時代後期前葉の堀之内式に比定されよう。

第8号住居跡 (第38・39図)

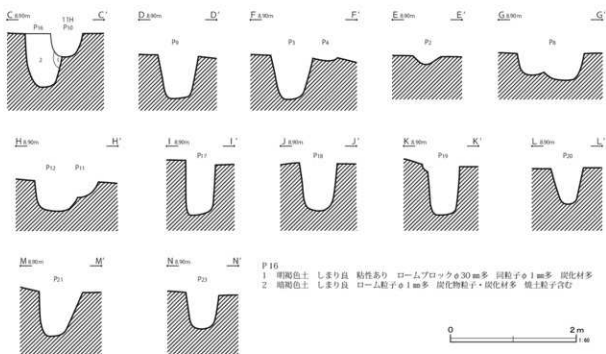
第8号住居跡は長径9.3×短径8.8mの円形を呈し大型といえよう。前述のとおり7号住との新旧関係は不明である。柱穴は東側縁にやや密に設けられ、南西のP16は11号住柱穴に切られている。中央北東寄りに炉が検出され、擋鉢状に掘り込まれ焼土が発達していた。

出土遺物 (第40図1~4)

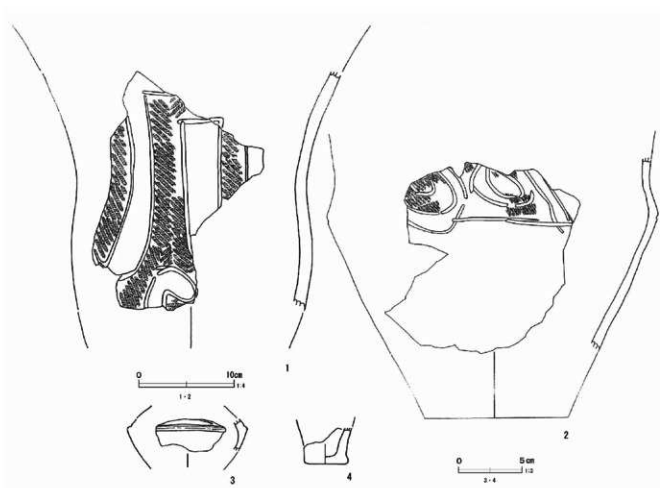
土器 1は深鉢胴部で、現存高24.8cm、現存部の最大径31.4cmを測る。胴部で緩く括れ上方に外半する器形となる。器面は沈線によりJ字状のモチーフを描き、図の部分にL[R3]の直前段多条の縄文を充填する。口縁部に幅の狭い文様帯をもつ可能性はあるものの胴部での分帯は行われぬものと思われ、縄文時代後期初頭の称名寺I式に比定されよう。2は縄文時代後期前半の堀之内I式期の深鉢の胴部片である。現存高20.2cm、現存部の最大径26.6cmを測る。無節Rの縄文を地文とし、沈線文を施した後、縄文を磨り消している。器面の最大径周辺には炭化物の付着が認められる。3は小型の注口土器と思われる。現存部の最大径9.4cm、現存高2.6cmを測る。体部に横位1条の隆帯が施される。4はミニチュア土器の底部片と思われる。底径3.1cm、現存高2.9cmを測る。



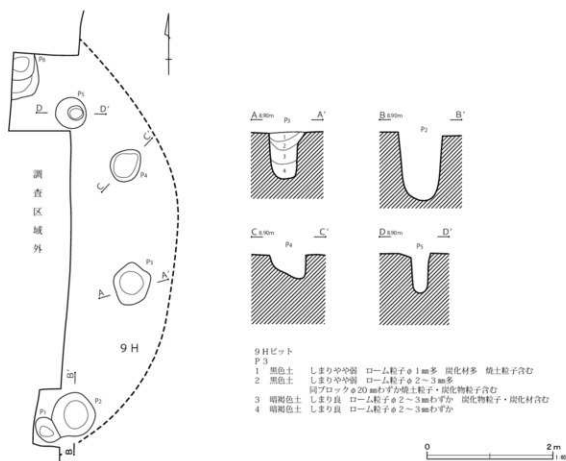
第38図 第8号住居跡 (1)



第39図 第8号住居跡 (2)



第40図 第8号住居跡出土物



第41図 第9号住居跡

第9～12号住居跡 (第41～45図)

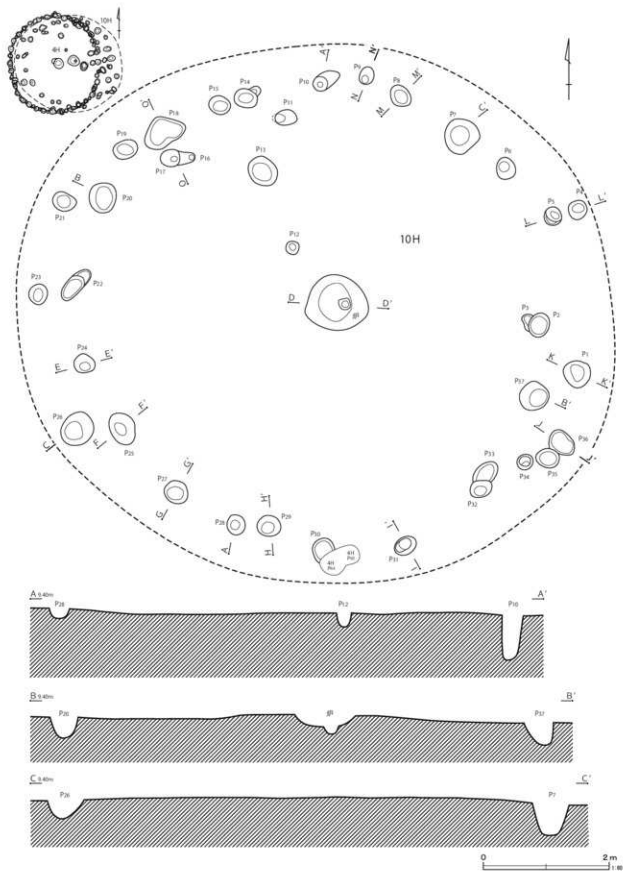
第10号住居跡は調査区中央西寄りのC、D8グリッド付近にあって、4号住と重複する。4号住の床面を精査していたところ、炉東側で別の炉が、また奥壁側の東寄りに当該住跡に伴わない柱穴列が検出された。この柱穴上層はローム土で貼床されていたことから、4号住に先立つ別の住居跡（10号住）が東側に重複することが判明した。両者は建て替え関係にあると推定される。10号住は長径9×短径7.6mのやや楕円形を呈し、南東側のP1～4付近が出入口部と思われる。柱穴配置はまばらで、形状や深さに4号住のような主柱・支柱関係は認められない。貼床層の明瞭な柱穴を第42・43図に掲載した。炉は床面ほぼ中央に位置し、4号住ほど焼土は発達していなかった。

複雑に重複し合う住居跡を一括する。

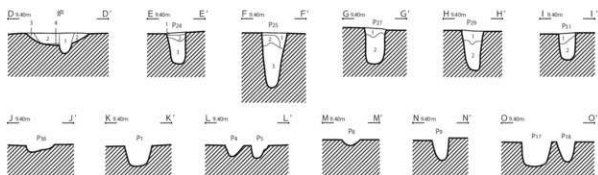
第9号住居跡は西側の大半が調査区外であり、11・12号住及び前述の7・8号住と重複するが、正確な規模や他の住居との新旧関係は不明である。平面形は円形基調と思われ、各柱穴は1m近く掘り込まれたしっかりしたものである。

第11号住居跡は7号住の西側に重複し、一部は調査区外となる。平面形は推定直径7mほどの円形を呈する。柱穴は外側に寄って配置され、良好に掘り込まれている。P10が8号住柱穴を切り、P5が後述の12号住柱穴に切られている。炉は住居中央に位置し、播鉢状に掘り込まれ焼土が発達していた。

第12号住居跡は重複住居群でも北側に位置し、西半が調査区外となるため、円形基調と思われるほかは正確な規模は不明である。柱穴はいずれもしっかり掘り込まれ、P2が11号住柱穴を切っている。調査区内では炉は検出されなかった。



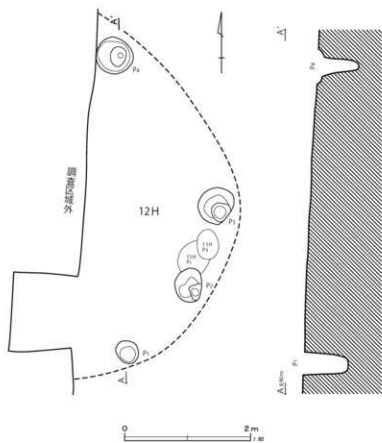
第42图 第10号住居跡(1)



- P23
- | | | |
|--------|-------|-----------------|
| 1 黒色土 | しまり貝 | ローム粒子φ20～30mm多 |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒子含 | 近辺以降のビット |
| 3 暗褐色土 | しまり貝 | ローム粒子φ10～40mm多 |
| 4 暗褐色土 | 焼土粒子含 | ロームブロックφ30mmわずか |
| | | 焼熟し硬化したローム土 |
| | | しまり貝 |
| | | ローム粒子φ1～2mm多 |
| | | 焼土粒子多 |
| | | ロームブロックφ10mmわずか |
- P27
- | | | |
|--------|------|--------------------|
| 1 黄褐色土 | しまり貝 | ビットをさく陥床層 |
| 2 暗褐色土 | しまり貝 | ロームブロックφ10～20mmわずか |
- P31
- | | | |
|--------|------|--------------|
| 1 黄褐色土 | しまり貝 | ローム土で埋めた層 |
| 2 暗褐色土 | しまり貝 | ローム粒子φ1～2mm多 |
- P24
- | | | |
|--------|------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | しまり貝 | ローム土だが鉄分比高のため赤い |
| 2 暗褐色土 | しまり貝 | ローム粒子φ1～2mm多 |
| 3 暗褐色土 | しまり貝 | ロームブロックφ20～30mmわずか |
- P25
- | | | | |
|---------|--------------------|--------------|------------------|
| 1 黄褐色土 | ロームブロックφ30～40mm | 土体層 | 陥床 |
| 2 黄褐色土 | ロームブロックφ20～30mmわずか | 同粒子φ1～2mmわずか | 炭化物粒子含む |
| 3 淡黒褐色土 | しまりや中割 | 粘性あり | ロームブロックφ30～60mm多 |
- P29
- | | | |
|--------|--------------------|--------|
| 1 黄褐色土 | しまり貝 | ローム粒子多 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロックφ10～20mmわずか | |



第43図 第10号住居跡 (2)

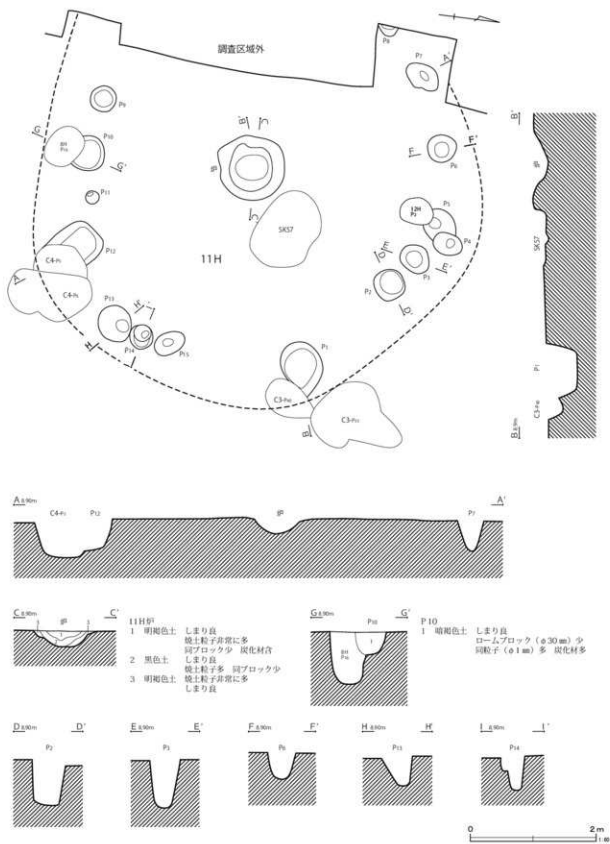


第44図 第12号住居跡

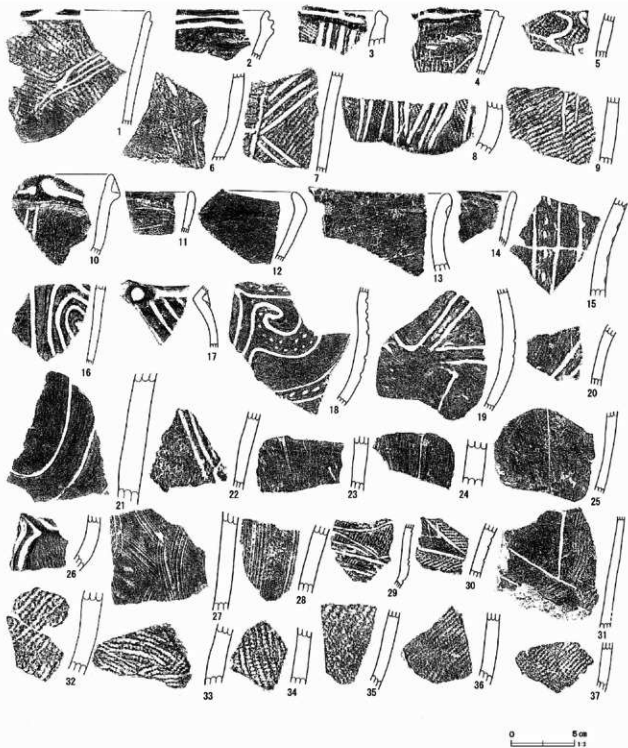
このように重複が著しい住居跡群の帰属時期であるが、前述のとおり掘り込みがないため出土遺物の帰属の判断は困難であった。各住居跡付近のグリッドや柱穴からは堀之内1式期の土器が出土しており、以下9・11・12号住居跡と思われる遺物を掲載する。

出土遺物 (第46図1～37)

土器 複雑に重複するため各住居跡と遺物の帰属関係は明確でない。1～4は深鉢口縁部である。縄文を地文とし、口唇端面及び直下に横位の沈線が施される。3は多条沈線による懸垂文が垂下する。5～9はこれらの胴部で、蛇行沈線(5)、斜行沈線(7)、蕨手文ないしハの字状沈線の下端(8)などが看取される。10～14は無文となる深鉢口縁部で、10は緩波状縁の直下に縦位沈線が垂下

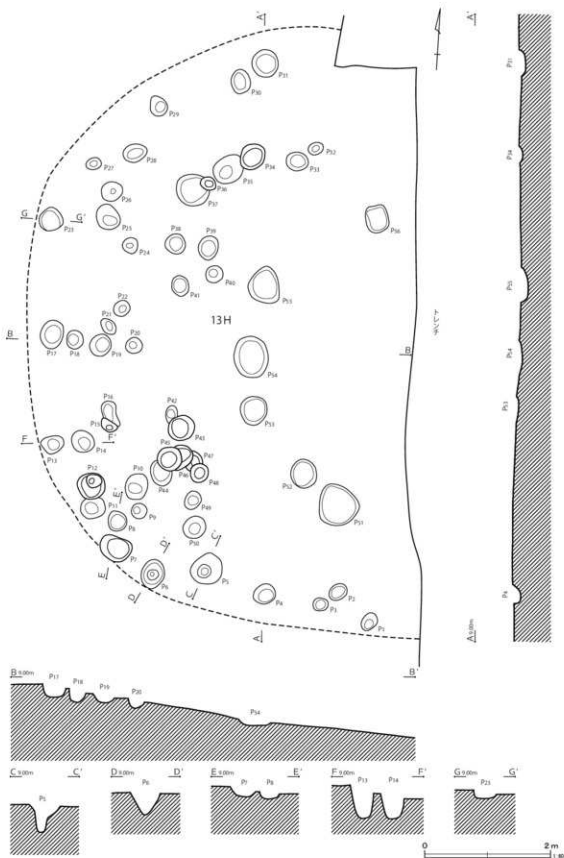


第45図 第11号住居跡

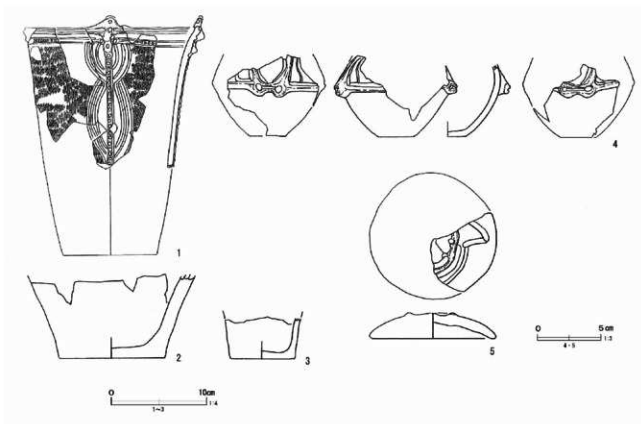


第46図 第9～12号住居跡出土遺物

し、13は円形刺突文が施される。これらの胴部に当たるのが15～21のような土器で、沈線による多重の渦巻文(16)、ハの字状沈線文(17)、称名寺式の系譜上にある沈線モチーフ(15・18・19・21)などのバラエティがある。22～25・27・28は粗製的な深鉢の胴部で、鋭利な沈線や集合沈線のみが施される。26は隆帯による円形モチーフをもつものである。29～31は三角形を基調とする沈線モチーフに縄文を充填する深鉢胴部、32～37は縄文のみの深鉢胴部である。



第47図 第13号住居跡



第48図 第13号住居跡出土遺物(1)

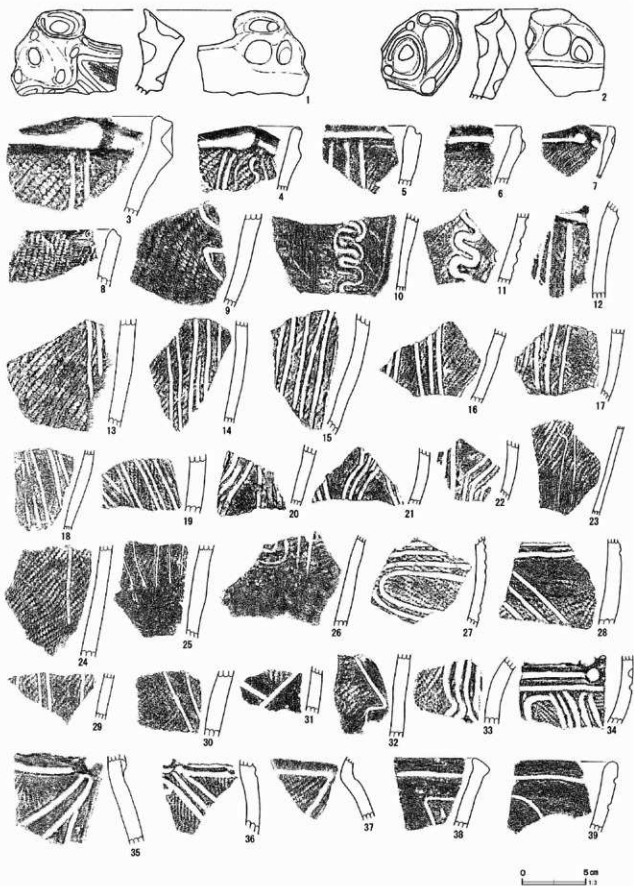
第13号住居跡(第47図)

調査区中央東辺のD8、E8グリッドで検出され、東側は調査区外に延びる。推定直径9mほどの円形を呈すると思われる。遺構確認面では掘り込みは確認できず、したがって本来の床面状況は不明である。柱穴は小ぶりなものが多数、ランダムに周縁部に配置される。炬は確認されなかった。当住居跡の出土遺物は堀之内1式土器を主体とし、該期の所産と思われる。

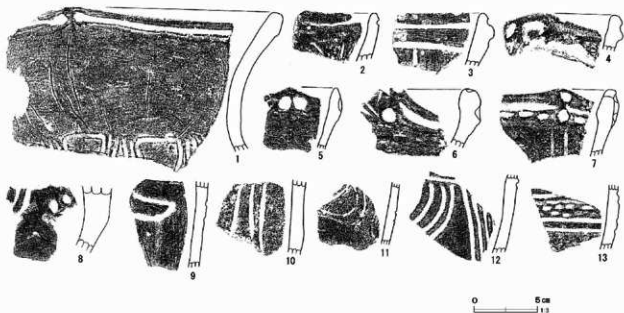
出土遺物(第48図1~5、第49図1~39、第50図1~13)

土器 第48図1は深鉢で、口径17.5cm、現存高15.8cm、推定高25cmを測る。直線的に開く器形で、口唇部に山形の突起をもつ。口縁部直下に沈線が沿い回り、突起下には2連の瘤状貼付文、及び刻みの加えられた隆帯が垂下し器面を4分割する。隆帯を中心に多重の対弧状沈線が垂下する。地文は単節LR縄文である。2は深鉢の底部である。3は小型の深鉢底部である。4は注口土器で、現存部の最大径8.4cm、底径2.6cm、現存高6.3cmを測る。胴最大径部に隆帯が巡り、同様に胴上半に隆帯のモチーフをもつ。隆帯の連結部は瘤状となり円形刺突が加えられる。5号住出土のもの(第24図1)と近似した文様となろう。5は土製の蓋で、推定径10cm、現存高2.1cmを測る。頂部に把手の痕跡が認められ、取り囲むように沈線文様が施される。

第49図1~7は深鉢口縁部で、口唇部や口縁部直下に沈線が巡り、地文に縄文をもつ。1・2は口縁部に付された突起で、両資料とも内外面の円孔、稜部への沈線加飾が共通する。6は盃が上方と側方に突出した



第49图 第13号住居跡出土遺物(2)



第50図 第13号住居跡出土遺物(3)

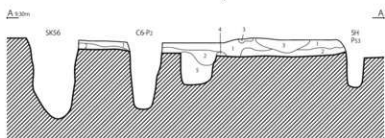
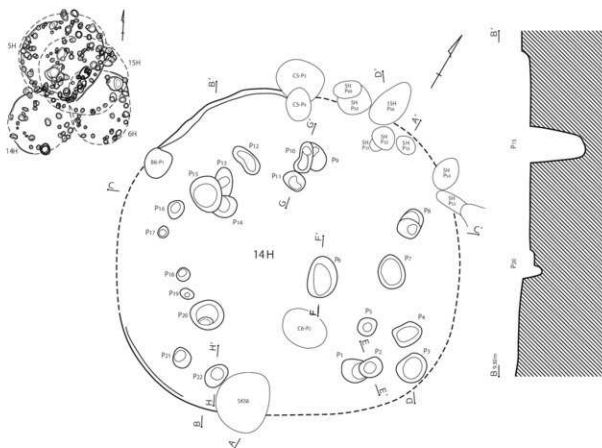
ような形状、2は接続した楕円が側方に突出するような形状となる。3・4・7は小波状となる口縁部である。3・4は波頂部下に直線の懸垂文、蛇行沈線・ハの字状沈線が施され、5~8も同様なモチーフをもつものであろう。9~33は深鉢胴部で、地文に縄文をもち、胴部が緩く括れる器形となるものである。9~11は蛇行沈線が垂下するもの、16~22は多条の沈線が垂下するものである。23~26は鋭利な沈線によるモチーフが垂下するもの、27は多条の沈線で楕円形のモチーフを描く。28~31は斜行沈線によるモチーフが描かれるものである。32は鉤状の沈線が施される。33は対弧状沈線が垂下する。34~39は、頸部に明瞭な括れをもち胴部が緩く張る器形の深鉢である。いずれも地文に縄文をもつ。34は頸部を横位沈線で区画し、多重の沈線や円形の楕円区画文を配する。35~37はハの字状沈線が垂下する。38・39は沈線でJ字状のモチーフを描くもので、38はさらに図内に列点を充填する。

第50図1~13は、口縁部を無文とし、胴部に主文様をもつものである。地文に縄文は施されない。1~7は口縁部で、口唇が肥厚し直下に沈線が巡るものを標準とする。11は胴部以下を多条の沈線や区画文で充填するものである。これらの胴部が8~13である。13は頸部直下で、帯状の沈線区画内に列点を充填している。以上、第49図1~31・33~37・第50図1~13は縄文時代後期前葉の堀之内1式、第49図32・38・39は後期初頭の称名寺I・II式に比定されよう。

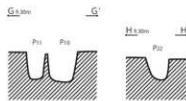
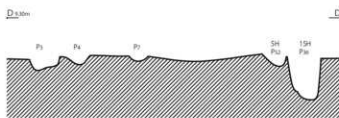
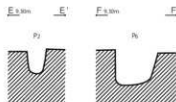
第14・15号住居跡 (第51・52図)

第14号住居跡は5号住の南側に重複し、壁の立ち上がり不明瞭でプラン把握が困難であった。平面形態は長径5.4×短径5.1mの円形を呈する。床面は中央部付近で遺構確認面から0.2mほど下がる。炬は検出されなかった。柱穴配置はランダムで、深さも約0.2~0.9mとばらつきがある。出土遺物は堀之内1式土器が主体で、該期の所産と思われる。

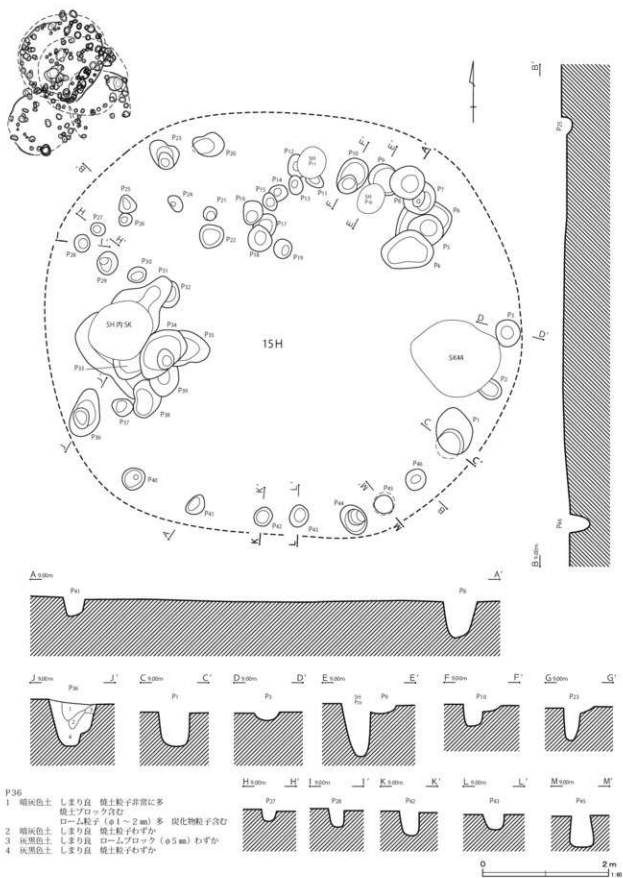
第15号住居跡は、5・6号住の重複部分にさらに重複する。平面形態は長径7.3×短径7.2mで、柱穴配置



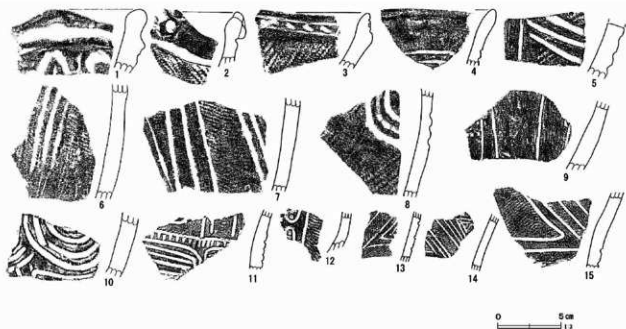
- 14H
- 1 暗褐色土 しまり良、ローム粒子 ϕ 1mm多
ロームブロック ϕ 10mm多 粘土粒子含む
 - 2 暗黄褐色土 しまり良、ローム粒子 ϕ 2~3mm多
ロームブロック ϕ 20~30mm多
 - 3 黒色土 しまり良、ローム粒子 ϕ 1mm多
同ブロック ϕ 10mmむすか 粘土粒子含む
 - 4 黄褐色土 ロームブロック上
 - 5 暗灰色土 しまり良
塊状のブラックローム土 ϕ 50~60mm多



第51図 第14号住居跡



第52図 第15号住居跡



第53図 第14号住居跡出土遺物

は南東側の主体部がいわゆるD字状を呈し、北西側が突出して出入口部と認識される。掘り込みはほとんどなく床面は未発達であった。炬は確認されなかった。重複が甚だしいため確実に当住居跡に確実に帰属する出土遺物は判断できなかったが、時期としては概ね縄文時代後期の所産であろう。

出土遺物 (第53図1~15)

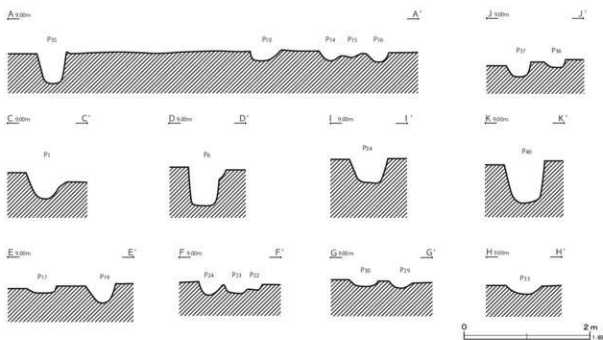
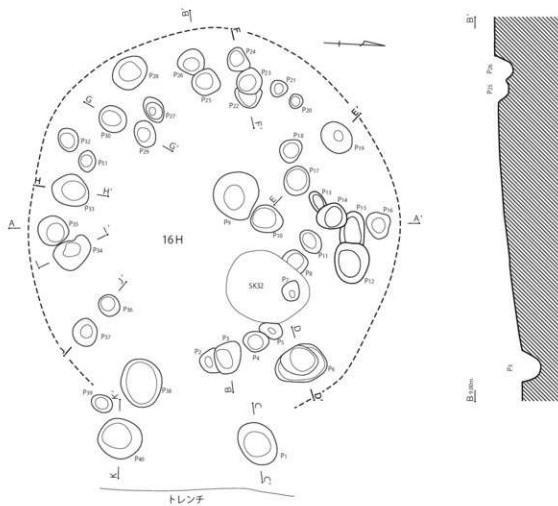
1~11は縄文時代後期前葉の堀之内1式である。1~4は深鉢で、1~3は口唇直下に沈線や列点などの加飾をもつ。5~8は深鉢胴部で、多重の沈線で斜行沈線(5)、ハの字状沈線(6・7)、Y字状懸垂文(8)などを描く。9は細い沈線が垂下するもので、称名寺式系統の粗製の深鉢胴部である。10は器面を同心円状の沈線モチーフ等で密に埋めるものである。11は胴部で緩く膨らむ深鉢の頭部で、横位多重の長円状モチーフで胴部を区画する。12~15は堀之内2式で、沈線による多重の三角形モチーフに細かい縄文を充填する。

第16号住居跡 (第54図)

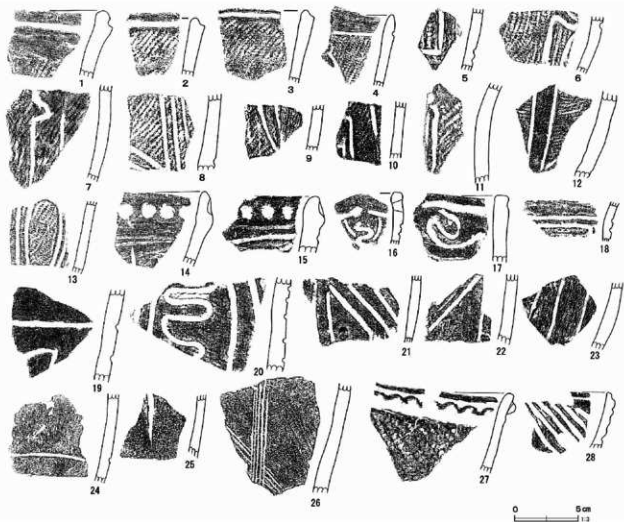
調査区北半東寄りで見出された。掘り込みは確認できず、長径7×短径6mほどの円形を呈し、柱穴配置から東側に出入口部をもつ可能性がある。炬は確認されなかったことや、各柱穴は一部を除いて浅いものが多いことから、本来の床面は上層の遺物包含層中にあったと思われる。出土遺物は堀之内1式を主体とすることから、該期の所産であろう。

出土遺物 (第55図1~28)

土器 1~13は深鉢で、地文に縄文をもつものである。1~4は口縁部で、1~3は口縁直下ないし口唇面に沈線が施され、4は口縁直下からパネル状の文様が展開されると思われる。5~13は胴部で、沈線によりH字状のモチーフ(6)、蕨手文(7)、斜行沈線(8)、また楕円文(12)などを施す。14~25は深鉢で地文に縄文をもたないものである。14~17は口縁部で、14・15は口縁直下に円形刺突を巡らせ以下に沈線モチーフをもつものである。16は波状口縁の波頂部で、円形刺突を起点に沈線が沿い回り、以下に蛇行沈線が垂



第54図 第16号住居跡



第55図 第16号住居跡出土遺物

下する。17は沈線というよりも凹線的な描線で鉤状のモチーフを描く。18~25はこれらの胴部である。頭部に相当する18は横位沈線や長円形の文様が施され、20は蕨手文、21・22は斜行沈線が施される。23~25は粗雑な沈線により文様を描くものである。26は粗製の深鉢胴部で、集合沈線が斜格子状に垂下するものである。以上1~26は縄文時代後期前葉の堀之内1式に比定される。

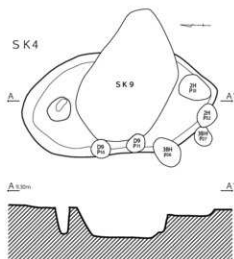
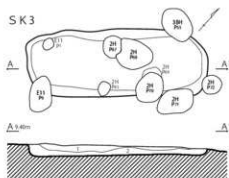
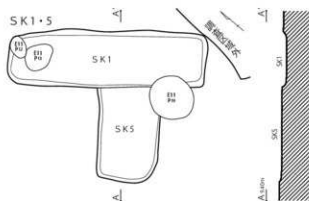
27・28は深鉢口縁部で、27は波状縁となり、口縁直下に刻みをもつ隆帯が回り、胴部に荒い縄文が施される。28は口唇部に沈線を巡らせ以下に多条の斜行沈線が施される。いずれも縄文時代後期中葉の加曾利B式土器である。

(2) 土坑

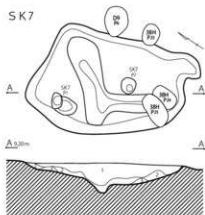
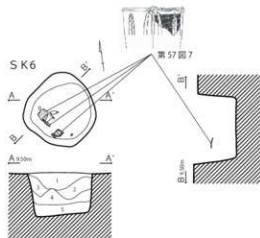
第1号土坑 (第56図)

E11グリッドに位置し、第5号土坑、E11P12、13、19と重複する。第5号土坑を切り、ピットに切られる。平面形は長方形を呈し底面は平坦である。規模は長径3.17m、短径0.93m、確認面からの深さ0.08mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

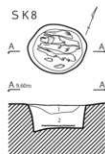


- SK3
 1 暗褐色土 しまり・粘性なし
 2 褐色土 しまり強 粘性なし ローム粒 $\phi 2\sim 5$ mmを多く含む
 ロームブロック $\phi 2$ cmを下部に多量に含む
 黄土粒 炭化物粒を多く含む



- SK7
 1 黒褐色土 しまり良 ローム粒子 $\phi 1$ mm多 炭化物粒子・黄土粒子含む
 2 暗褐色土 しまり良 粘性あり ローム粒子 $\phi 3\sim 4$ mm多
 鉄分沈着あり
 3 淡褐色土 しまり良 粘性あり 鉄分沈着あり

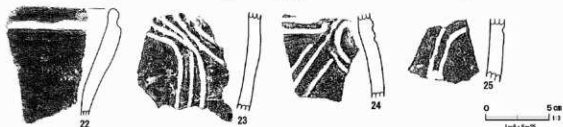
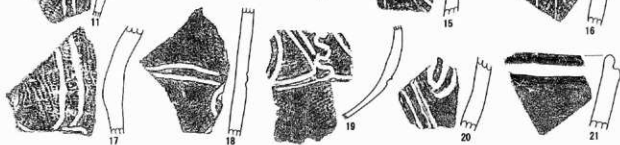
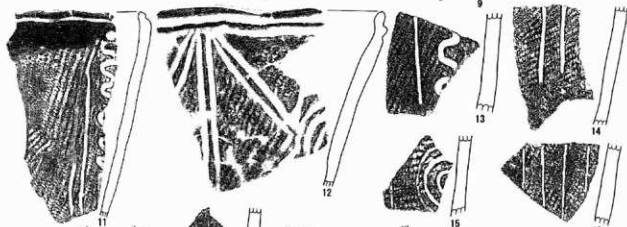
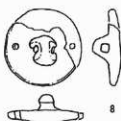
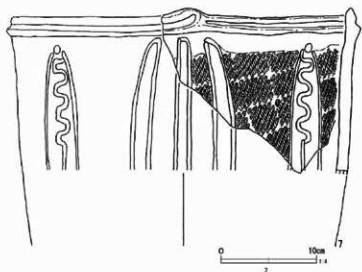
- SK6
 1 暗褐色土 しまり良 黄土粒子 炭化物粒子多
 2 暗褐色土 しまり良 1期に比し黄土粒子・炭化物粒子さらに多
 3 淡粉褐色土 しまり良 黄土ブロック $\phi 20$ mm平方 黄土粒子非常に多
 炭化物粒子含む
 4 暗褐色土 しまり良 粘性あり 暗褐色土と黄土との混土层
 黄土ブロック非常に多
 5 暗褐色土 しまり良 粘性あり



- SK8
 1 淡褐色土 しまり弱 ローム粒子 $\phi 1\sim 2$ mm多
 同ブロック $\phi 10$ mm少 炭化材 同粒子含む
 2 淡褐色土 しまり弱 炭化材含む



第56図 第1~8号土坑



1-2: SK2 3-5: SK3 6: SK4 7-25: SK6

第57图 土坑出土遗物(1)

第2号土坑 (第56図)

E10グリッドに位置し、平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は長径0.95m、短径0.8m、確認面からの深さ0.06mを測る。

出土遺物 (第57図1・2)

土器 1・2は胴部片で単節斜縄文が横位に施される。

第3号土坑 (第56図)

E10、11グリッドに位置し、第2号住居跡のP65、67～72、第3B号住居跡のP55、E11P1、9に切られる。平面形は長方形を呈し底面は平坦である。規模は長径2.85m、短径1.08m、確認面からの深さ0.18mを測る。

出土遺物 (第57図3～5)

土器 3・4は胴部破片で、4は無文であるが、3には縦位の沈線が認められる。

石器 5は凹基無茎の石鏃である。縦長の素材剥片を用い表面の基部に主要剥離面を残している。両側縁部にソフトハンマーを用いた規則的な剥離が施される。

第4号土坑 (第56図)

D9グリッドに位置し、第9号土坑、第2号住居跡のP31、32、第3B号住居跡のP26、27、D9P10、11に切られる。平面形は長楕円形を呈し土坑の北側には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径3.1m、短径1.65m、確認面からの深さ0.05mを測る。

出土遺物 (第57図6)

土器 6は胴部破片で横位の沈線が認められる。

第5号土坑 (第56図)

E11グリッドに位置し、第1号土坑、E11P19に切られる。平面形は長方形を呈し底面は平坦である。規模は長径1.5m、短径1m、確認面からの深さ0.08mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第6号土坑 (第56図)

D12グリッドに位置し、平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は長径1.2m、短径1.05m、確認面からの深さ0.71mを測る。

出土遺物 (第57図7～25)

土器 7は深鉢の口縁部から胴上部で推定口径34cm、現存高17.3cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、バケツ形の器形を呈すと推測される。口縁部には隆帯が貼り付けられる。器面は縄文を単節LR横位に施文される。円形刺突を起点として細めの棒状工具によるハの字状沈線と蛇行沈線を垂下させる。8は土製の蓋で把手が付き、左端部に円孔が認められる。縁辺を1/2程欠くが、右端部にも円孔が存在したと推測される。推定径6cm、器高2.2cmを測る。9～12は平縁深鉢の口縁部片である。9・11・12は口縁部が直線的に立ち上がるが、10は頭部から外反する。縄文を地文とし、9・10・12は縦位の沈線を挟んでハの字

状の平行沈線を、11は蛇行沈線を挟んでハの字状沈線を垂下させる。13～20は胴部片である縄文を地文とし、沈線によって施文される。13・19には蛇行沈線が垂下され、15には渦巻文が認められる。21・22は平縁深鉢の口縁部で、口縁部は直線的に立ち上がる。無文地であるが口唇直下にための棒状工具を用いた横位の沈線が施される。23～25は胴部片であり、無文地に沈線が施される。

第7号土坑（第56図）

C11グリッドに位置し、第3B号住居跡P23～25、D9P6に切られる。平面形は不整形円形を呈し土坑の中央には段を成すY字形の落ち込みと円形の落ち込みを有す。規模は長径2.8m、短径1.75m、確認面からの深さ0.58mを測る。

出土遺物（第59図1～5）

土器 1は壺形土器の口縁部である。肥厚する口縁部は外反気味に直立し、頸部以下が強く張る。頸部に横位の沈線、胴部に半円状の沈線が施される。胴部の半円状の沈線内には縄文が充填される。2～5胴下半部片である。2～4には単節斜縄文が斜位回転される。5は棒状施工具によって、縦位の条線が乱雑に施される。

第8号土坑（第56図）

C11グリッドに位置し、平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は長径0.95m、短径0.77m、確認面からの深さ0.48mを測る。底面付近から桶の底材と思われる木片が検出され、近世の墓塚と考えられる。

第9号土坑（第58図）

D9グリッドに位置し、第2号住居跡P30、D9P10、11と重複する。第2号住居跡P30、D9P10を切り、D9P11に切られる。平面形は不整形円形を呈し底面は平坦である。規模は長径2.25m、短径1.35m、確認面からの深さ1.02mを測る。

出土遺物（第59図6～8）

土器 6～8は胴部片である。6は垂下する鎖状隆帯の両脇に四画形状の沈線が施される。7は単節斜縄文が横位に施される。

第10号土坑（第58図）

D8グリッドに位置し、第13号住居跡P18に切られる。平面形は円形を呈し底面はやや北から南へ低く傾く。規模は長径1m、短径0.81m、確認面からの深さ0.17mを測る。

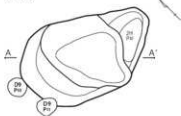
図示できるような遺物は出土しなかった。

第11号土坑（第58図）

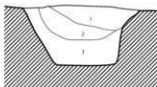
D8グリッドに位置し、第12号土坑、第16号土坑、第13号住居跡P23と重複する。第12号土坑を切り、第16号土坑、第13号住居跡P23に切られる。平面形は円形を呈す。規模は長径1.01m、短径0.7m、確認面からの深さ0.29mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

SK9

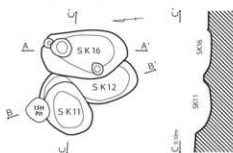


A 2.5m A'

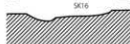


- SK9
- 1 暗褐色土層 しまり非常に良 粘性なし
ローム粒 ϕ 1~2mm
ロームブロック ϕ 2~4cmを含む
 - 2 黒色土層 しまり非常に良 粘性あり
ロームブロック ϕ 2~3cmを多く含む
腐土粒 ϕ 2~3mm、炭化物粒 ϕ 1~3mmを含む
 - 3 黒色土層 しまり非常に良 粘性あり
ロームブロック ϕ 2~5cmを非常に多く含む

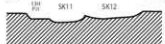
SK11・12・16



A 2.5m A'



B 2.5m B'



SK19



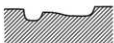
A 2.5m A'



SK10



A 2.5m A'



SK17



A 2.5m A'



SK17

- 1 暗褐色土層 しまり・粘性あり ロームブロック ϕ 1~2cmを含む
ローム粒 ϕ 1~3mmを多く含む
炭化物粒 ϕ 1~3mmを含む、炭化物ブロック ϕ 1cmを少量含む
- 2 褐色土層 しまり非常に良 粘性あり ローム粒 ϕ 1~3mm
ロームブロック ϕ 1~3cmを多く含む、炭化物粒 ϕ 1~3mmを含む

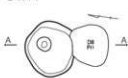
SK13



A 2.5m A'



SK14



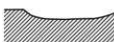
A 2.5m A'



SK15



A 2.5m A'



SK18



A 2.5m A'



SK20



A 2.5m A'



SK21

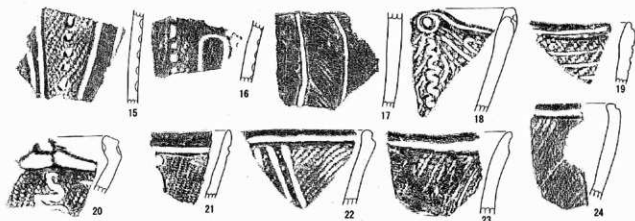
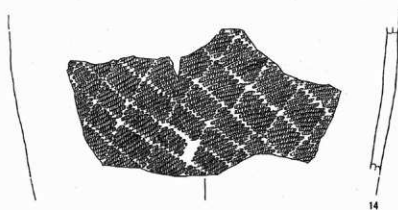
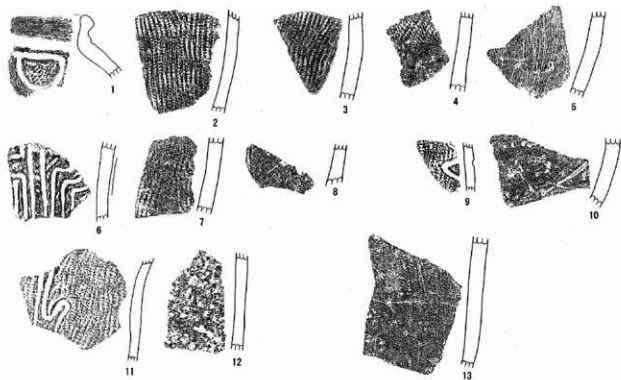


A 2.5m A'



0 2m 1m

第58図 第9~21号土坑



1-5: SK7 6-8: SK9 9-10: SK19 11-12: SK22 13: SK23 14-24: SK29

0 5 cm
1:1

第59圖 土坑出土遺物(2)

第12号土坑 (第58図)

D8グリッドに位置し、第11号土坑、第16号土坑に切られる。平面形は円形を呈す。規模は西側を第11号土坑、東側を第16号土坑に切られているため、長径と短径は不明、確認面からの深さ0.13mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第13号土坑 (第58図)

D8グリッドに位置し、平面形は不整形円形を呈し土坑の西端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.1m、短径0.73m、確認面からの深さ0.19mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第14号土坑 (第58図)

D8グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.32m、短径0.85m、確認面からの深さ0.28mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第15号土坑 (第58図)

D8グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈し土坑の西端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.48m、短径0.95m、確認面からの深さ0.15mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第16号土坑 (第58図)

D8グリッドに位置し、第11号土坑、第12号土坑を切る。平面形は楕円形を呈し土坑の北端と西端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.35m、短径0.77m、確認面からの深さ0.1mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第17号土坑 (第58図)

D6グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の北側には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.13m、短径1.1m、確認面からの深さ0.94mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第18号土坑 (第58図)

D7グリッドに位置し、平面形は円形を呈し底面はやや西から東へ低く傾く。規模は長径1m、短径0.85m、確認面からの深さ0.14mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第19号土坑 (第58図)

D7グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.38m、短径1.05m、確認面からの深さ0.14mを測る。

出土遺物 (第59図9・10)

土器 9・10は胴部片である。9は縄文を地文とし、蛇行沈線が垂下される。10は櫛状施文具による斜位の条線が認められる。

第20号土坑 (第58図)

C7グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の東端には段を成す楕円形の落ち込みを有す。規模は長径1.2m、短径0.9m、確認面からの深さ0.2mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第21号土坑 (第58図)

D7グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈し土坑の北端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.42m、短径0.95m、確認面からの深さ0.12mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第22号土坑 (第60図)

D6グリッドに位置し、第16号住居跡P32に切られる。平面形は楕円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径2.3m、短径1.6m、確認面からの深さ0.26mを測る。

出土遺物 (第59図11・12)

土器 11・12は胴部片である。11は縄文を地文とし縦位の沈線と蛇行沈線が垂下する。12は器面の摩耗が著しいが縄文が認められる。

第23号土坑 (第60図)

D7グリッドに位置し、第33号土坑、D7P1、3と重複する。土坑を切り、ビットに切られる。平面形は楕円形を呈す。規模は長径1.36m、短径0.85m、確認面からの深さ0.13mを測る。

出土遺物 (第59図13)

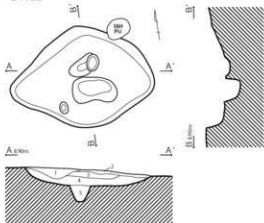
土器 13は胴部片である。無文であるが縦位のナデが認められる。

第24号土坑 (第60図)

C6グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には円形の深い落ち込みを有す。規模は長径1.06m、短径0.9m、確認面からの深さ0.21mを測る。

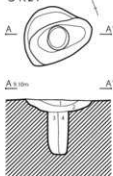
図示できるような遺物は出土しなかった。

SK 22



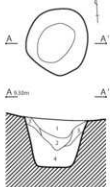
- SK 22
- 1 黒褐色土層 しまり・粘性あり ローム粒子 ϕ 2~5mmを含む
炭化物粒 ϕ 2mmを含む
 - 2 暗褐色土層 しまり良 粘性あり ローム粒 ϕ 2~5mmを含む
 - 3 褐色土層 しまり良 粘性良 粘性良
ロームブロック ϕ 1~2cmを多く含む
 - 4 明褐色土層 しまり非常に良 粘性良 ローム粒 ϕ 2~5mmを含む
ロームブロック ϕ 1~2cmを多く含む
 - 5 黒褐色土層 しまり非常に良 ロームブロック ϕ 1~2cmを含む

SK 24



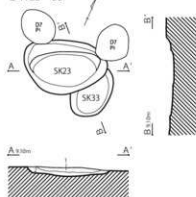
- SK 24
- 1 黒褐色土層 しまり・粘性良
ロームブロック ϕ 7mm~20mmを含む
炭土粒 ϕ 1mm 炭土ブロック ϕ 1cmを少量含む
 - 2 暗褐色土層 しまり・粘性良 ローム粒 ϕ 1~6mmを多く含む
炭化物粒 炭土粒 ϕ 1mmを含む
 - 3 黄褐色土層 しまり・粘性良 ロームブロック ϕ 3cmを多く含む
 - 4 褐色土層 しまり・粘性良 ローム粒 ϕ 1~3mm
ロームブロック ϕ 2cmを多く含む

SK 30



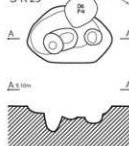
- SK 30
- 1 暗褐色土層 しまり良 ローム粒子 ϕ 1mmわずか 炭土粒子 炭化物粒子わずか
 - 2 暗褐色土層 しまり良 1層より色調明るい ローム粒子 ϕ 1~2mm多
 - 3 明褐色土層 しまり良 ローム粒子 ϕ 2~3mm多
 - 4 明褐色土層 しまりやや弱 粘性あり
ローム粒子 ϕ 2~3mm多 ロームブロック ϕ 5mmわずか

SK 23・33



- SK 23
- 1 黒色土層 しまり良 粘性なし 炭化物粒と炭土粒 ϕ 1mmを少量含む
ローム粒 ϕ 5mmを含む
 - 2 褐色土層 しまり良 ロームブロック ϕ 2cmを多く含む

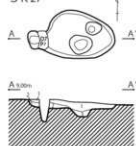
SK 25



SK 27

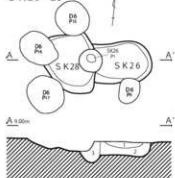
- SK 27
- 1 黒褐色土層 しまり非常に良 粘性あり
ロームブロック ϕ 2~3cmを含む
炭化物粒子 ϕ 1~3mm
炭化物ブロック ϕ 1cmを含む
 - 2 褐色土層 しまり非常に良 粘性あり
ロームブロック ϕ 2~3cmを多く含む

SK 27



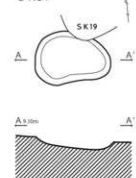
- 3 暗褐色土層 しまり非常に良 粘性あり
ロームブロック ϕ 1cmを含む

SK 26・28



- SK 26 SK 28
- 1 暗褐色土層 しまり・粘性良 ロームブロック ϕ 1cm程度を含む
 - 2 褐色土層 しまり・粘性良 ロームブロック ϕ 2~3cmを多く含む
炭化物ブロック ϕ 5mmを少量含む
 - 3 黒褐色土層 しまり弱 粘性良 ローム粒 ϕ 3~5mmを含む
炭化物粒 ϕ 1mmを含む

SK 31



0 2m

第25号土坑 (第60図)

D6グリッドに位置し、D6P18に切られる。平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.32m、短径0.9m、確認面からの深さ0.19mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第26号土坑 (第60図)

D6グリッドに位置し、第28号土坑、D6P9に切られる。平面形は楕円形を呈し土坑の西側には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は西側を第28号土坑に切られているため、長径は不明、短径0.63m、確認面からの深さ0.16mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第27号土坑 (第60図)

D7グリッドに位置し、D7P7に切られる。平面形は不整形円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.4m、短径0.75m、確認面からの深さ0.17mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第28号土坑 (第60図)

D6グリッドに位置し、第26号土坑、D6P15～17と重複する。土坑を切り、ビットに切られる。平面形は円形を呈す。規模は長径1.1m、短径0.83m、確認面からの深さ0.18mを測る。

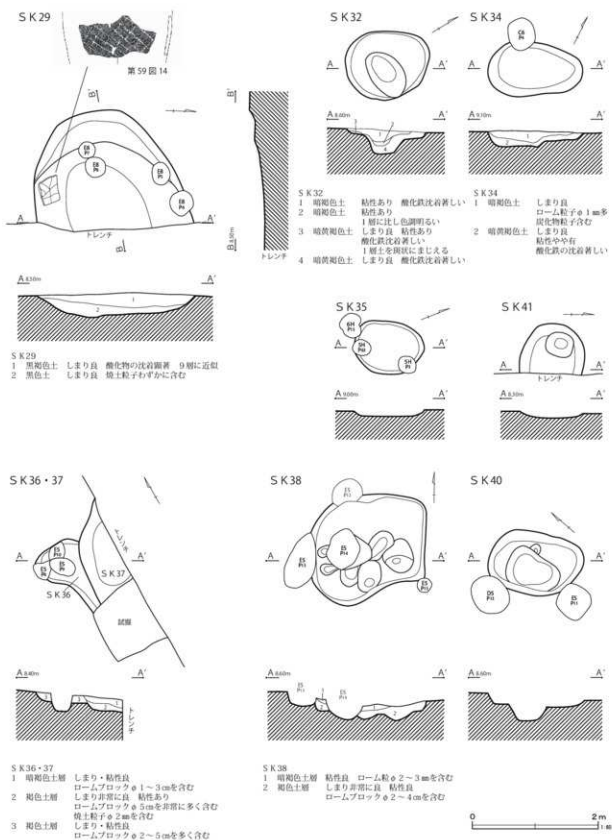
図示できるような遺物は出土しなかった。

第29号土坑 (第61図)

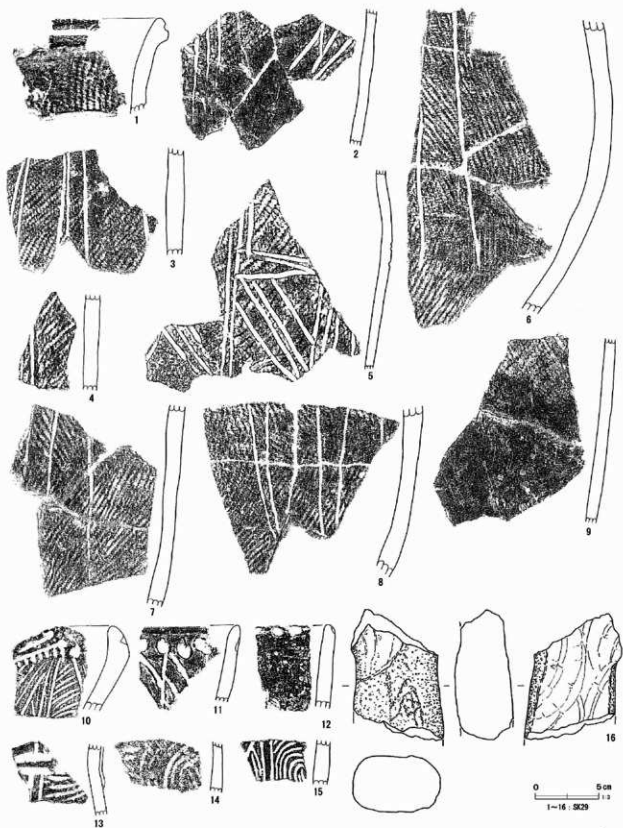
E8グリッドに位置し、E8P5～8に切られる。平面形は円形を呈す。規模は東側をトレンチに切られているため、長径は不明、短径2.35m、確認面からの深さ0.17mを測る。

出土遺物 (第59図14～24、第62図1～16)

土器 第59図14は深鉢の胴部片で、現存部の最大径37.4cm、現存高15.4cmを測る。下方に向かって胴部径を狭めていき、胴下半部に近い部位のものと思われる。単節LR斜位回転の縄文が施文される。15～17は胴部片である。沈線と縄文によって施文される。15は縦位に垂下する沈線と刺突文列が認められ、沈線間内には縄文が充填される。18～24と第62図1は口縁部片で、18～20は波状口縁を呈し、21～24と第62図1は平縁である。20は口縁端部で内傾し、23・第62図1はやや外反、24はやや内傾する。18～20は縄文を地文とし、沈線が認められる。18は口縁端部の円孔を基点にハの字状の平行沈線と蛇行沈線が垂下する。19は横位の平行沈線が施される。20は太めの棒状工具による円形刺突文と横位の沈線のほか、縦位の蛇行沈線が垂下する。21～24と第62図1は縄文を地文とし、口唇直下に横位の沈線が認められるほか、21には蛇行沈線、22には斜位の沈線が施される。第62図2～9は胴部片で、縄文を地文とする。2～8は縦位の沈線が垂下する。10～12は深鉢の口縁部片である。10は波形状の口縁部、11・12は平縁で口縁部は直線的に立ち上がる。10・11は円形の刺突文と斜位の沈線が施され、12は口唇部に横位の半円形刺突文列が施される。13～15は胴部片である。無文地に沈線が施され、14・15には円形をモチーフとした文様が描出される。



第61図 第29・32・34~38・40・41号土坑



第62図 土坑出土遺物(3)

石器 第62図16は石棒の頭部付近の残欠である。正面は石棒の頭部を成形するときの成形剥離の痕跡をわずかに残すものの、丹念な敲打調整が施されている。裏面では概ね成形剥離を残している。断面形状は楕円形を呈す。

第30号土坑（第60図）

C6グリッドに位置し、平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は長径1.05m、短径0.97m、確認面からの深さ0.85mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第31号土坑（第60図）

D7グリッドに位置し、第19号土坑に切られる。平面形は楕円形を呈し底面はやや西から東へ低く傾く。規模は長径1.2m、短径0.18m、確認面からの深さ0.13mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第32号土坑（第61図）

E6グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す楕円形の落ち込みを有す。規模は長径1.32m、短径1.12m、確認面からの深さ0.23mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第33号土坑（第60図）

D7グリッドに位置し、第23号土坑に切られる。平面形は楕円形を呈す。規模は北側を第23号土坑に切られているため長径は不明、短径0.66m、確認面からの深さ0.05mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第34号土坑（第61図）

C6グリッドに位置し、C6P4に切られる。平面形は楕円形を呈し底面は西側がやや凹む。規模は長径1.52m、短径0.85m、確認面からの深さ0.26mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第35号土坑（第61図）

C5グリッドに位置し、第5号住居跡P3、P63、第6号住居跡P15に切られる。平面形は楕円形を呈す。規模は長径1.13m、短径0.85m、確認面からの深さ0.1mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第36号土坑（第61図）

E5グリッドに位置し、第37号土坑、E5P8～10に切られる。平面形は不整形を呈す。規模は東側を第37号土坑に、南側を試掘坑に切られているため長径と短径は不明で確認面からの深さ0.11mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第37号土坑 (第61図)

E5グリッドに位置し、第36号土坑を切る。平面形は楕円形を呈す。規模は東側トレンチに、南側を試掘坑に切られているため長径と短径は不明で確認面からの深さ0.26mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第38号土坑 (第61図)

E5グリッドに位置し、E5P12～15に切られる。平面形は不整形形を呈し土坑の中央には段を成す楕円形の落ち込みを有す。規模は長径2.18m、短径1.72m、確認面からの深さ0.26mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第39号土坑 (第63図)

D5グリッドに位置し、D5P18、26、27に切られる。平面形は不整形形を呈し底面は平坦である。規模は長径1.97m、短径1.88m、確認面からの深さ0.23mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第40号土坑 (第61図)

D、E5グリッドに位置し、D5P13、E5P11に切られる。平面形は楕円形を呈し土坑の中央には段を成す楕円形の落ち込みを有す。規模は長径1.5m、短径1m、確認面からの深さ0.44mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第41号土坑 (第61図)

E5グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の西端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は東側をトレンチに切られているため、長径は不明、短径1.02m、確認面からの深さ0.13mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第42号土坑 (第62図)

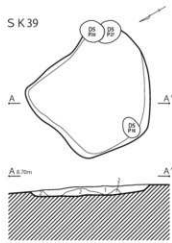
D5グリッドに位置し、D5P14、15に切られる。平面形は円形を呈し土坑の北端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.1m、短径0.95m、確認面からの深さ0.2mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

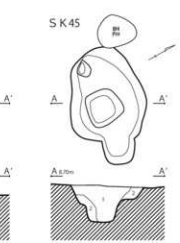
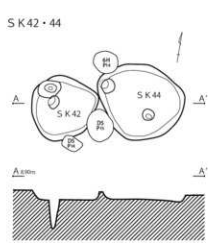
第43号土坑 (第63図)

D3グリッドに位置し、平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は長径1.2m、短径0.85m、確認面からの深さ0.28mを測る。

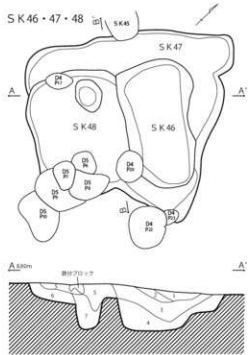
図示できるような遺物は出土しなかった。



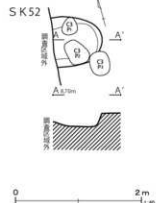
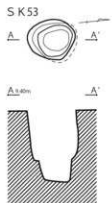
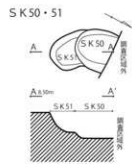
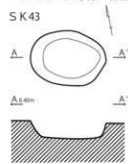
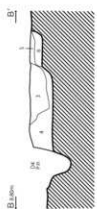
- S K 39
 1 暗褐色土 しまり良 酸化鉄の沈着著しい
 2 暗褐色土 しまり良 粘性あり 酸化鉄の沈着著しい



- S K 45
 1 暗褐色土 しまり良 ロームブロックφ30～40mm少 粘土粒子・炭化物粒子わずか
 2 暗褐色土 しまり良 ロームブロックφ30～40mm多



- S K 46・47・48
 1 褐色土 しまり弱 粘性あり ロームブロックφ1～4cmを多く含む 炭分を多く含む
 2 褐色土 しまり・粘性あり ローム粒φ2～3mmを含む
 3 黒褐色土 しまり弱 粘性あり ロームブロックφ3cmを含む 粘土粒φ2mmを多く含む
 4 灰褐色土 しまり弱 粘性あり ロームブロックφ2～4cmを多く含む
 5 黒色土 しまり非常に良 粘性あり ローム粒φ2～5mmを含む
 6 暗褐色土 しまり非常に良 粘性あり ロームブロックφ2～3cmを密に含む
 7 黒褐色土 しまり非常に良 粘性あり ロームブロックφ3～5cmを密に含む



第63図 第39・42～48・50～53号土坑

第44号土坑 (第63図)

D5グリッドに位置し、第6号住居跡P14、D5P15に切られる。平面形は円形を呈し土坑の中央と西端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.4m、短径1.19m、確認面からの深さ0.48mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第45号土坑 (第63図)

D4グリッドに位置し、第47号土坑、第8号住居跡P20と重複する。土坑を切りビットに切られる。平面形は不整円形を呈し土坑の中央と西端には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.87m、短径1.18m、確認面からの深さ0.43mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第46号土坑 (第63図)

D4グリッドに位置し、第47号土坑、第48号土坑、D4P20と重複する。土坑を切り、ビットに切られる。平面形は不整円形を呈し、底面は平坦である。規模は長径2.04m、短径1.22m、確認面からの深さ0.81mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第47号土坑 (第63図)

D4、5グリッドに位置し、第45号土坑、第46号土坑、第48号土坑、D4P17、20、22、23、D5P6～9に切られる。平面形は不整円形を呈し底面は平坦である。規模は長径3.28m、短径3.04m、確認面からの深さ0.48mを測る。

出土遺物 (第65図1～5)

土器 1は小型壺の頸部から胴部片で、現存部の最大径11cm、現存高7.2cmを測る。頸部から口縁部にかけてはやや外反しながらも直線的に立ち上がるようである。胴部最大径は胴部の下半部に位置し、底部に向けて胴部径を狭めていく。貼付文と横位の沈線によって施文され、沈線で小窓状の区画文を描出する。沈線内には櫛状工具による刺突文が施される。2は波状を成す口縁部片で、口縁端部は内傾する。太めの棒状工具による横位2条の平行沈線と刺突文によって施文される。3は深鉢の口縁部片で、口縁端部を僅かに欠損する。横位の沈線と円形の貼付文が施される。4・5は胴部片である。4は細めの棒状工具によって弧状沈線が描かれ、5には刺突文が施される。

第48号土坑 (第63図)

D4、5グリッドに位置し、第46号土坑、第47号土坑、D4P17、20、D5P6～9と重複する。第47号土坑を切り、第46号土坑とビットに切られる。平面形は円形を呈し土坑の北側には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径2m、短径1.48m、確認面からの深さ0.46mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第49号土坑 (第64図)

D3グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径1.75m、短径1.6m、確認面からの深さ0.31mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第50号土坑 (第63図)

C2グリッドに位置し、第51号土坑を切る。平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は北側が調査区域外にかかるため、長径は不明、短径0.66m、確認面からの深さ0.41mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第51号土坑 (第63図)

C2グリッドに位置し、第50号土坑に切られる。平面形は円形を呈す。規模は北側が第50号土坑に切られるため、長径は不明、短径0.57m、確認面からの深さ0.34mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第52号土坑 (第63図)

C3グリッドに位置し、C3P1～3に切られる。平面形は楕円形を呈し底面は西から東へ低く傾く。規模は西側が調査区域外にかかるため、長径は不明、短径0.8m、確認面からの深さ0.26mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第53号土坑 (第63図)

C8グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径0.75m、短径0.64m、確認面からの深さ1.12mを測る。

出土遺物 (第65図6～10)

土器 6は平縁深鉢の口縁部で円形刺突文を基点として蕨手文が垂下する。7～9は胴部片である。縄文を地文とし、7は横位の単沈線と斜位の平行沈線、8は渦巻文、9は縦位の平行沈線が施される。

土製品 10は土製円盤である。無文の胴部破片を素材とし周縁部に敲打調整を加えて形状を整えている。最大径3.4cmを測る。

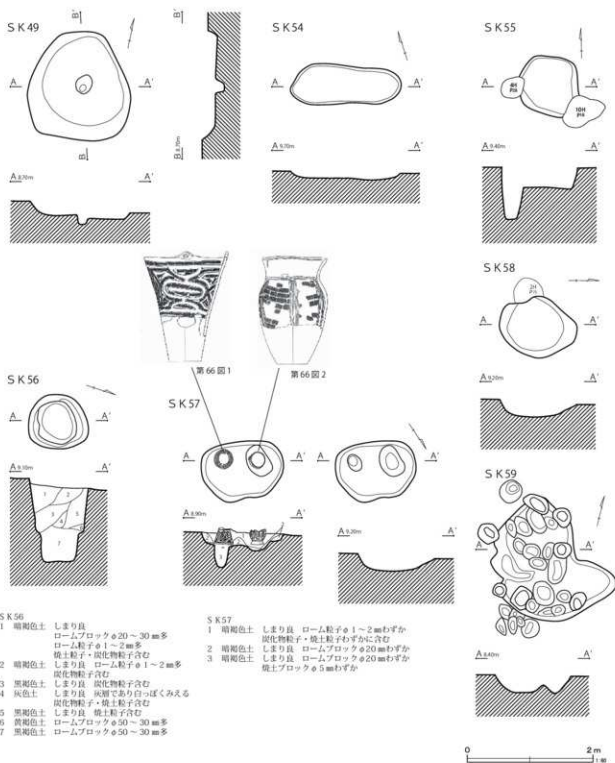
第54号土坑 (第64図)

B11グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈す。規模は長径1.76m、短径0.66m、確認面からの深さ0.15mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

第55号土坑 (第64図)

B8グリッドに位置し、第4号住居跡P28、第10号住居跡P18に切られる。平面形は円形を呈し底面は平坦である。規模は長径1.04m、短径0.98m、確認面からの深さ0.32mを測る。



- SK 56
- 1 暗褐色土 しまり良
ロームブロックφ20～30mm多
ローム粒子φ1～2mm多
 - 2 暗褐色土 しまり良 ローム粒子φ1～2mm多
炭化物粒子含む
 - 3 黒褐色土 しまり良 炭化物粒子含む
 - 4 灰色土 しまり良 炭化物粒子含む
炭化物粒子・焼土粒子含む
 - 5 黒褐色土 しまり良 焼土粒子含む
 - 6 黄褐色土 ロームブロックφ50～30mm多
 - 7 黒褐色土 ロームブロックφ50～30mm多

- SK 57
- 1 暗褐色土 しまり良 ローム粒子φ1～2mmわずか
炭化物粒子・焼土粒子わずかに含む
 - 2 暗褐色土 しまり良 ロームブロックφ20mmわずか
 - 3 暗褐色土 しまり良 ロームブロックφ20mmわずか
焼土ブロックφ5mmわずか

第64図 第49・54～59号土坑

図示できるような遺物は出土しなかった。

第56号土坑 (第64図)

C6グリッドに位置し、平面形は円形を呈し土坑の中央には段を成す円形の落ち込みを有す。規模は長径0.97m、短径0.86m、確認面からの深さ1.32mを測る。

出土遺物 (第65図11~21)

土器 11~13は口縁部片で、11・12は小波状口縁を呈し、13は平縁である。口唇直下に横位の沈線が施される。11はS字状の平行沈線が認められ、下位には縄文が施される。14は胴部片で無文地に細い棒状工具を用いた縦位の沈線が施される。15は波状を呈す口縁部片で口唇直下に穿孔と横位の円形刺突文列が施される。16・17は胴部片である。16は横位の沈線と刺突文で施文され、17は細めの棒状工具による縦位の沈線が施される。18は平縁深鉢の口縁部で縦位の沈線が認められる。19は胴部片で縦位の鎖状隆帯が垂下する。20は深鉢の底部片で平底である。底径9cmを測り、僅かに網代痕が認められる。

石器 21は脚付石皿の縁辺の残欠である。側面と脚部は研磨によって仕上げられており、整形時の面取りが残っている。

第57号土坑 (第64図)

C3グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈す。土坑の東側と西側に円形の掘り込みを有し、この上に深鉢が逆位の状態で埋置されていた。2個体の埋設土器の口縁部レベルはほぼ等しく、土層断面でも切り合い関係は認められないため、両者は同時に埋設されたものと思われる。規模は長径1.27m、短径0.92m、確認面からの深さ0.26mを測る。

出土遺物 (第65図22、第66図1・2)

土器 第65図22は推定口径36.5cm、推定底径8.3cm、器高27cmを測る鉢形土器である。口縁部は外反し、頸部以下が緩く張る。口縁部は平縁で2個一對の小突起が付される。直立する口縁部外縁には1条の沈線が引かれ、突起部分は2個の円形刺突間にやや湾曲する短沈線3条が施される。頸部に長楕円形の小窓枠状のモチーフが施され、この下に半円形のモチーフやこれを縁取るような沈線文が描出される。第66図1は口径29.4cm、現存高32cm、推定高41cmを測る深鉢である。底部を欠くが、口縁部から胴部上半は遺存し、胴部文様もほぼ完存している。胴部から口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁部は平縁だが、円孔をもつ突起部が1箇所認められる。胴部は楕円、半円、縦長三角形を組み合わせた幾何学文のモチーフを沈線で描き、区画内には単節LRの縄文が充填される。胴部下半は丁寧な磨きが施される。2は口径23cm、現存高26.9cm、推定高40cmを測る平縁甕形土器である。無文となる口縁部は外反しながら立ち上がり、口唇外縁に1条の沈線が引かれる。頸部は括れ、2条の平行沈線と12の横位刺突文が施される。胴部は単節LRの縄文を地文とし、縦位のH字状沈線による、6単位の文様が看取される。

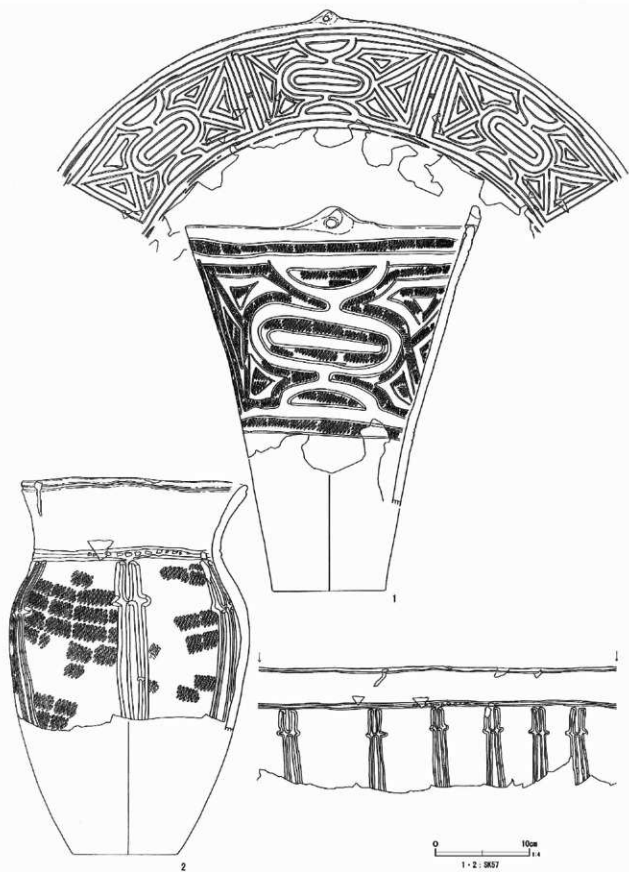
第58号土坑 (第64図)

E10グリッドに位置し、第2号住居跡P73を切る。平面形は円形を呈す。規模は長径1.22m、短径0.97m、確認面からの深さ0.3mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。



第65圖 土坑出土遺物(4)



第66图 土坑出土遗物 (5)

第59号土坑 (第64図)

D3グリッドに位置し、平面形は不整形円形を呈す。土坑内に無数の円形の落ち込みを有す。規模は長さ2.1m、短径1.5m、確認面からの深さ0.24mを測る。

図示できるような遺物は出土しなかった。

(3) 屋外炉跡

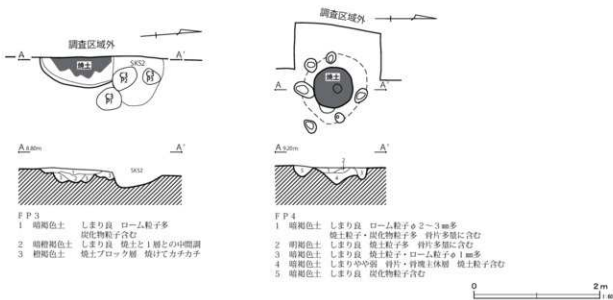
当調査区では複数の単独炉(焼土跡)が検出され、いくつかはその後住居跡の炉として帰属関係が明らかになった。ここでは、帰属が不明の炉跡を単独の屋外炉として扱う。ただし、本来帰属すべき住居跡(柱穴)が削平等で消失してしまっている可能性もある(1号・2号炉跡は調査中に1B号住、11号住の炉と判明し欠番とした)。

第3号屋外炉跡 (第67図)

調査区北西端のC3グリッドで検出され、西半は調査区外に延びる。平面形は直径1.5mほどの円形基礎と思われる。北側を52号土坑により切られる。中央部に焼土が発達し、焼けて硬化していた。図示できる出土遺物はなかったが、周囲の状況から縄文時代後期の所産と思われる。

第4号屋外炉跡 (第67図)

調査区北西寄りの、B5グリッドで検出された。炉の直径は0.6mほどで、楕円状に掘りくぼめられ、焼土ブロックが発達していた。焼土上には、骨片・骨塊らしき物質を多量に含む灰層が堆積していた。生成要因は不明だが、生業に関する処理施設の可能性もある。炉の周縁は顕著に被熱硬化し(点線の範囲)、直径0.2~0.3mの小ピットが複数見られ、石囲炉の石の抜き取り痕と思われる。図示できる出土遺物はなかったが、周囲の状況から縄文後期の所産と思われる。



第67図 屋外炉跡

(4) グリッド出土遺物

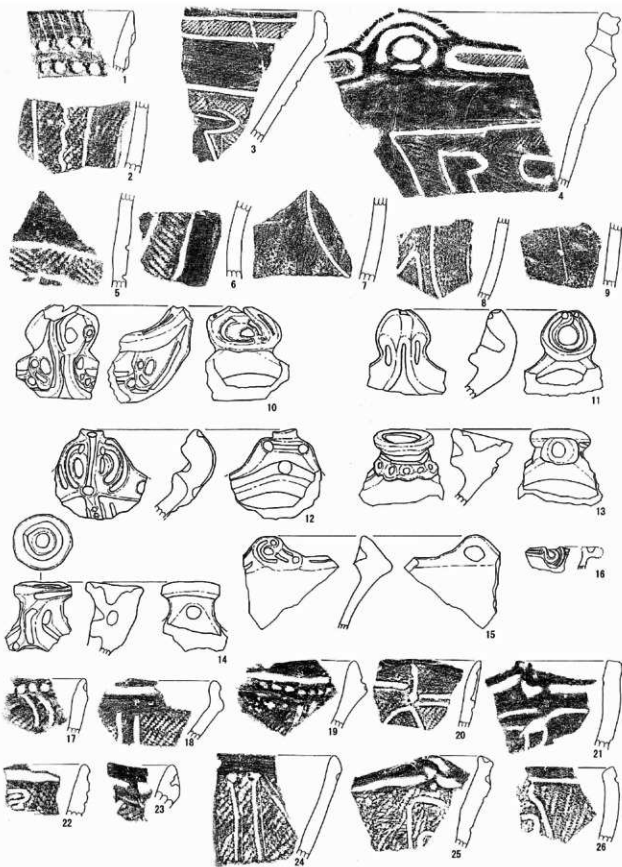
土器 (第68図1~26、第69図1~31、第70図1~33、第71図1~45、第72図1~30、第73図1)

第68図1は口縁部片で、口唇部に斜めの条線帯をもち半截竹管による爪形文が施される。縄文時代前期後半の浮島式土器である。2は胴部片で、縦位の単節斜縄文を地文とし縦位の直線及び曲線の沈線文が施される。縄文時代中期後半の加曾利E式土器である。3は平縁深鉢の口縁部片である。外反する口縁部は口唇部にいたって直立する。4は口唇部に円孔をもつ突起部がつく深鉢の口縁部片である。3・4とも口縁部から胴部上半に沈線によって鉤手状となるモチーフを描き、沈線内に縄文が充填される。5~9は無文地の胴部片である。5・6は3・4同様に沈線と縄文が施され、7・8には斜位の沈線が施される。10~15は口縁部に付された突起で、隆帯と刺突文によって装飾が施される。両資料とも内外面の円孔、稜部への沈線加飾が共通する。10・11はやや内側へ向く環状把手で、端面には円形刺突を起点とする沈線が引かれる。12は円形刺突を囲むようにC字状沈線が向きあう突起で、これを起点として鎖状隆帯が垂下する。13・14は白状突起で白の縁に環状の沈線が巡らされる。15は平縁土器に付された山形突起で2つの刺突を囲むC字状沈線が見られる。16は小型壺の口縁部と思われ、接続した楕円が側方に突出するような形状を呈する。

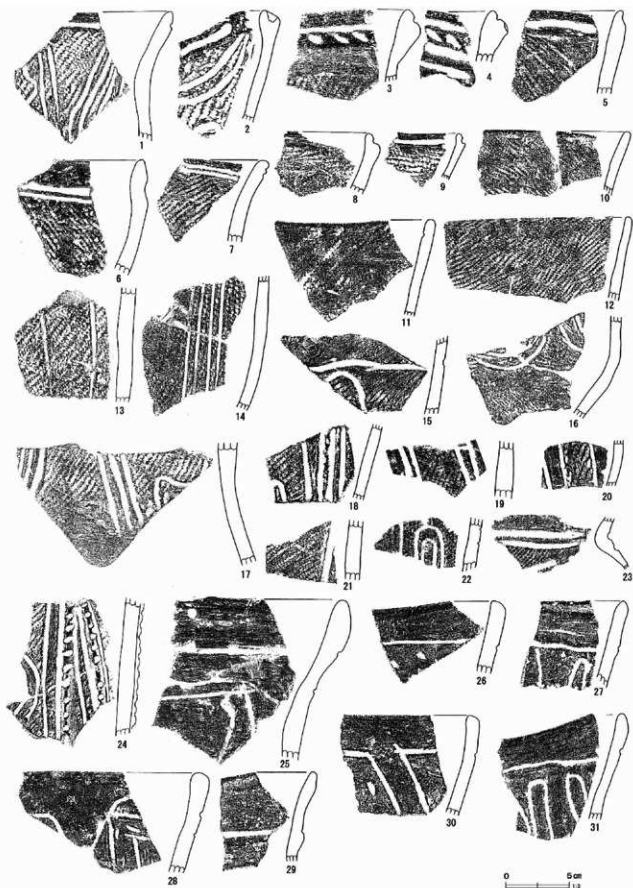
17~26と第69図1~12は深鉢の口縁部片である。17~20・24・26・第69図1・3・5~12は平縁、21~23・25・第69図2・4は波状の口縁部を呈する。縄文を地文とし、沈線と刺突文が施されるものが多い。17・20・23・25には円形刺突文が、19・21・第69図3・4には横方向に挟むような楕円形の刺突文が施される。第69図8・10~12は縄文のみが施される。13~22は胴部片である。縄文を地文とし、沈線が施される。13・14・18・19には縦位あるいは斜位に垂下する平行沈線が施される。17はハの字状に平行沈線が垂下する。16は渦巻文が施される。20は縦位の沈線に加えて刺突文が施される。23は頭部片である。頭部から口縁部にかけては外反する。縄文を地文とし、頭部に2条の平行沈線、胴部付近にも斜位の沈線が認められる。24は胴部片で2条の鎖状隆帯が垂下し、両脇に縦位の沈線と縄文が施される。

25~31と第70図1~13は深鉢の口縁部片である。25~28・30第70図1~4・10~12は平縁、29・31・第70図5~9・13は波状の口縁部を呈する。口縁端部が直線的に立ち上がるものがほとんどであるが、第70図5・9は口縁端部が内傾する。無文地に沈線や刺突文が施される。第70図2~4は円形刺突文のみが横位に施される。第70図5・8は直径0.5cm程の円孔が口縁端部に穿たれる。14~33は胴部片で、無文地に沈線や刺突文あるいはその双方が施される。18・20・22にはJ字文が施される。

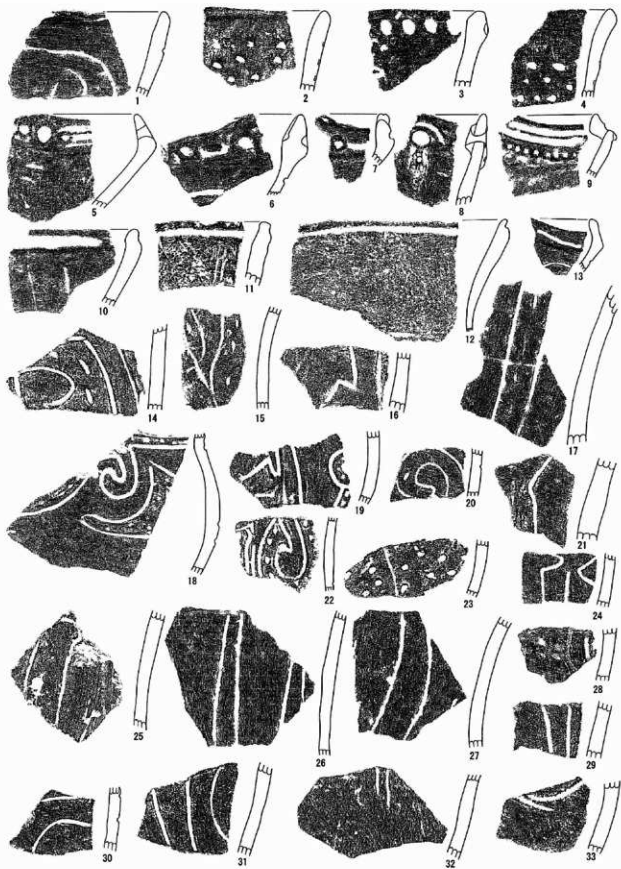
第71図1~5は平縁深鉢の口縁部片で、1・3は口縁端部が内傾し、2・4・5直線的に立ち上がる。いずれも無文地で、2~4は口唇直下に単沈線、1は口唇直下に円形刺突文と2条の平行沈線が施される。6~10は胴部片で、6・7はための棒状工具による渦巻文が施され、8・9には櫛歯状工具による縦位の沈線が施される。10は頭部あるいは口縁部付近のものであろうか。鎖状隆帯が垂下する。11~15は平縁深鉢の口縁部片である。11・12は口縁端部が内傾、13・14は外反、15は直線的に立ち上がる。無文地に細めの棒状工具による沈線が施される。16~22は胴部片である。いずれも無文地に細めの棒状工具による沈線が施される。16は楕円形の隆帯が、18には横位の刺突文が施される。23~31は深鉢の口縁部片である。23・24・27~30は平縁、25・26・31は波状の口縁部を呈する。口縁端部が直線的に立ち上がるものがほとんどであるが、23~26・30は口縁端部が内傾、31は外反、23・27~29は直線的に立ち上がる。いずれも沈線による区画と縄文が施される。25は推定口径11.4cm、現存高3.8cmを測り、口縁部には鎖状隆帯が貼り付けられる。胴部には単節LRの縄文が施文される。26は口縁端部に横位の刺突文が施される。24・28は細い条線が無数に



第68図 グリッド出土遺物 (1)

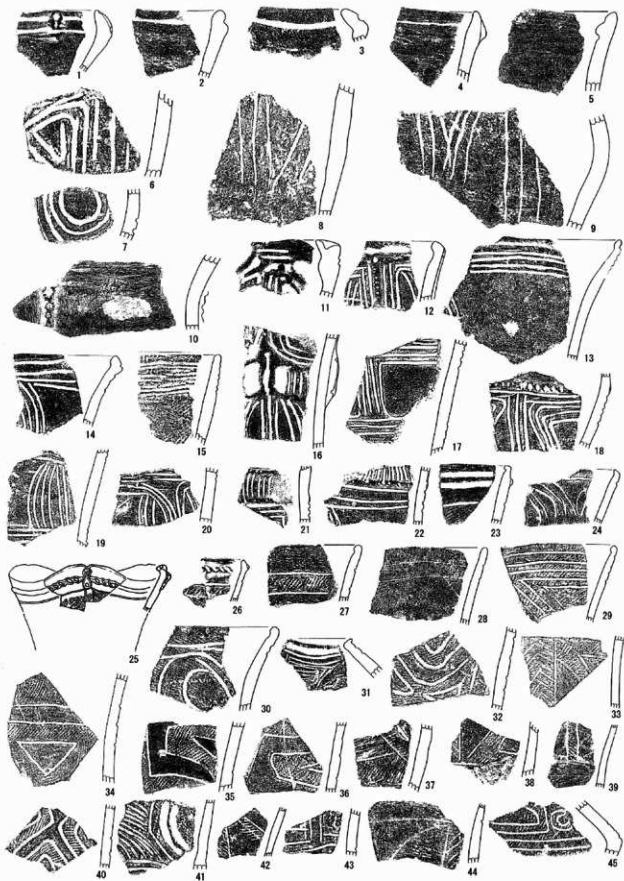


第69図 グリッド出土遺物 (2)



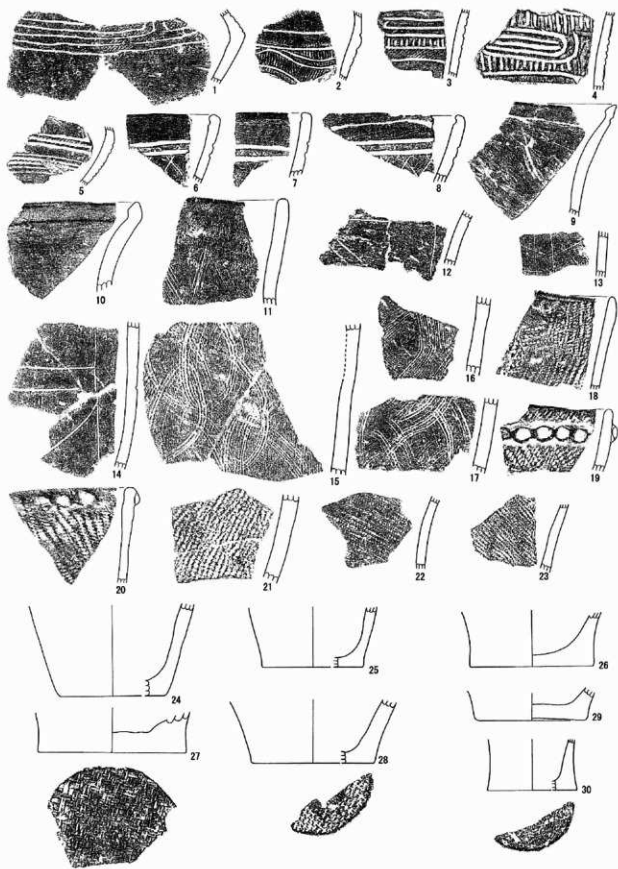
第70図 グリッド出土遺物 (3)





第71図 グリッド出土遺物 (4)

0 5 cm
1:3



第72図 グリッド出土遺物 (5)

見受けられる。29は沈線による三角形文、30は渦巻文が施される。

32～45と第72図1～5は胴部片である。沈線による三角形文(33・34)、方形文(39・43)など、幾何学的なモチーフを沈線で描き、区画内には縄文や刺突文が充填される。5～11は平縁深鉢の口縁部片で、8・10は口縁端部が内傾、9は外反、6・7・11は直線的に立ち上がる。いずれも無文地で、6～8は口縁部に平行沈線、9は単沈線が施される。12～17は胴部片で櫛歯状工具による条線が施される。15は対弧状に条線が配される。18～20は平縁深鉢の口縁部片である。いずれも口縁端部は直線的に立ち上がる。いずれも縄文を地文とし、19・20は口縁部直下に隆帯を貼り付け、円形刺突文列が施される。21～23は縄文が施された胴部片である。24～30は底部片である。底部が完存していないため、いずれも復元推定値であるが、底径は24が約8cm、25が約7cm、26が約10cm、27が約11cm、28が約10cm、29が約9cm、30が約7cmを測る。27・28・30には網代痕が認められる。

第73図1はミニチュア土器と思われる。現存部の最大径7.2cm、現存高5.2cm、推定底径3.2cmを測る。胴下半部が張り、底部に向けて胴部径はすぼまる。縦位の沈線文が施される。器面には縄と思われる浅い圧痕があるがヘラナデが加えられているため、定かではない。

土製品(第73図2～13)

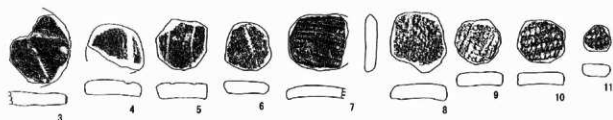
2は土版である。楕円形を呈すると思われるが、約3/4を欠損しており、現存高4.4cm、現存幅2.8cm、厚さ1.5cmを測る。細い繊維をもつ植物の茎等を用いた沈線で施文される。中央に径1cm弱の孔が前面から背面に貫通する。長軸中央部に上方から下方に径4mm程の貫通孔が認められる。

3～11は土製円盤である。いずれも不整形形あるいは楕円形を呈し、最も大きい3が最大径5cm、最も小さい11が大径2.2cmを測る。4・6には1条の、3・5には2条の沈線が認められる。また、3の右側縁には土器粘土紐接合のための刻み目が観察された。

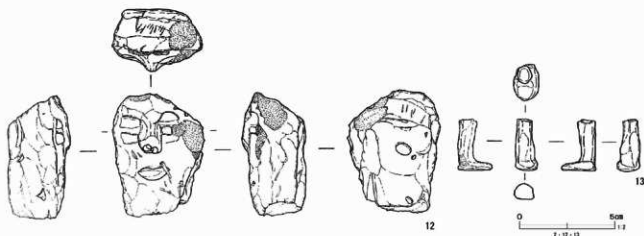
12は土偶の頭部である。最大高6.5cm、最大幅4.8cm、厚さは鼻高部で3.3cm、頸部で2.5cmを測る。肩から鼻梁にかけては隆帯状の表現を意識して鼻孔も表現されている。口は比較的写実的な凹みで表現される。眼は左側の大半を欠くが、右側は棒状工具の押しきりで表現されている。右側の眉下の凹みは眉を強調するためのものであろうか。全体に粘土の微妙な凹凸を残しており、整形・成形ともに完成していない。13は土偶の脚部か脚形の土製品と思われる。高さ2.7cm、脚部最大幅1.0cm、足部最大幅1.2cm、足部前後長1.8cmを測る。上面に破損した痕跡が認められず、完存品の可能性が高い。または四肢と胴体を別個に作った際の脚の部分だけが焼成されて残った可能性がある。

石器(第74図1～13)

1はナイフ形石器である。素材剥片の打面を上位に用いて、右側縁が歯潰し加工されている。歯潰し加工は、表裏両方から急角度に対向剝離されている。また、左側縁の基部に僅かに加工が施されており、二側縁加工となっている。2は二次加工剥片である。両側縁に微細な剝離が認められ、特に打面を上位にして先端を作り出すような加工が施されている。3～5は磨製石斧である。3は定角式磨製石斧で両端部を欠損する。両側縁は丁寧な面取りされ、断面長方形を呈す。4の刃部には、刃こぼれと思しき欠損が認められる。5は扁平な楕円礫が素材として用いられ、丹念に研磨されている。刃部欠損後は敲石として再利用されており、欠損した刃部に敲打痕が残される。6は左下端に直径約0.5cmの円形の孔が穿たれる石製品で



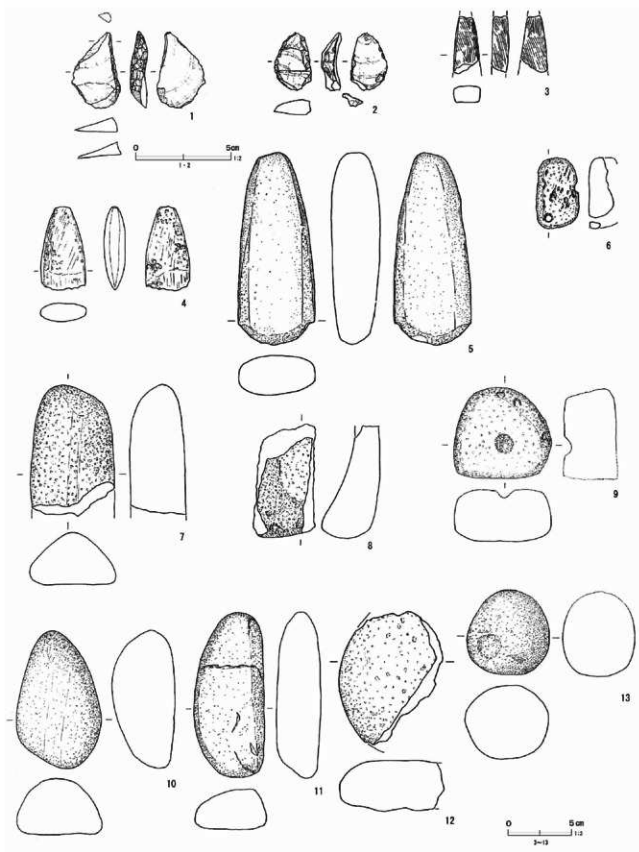
0 5cm
1:0-11



0 5cm
1:10-13

第73図 グリッド出土遺物 (6)

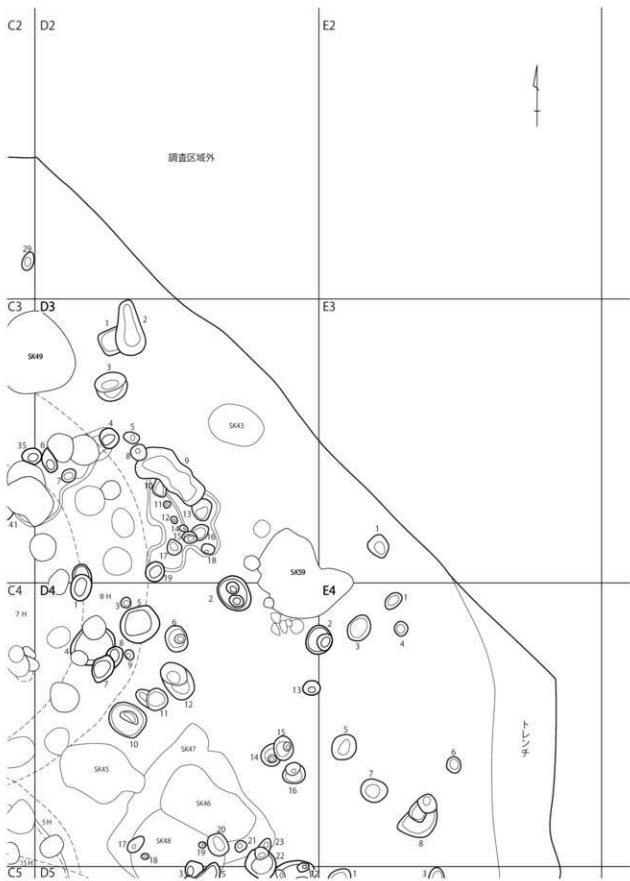
ある。正面、左側面の面取りが顕著である。裏面が欠失している。7～13は磨石である。7は断面三角形形状を呈し、意図的に敲打により整形されたものと考えられる。上端部を磨石として使用したようである。8は石皿欠損品を再加工したものである。9は中央部には直径約1.2cm、深さ約0.6cmの窪み孔が認められる。10は左側面のみ磨石として使用されている。11は特に右側面を磨石として使用する頻度が高かったようである。12は正面のみ磨石として使用したようである。13は円礫を用いたもので、全体によく磨れており、特に平坦面は存在しない。



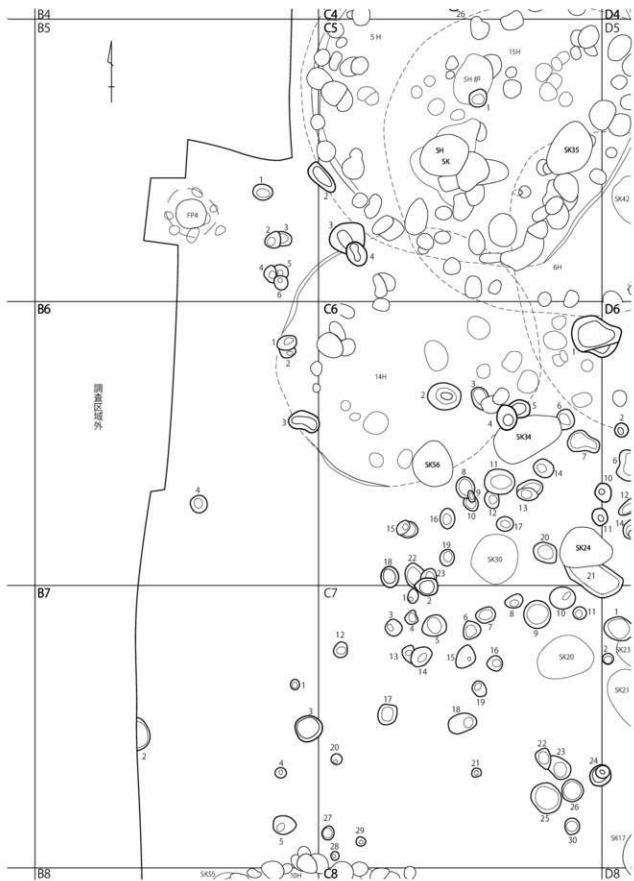
第74図 グリッド出土遺物 (7)



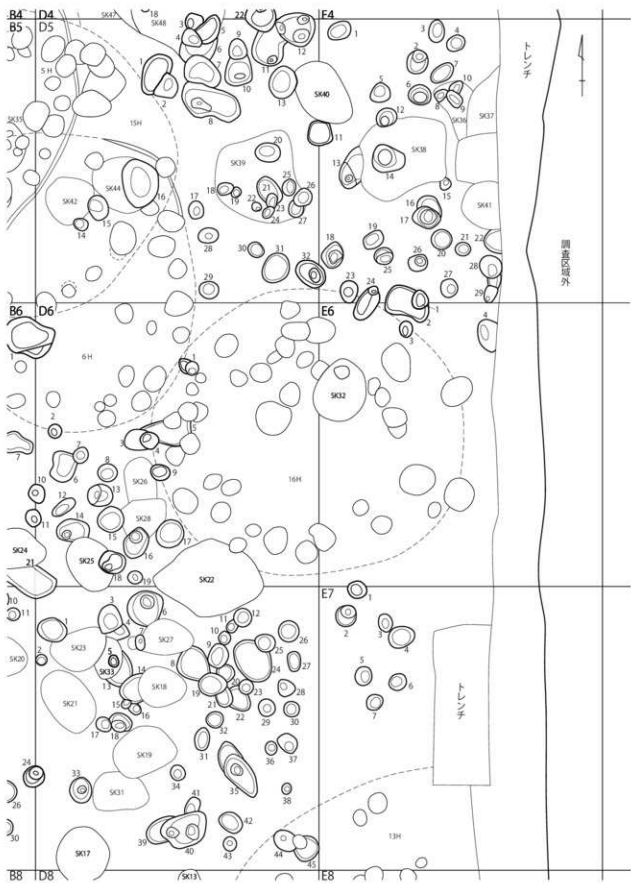
第75図 グリッドピット (1)



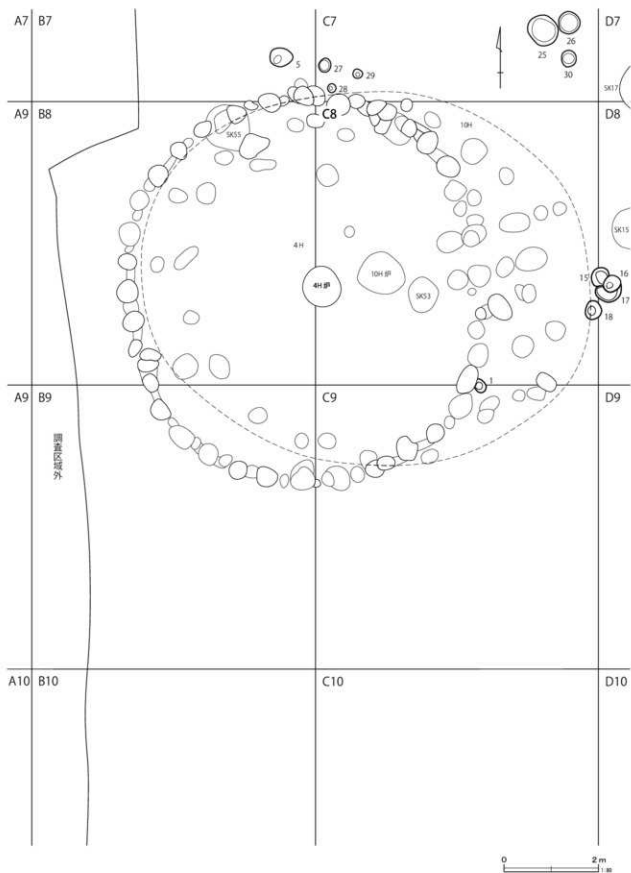
第76図 グリッドピット (2)



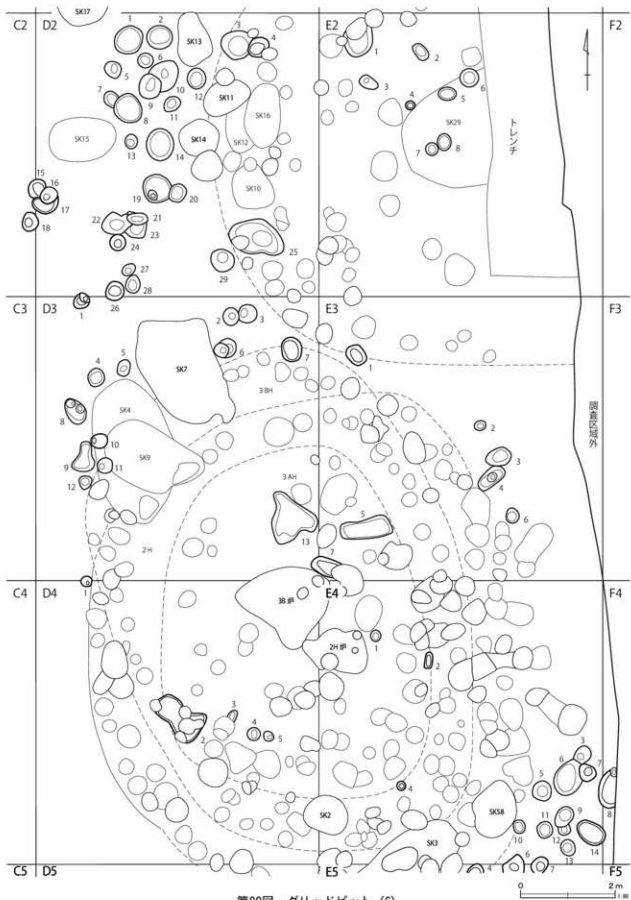
第77図 グリッドピット (3)



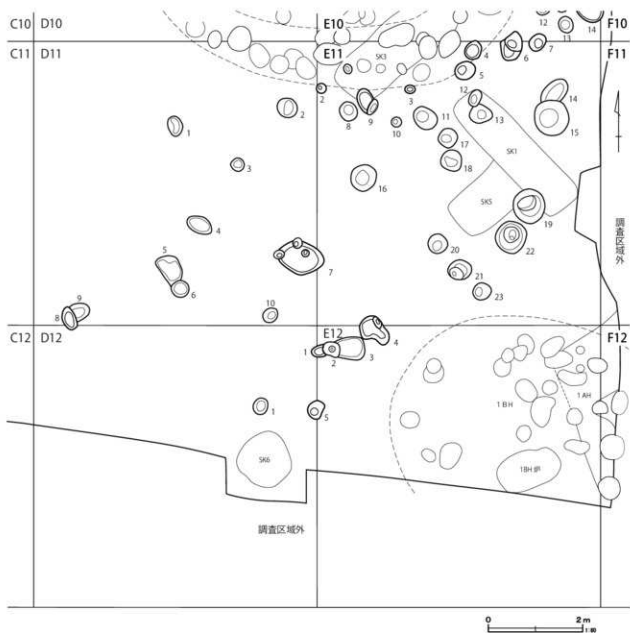
第78図 グリッドピット (4)



第79図 グリッドピット (5)



第80図 グリッドピット (6)



第81図 グリッドピット (7)

第2表 住居跡ビット一覧表

遺跡名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺跡名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺跡名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1A住	1	A4	32	52	重複	3B住	66	37	37	14	重複	7住	16	—	46	52	重複
1A住	2	35	27	29		3B住	67	—	20	7	重複	7住	17	—	20	50	重複
1A住	3	—	—	23	重複	3B住	68	—	55	43	重複	7住	18	51	42	16	
1A住	4	56	50	65		3B住	69	—	35	35	重複	8住	13	50	40	26	重複
1A住	5	20	20	21		3B住	70	—	32	52	重複	8住	14	49	47	150	
1A住	6	18	15	24		3B住	71	—	—	22	重複	8住	15	55	45	69	
1B住	4	62	26	24		3B住	72	—	50	24	重複	8住	16	60	43	80	
1B住	5	61	32	43		3B住	73	—	31	17	重複	8住	17	63	46	87	
1B住	6	58	—	41	重複	3B住	74	38	28	65	重複	8住	18	58	50	77	
1B住	7	33	30	13		3B住	75	—	27	20	重複	8住	19	85	55	80	
1B住	8	65	40	13		4住	64	55	45	82		8住	20	60	47	55	
1B住	9	30	28	13		4住	65	42	38	70		8住	21	68	56	77	
1B住	10	51	37	30		4住	66	25	20	28		8住	22	37	27	49	
1B住	11	—	40	54	重複	4住	67	57	44	80		8住	23	50	46	57	
1B住	12	—	30	47		4住	68	64	37	83		9住	1	45	—	87	重複
1B住	13	—	27	39	重複	4住	69	50	40	74		9住	2	80	65	108	重複
1B住	14	—	40	15	重複	4住	70	40	36	88		9住	3	65	60	74	
1B住	15	50	40	47		4住	71	26	23	37		9住	4	55	45	39	
1B住	16	40	34	65		4住	72	—	27	19	重複	9住	5	50	50	61	
1B住	17	30	21	56		4住	73	63	42	14		9住	6	—	—	83	重複
1B住	18	59	42	20		4住	74	43	42	73		10住	22	64	26	49	
2住	79	—	45	58	重複	4住	75	16	16	16		10住	23	33	29	27	
2住	80	—	52	39	重複	4住	76	50	45	67		10住	24	34	31	49	
2住	81	—	31	43	重複	4住	77	45	35	8		10住	25	53	40	91	
2住	82	47	—	57	重複	4住	78	67	49	71		10住	26	55	48	34	
2住	83	—	18	25	重複	5住	55	—	42	46	重複	10住	27	40	36	56	
2住	84	—	47	15	重複	5住	56	—	47	24	重複	10住	28	34	29	16	
2住	85	40	35	16		5住	57	40	34	60		10住	29	40	34	62	
2住	86	35	30	39		5住	58	69	59	61		10住	30	—	35	65	重複
2住	87	60	50	75		5住	59	—	36	36	重複	10住	31	37	27	41	
2住	88	40	30	19		5住	60	—	26	8	重複	10住	32	34	28	39	
2住	89	46	33	44		5住	61	43	34	14		10住	33	—	31	15	重複
2住	90	—	20	30	重複	5住	62	—	50	70	重複	10住	34	25	24	33	
2住	91	50	43	35		5住	63	28	24	不明		10住	35	36	28	9	
2住	92	60	50	15	重複	5住	64	35	32	57		10住	36	44	31	11	
2住	93	—	40	53	重複	5住	65	110	94	75	重複	10住	37	46	42	35	
2住	94	—	45	60	重複	6住	13	55	39	14		11住	1	90	63	49	
2住	95	70	57	55	重複	6住	14	39	37	30		11住	2	55	45	76	重複
3A住	31	38	32	42		6住	15	41	36	63		11住	3	50	40	73	重複
3A住	32	48	44	20	重複	6住	16	25	25	49		11住	4	47	35	53	重複
3A住	33	—	—	12	重複	6住	17	31	27	12		11住	5	60	45	51	重複
3A住	34	43	38	206	重複	6住	18	50	38	20		11住	6	45	40	40	
3A住	35	—	30	17	重複	6住	19	26	14	15	重複	11住	7	55	38	46	
3A住	36	60	53	29	重複	6住	20	24	—	14	重複	11住	8	—	—	39	
3A住	37	35	26	41		6住	21	26	25	42		11住	9	40	40	30	
3A住	38	52	45	12	重複	6住	22	41	30	20		11住	10	60	—	35	重複
3A住	39	—	30	43	重複	6住	23	33	33	14		11住	11	22	21	55	
3A住	40	50	42	42		7住	1	52	40	25		11住	12	—	70	54	重複
3A住	41	28	23	81		7住	2	55	55	50		11住	13	55	50	40	
3A住	42	—	41	13	重複	7住	3	105	85	73		11住	14	40	38	51	
3A住	43	—	40	27	重複	7住	4	—	47	58	重複	11住	15	50	35	50	
3A住	44	45	36	81	重複	7住	5	63	52	63		12住	1	38	35	71	
3A住	45	40	36	39		7住	6	53	50	83		12住	2	53	42	73	
3A住	46	54	54	77		7住	7	25	20	29		12住	3	60	53	55	
3A住	47	47	39	11		7住	8	72	52	92		12住	4	60	60	66	
3A住	48	50	—	10	重複	7住	9	56	51	107		13住	36	25	20	23	重複
3A住	49	76	53	15		7住	10	35	32	65		13住	37	52	48	12	重複
3B住	61	28	27	35		7住	11	32	27	41		13住	38	30	30	18	
3B住	62	20	20	8		7住	12	98	54	58		13住	39	37	31	7	
3B住	63	40	33	16		7住	13	57	48	35		13住	40	25	25	24	
3B住	64	16	14	5		7住	14	—	—	26	重複	13住	41	32	28	24	
3B住	65	37	25	8	重複	7住	15	—	27	47	重複	13住	42	—	20	7	重複

道跡名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	道跡名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	道跡名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
13住	43	42	38	9	重複	14住	11	35	27	50		15住	40	36	35	62	
13住	44	40	—	7	重複	14住	12	53	27	20		15住	43	34	30	24	
13住	45	38	38	35	重複	14住	13	—	28	47	重複	15住	44	47	38	46	
13住	46	—	—	16	重複	14住	14	—	37	54	重複	15住	45	32	28	49	
13住	47	—	28	16	重複	14住	15	61	47	85	重複	15住	46	36	31	41	
13住	48	30	27	16	重複	14住	16	30	25	31		16住	23	44	40	22	重複
13住	49	30	24	15		14住	17	18	16	26		16住	24	40	35	29	
13住	50	38	36	14		14住	18	22	20	23		16住	25	45	42	15	
13住	51	68	63	9		14住	19	23	15	25		16住	26	40	40	23	
13住	52	43	42	9		14住	20	55	45	26		16住	27	45	30	36	
13住	53	45	40	4		14住	21	34	30	35		16住	28	55	49	8	
13住	54	65	54	11		14住	22	42	30	35		16住	29	43	32	9	
13住	55	58	50	11		15住	28	26	23	27		16住	30	46	42	13	
13住	56	42	36	5		15住	29	35	33	56	重複	16住	31	35	29	7	
14住	1	—	37	20	重複	15住	30	30	25	45	重複	16住	32	40	31	15	
14住	2	35	30	39	重複	15住	31	—	85	58	重複	16住	33	60	49	14	
14住	3	48	42	17		15住	32	—	—	45	重複	16住	34	60	45	43	
14住	4	47	35	16		15住	33	—	—	50	重複	16住	35	49	46	50	
14住	5	30	28	10		15住	34	85	55	64	重複	16住	36	35	31	13	
14住	6	67	45	53		15住	35	—	55	10	重複	16住	37	45	40	22	
14住	7	53	42	15		15住	36	78	45	68		16住	38	76	65	14	
14住	8	45	35	36		15住	37	35	28	40		16住	39	35	25	12	
14住	9	—	—	16	重複	15住	38	—	47	35	重複	16住	40	70	65	66	
14住	10	50	25	48	重複	15住	39	—	44	41	重複						

第3表 グリッドピット一覧表

グリッド名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	グリッド名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	グリッド名	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
B4	1	38	30	89	重複	C3	32	—	40	27	重複	C6	8	45	37	19	重複
B4	2	25	—	37		C3	33	113	96	81	重複	C6	9	25	12	41	重複
B4	3	51	34	95		C3	34	—	45	37	重複	C6	10	—	30	15	重複
B4	4	20	—	27		C3	35	42	31	23	重複	C6	11	67	50	21	重複
B5	1	43	34	31		C3	36	27	26	88		C6	12	—	32	22	重複
B5	2	40	32	50	重複	C3	37	30	—	30	重複	C6	13	60	40	63	
B5	3	—	33	27	重複	C3	38	80	—	51	重複	C6	14	40	38	25	
B5	4	—	40	14	重複	C3	39	—	—	24	重複	C6	15	46	35	33	
B5	5	—	35	18	重複	C3	40	—	55	42	重複	C6	16	40	34	32	
B5	6	34	28	25	重複	C3	41	37	—	11	重複	C6	17	35	32	12	
B6	1	40	30	45	重複	C4	8	40	33	63	重複	C6	18	—	37	15	
B6	2	35	—	62		C4	9	38	30	34	重複	C6	19	35	30	25	
B6	3	60	35	14		C4	10	—	20	8	重複	C6	20	54	43	23	
B6	4	40	35	72		C4	11	25	23	19		C6	21	—	65	22	重複
B7	1	21	20	17		C4	12	28	25	53		C6	22	—	42	8	重複
B7	2	68	—	9		C4	13	25	18	43		C6	23	—	30	20	重複
B7	3	58	55	31		C4	14	—	24	28	重複	C7	14	47	39	49	重複
B7	4	23	23	47		C4	15	54	40	62	重複	C7	15	51	37	14	
B7	5	51	38	121		C4	16	26	22	52		C7	16	34	32	17	
C2	19	35	34	64	重複	C4	17	28	27	48		C7	17	46	40	16	
C2	20	—	24	27	重複	C4	18	46	40	78		C7	18	62	40	22	
C2	21	—	59	45	重複	C4	19	33	26	74		C7	19	32	27	12	
C2	22	—	23	29	重複	C4	20	98	60	83		C7	20	22	22	38	
C2	23	42	29	40	重複	C4	21	28	22	18		C7	21	23	20	14	
C2	24	—	44	26	重複	C4	22	—	37	5	重複	C7	22	48	33	13	重複
C2	25	33	28	63	重複	C4	23	45	40	52		C7	23	—	41	11	重複
C2	26	—	—	10	重複	C4	24	—	14	14	重複	C7	24	46	42	23	
C2	27	82	52	12		C4	25	—	17	14	重複	C7	25	68	60	10	
C2	28	55	45	6		C4	26	20	18	49	重複	C7	26	47	46	8	
C2	29	38	22	24		C4	27	25	17	26		C7	27	28	25	17	
C3	25	—	32	14	重複	C5	1	40	36	47	重複	C7	28	19	16	41	
C3	26	22	18	10	重複	C5	2	75	—	32	重複	C7	29	20	18	19	
C3	27	55	32	30	重複	C5	3	83	—	27	重複	C7	30	34	34	12	
C3	28	—	28	16	重複	C5	4	53	41	53	重複	C8	1	—	23	16	重複
C3	29	60	—	61	重複	C6	5	45	—	34	重複	D3	1	—	—	8	重複
C3	30	—	40	20	重複	C6	6	40	35	80	重複	D3	2	120	62	22	重複
C3	31	—	62	57	重複	C6	7	67	45	17		D3	3	68	62	43	

グレード	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	グレード	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	グレード	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
D3	4	52	40	24	重複	C6	20	54	43	23		D7	26	45	40	18	
D3	5	33	24	29		C6	21	—	65	22	重複	D7	27	40	26	10	
D3	6	50	—	14	重複	D4	10	81	75	28		D7	28	38	35	21	
D3	7	35	28	23	重複	D4	11	72	50	18		D7	29	39	35	23	
D3	8	37	36	28	重複	D4	12	88	57	31		D7	30	36	35	8	
D3	9	—	85	40	重複	D4	13	40	28	23		D7	31	52	30	11	
D3	10	—	28	15	重複	D4	14	48	—	34	重複	D7	32	40	36	10	
D3	11	13	12	32	重複	D4	15	53	—	37	重複	D7	33	55	45	21	
D3	12	14	13	19	重複	D4	16	45	45	28		D7	34	33	30	18	
D3	13	47	—	18	重複	D4	17	45	25	49		D7	35	132	53	30	
D3	14	17	13	31	重複	D4	18	15	15	36		D7	36	26	25	9	
D3	15	32	24	33	重複	D4	19	15	14	39		D7	37	48	35	26	
D3	16	—	30	15	重複	D4	20	49	41	76		D7	38	26	22	11	
D3	17	33	31	36	重複	D4	21	25	20	19		D7	39	—	48	12	
D3	18	26	22	41	重複	D4	22	70	60	43	重複	D7	40	100	70	62	
D3	19	40	38	15	重複	D4	23	—	23	22	重複	D7	41	—	28	16	
D4	4	114	—	19	重複	D5	5	56	45	90	重複	D7	42	50	40	22	
D4	5	83	64	53		D5	6	—	70	56	重複	D7	43	30	28	23	
D4	6	56	45	27		D5	7	80	63	31	重複	D7	44	50	42	39	
D4	7	—	48	31	重複	D5	8	130	70	40	重複	D7	45	—	55	12	
D4	8	—	33	11	重複	D5	9	42	37	28	重複	D8	13	30	30	8	
D4	9	20	19	25	重複	D5	10	—	60	29	重複	D8	14	68	57	14	
C3	39	—	—	24	重複	D5	11	—	66	32	重複	D8	15	—	40	12	重複
C3	40	—	55	42	重複	D5	12	85	70	26	重複	D8	16	35	30	37	重複
C3	41	37	—	11	重複	D5	13	65	56	17		D8	17	40	35	13	重複
C4	8	40	33	63	重複	D5	14	30	20	32	重複	D8	18	38	35	34	
C4	9	38	30	34	重複	D5	15	50	42	17	重複	D8	19	65	60	18	重複
C4	10	—	20	8	重複	D5	16	108	73	18	重複	D8	20	47	35	7	重複
C4	11	25	23	19		D5	17	40	32	33		D8	21	45	24	34	重複
C4	12	28	25	53		D5	18	35	25	28	重複	D8	22	—	45	20	重複
C4	13	25	18	43		D5	19	21	20	27	重複	D8	23	—	—	14	重複
C4	14	—	24	28	重複	D5	20	50	40	44	重複	D8	24	35	30	13	
C4	15	54	40	62	重複	D5	21	65	40	21	重複	D8	25	115	72	54	重複
C4	16	26	22	52		D5	22	19	19	46	重複	D8	26	52	48	20	
C4	17	28	27	48		D5	23	—	24	23	重複	D8	27	30	22	13	
C4	18	46	40	78		D5	24	29	24	32	重複	D8	28	42	38	18	
C4	19	33	26	74		D5	25	34	24	16	重複	D8	29	42	23	55	
C4	20	98	60	83		D5	26	40	35	13	重複	D8	30	25	25	18	
C4	21	28	22	18		D5	27	—	34	14	重複	D8	31	70	65	10	重複
C4	22	—	37	5	重複	D5	28	45	34	32		D9	1	36	33	32	
C4	23	45	40	52		D5	29	43	37	7		D9	2	35	32	37	重複
C4	24	—	14	14	重複	D5	30	35	30	13		D9	3	38	38	56	重複
C4	25	—	17	14	重複	D5	31	65	58	9		D9	4	40	35	15	
C4	26	20	18	49	重複	D5	32	70	50	15		D9	5	35	30	51	
C4	27	25	17	26		D6	1	45	30	35		D9	6	50	35	33	重複
C5	1	40	36	47	重複	D6	2	30	25	34		D9	7	51	40	8	
C5	2	75	—	32	重複	D6	3	—	45	24		D9	8	56	38	30	
C5	3	83	—	27	重複	D6	4	45	42	33		D9	9	63	45	16	
C5	4	53	41	53	重複	D6	5	—	—	13		D9	10	32	30	65	重複
C6	5	45	—	34	重複	D6	6	65	50	17	重複	D9	11	30	30	70	重複
C6	6	40	35	80	重複	D6	7	35	30	21	重複	D9	12	30	26	16	
C6	7	67	45	17		D6	8	42	40	21		D9	13	115	95	15	
C6	8	45	37	19	重複	D6	9	42	33	15	重複	D10	1	30	26	26	
C6	9	25	12	41	重複	D6	10	40	33	34		D10	2	112	67	16	重複
C6	10	—	30	15	重複	D6	11	35	33	33		D10	3	—	17	22	重複
C6	11	67	50	21	重複	D6	12	56	25	23		D10	4	30	28	29	
C6	12	—	32	22	重複	D6	13	55	50	26		D10	5	25	20	18	
C6	13	60	40	63		D6	14	70	46	32	重複	D11	1	43	32	15	
C6	14	40	38	25		D6	15	70	56	14	重複	D11	2	45	38	26	
C6	15	46	35	33		D6	16	—	48	29	重複	D11	3	30	27	25	
C6	16	40	34	32		D6	17	62	57	16	重複	D11	4	54	33	11	
C6	17	35	32	12		D6	18	54	52	28	重複	D11	5	62	45	19	
C6	18	—	37	15		D6	19	33	30	28		D11	6	36	34	10	
C6	19	35	30	25		D7	25	40	36	9	重複	D11	7	110	70	30	

グリッド名	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	グリッド名	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	グリッド名	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
D11	8	51	30	29	重複	E6	3	33	27	38		E10	13	—	27	10	重複
D11	9	—	40	10	重複	E6	4	64	—	36		E10	14	33	29	11	
D11	10	35	30	24		E7	1	40	37	14		E10	15	64	43	10	
D12	1	35	30	11		E7	2	45	44	39		E11	1	20	16	14	重複
E3	1	49	44	15		E7	3	38	32	21		E11	2	22	21	13	
E4	1	38	26	10		E7	4	55	48	14		E11	3	22	19	9	
E4	2	62	57	20		E7	5	40	35	19		E11	4	38	34	8	
E4	3	56	42	14		E7	6	37	34	13		E11	5	45	36	19	
E4	4	32	27	20		E7	7	36	32	27		E11	6	63	46	44	
E4	5	52	50	26		E8	1	—	—	6	重複	E11	7	41	31	23	
E4	6	38	30	15		E8	2	37	25	12		E11	8	38	36	63	
E4	7	60	50	22		E8	3	37	27	35		E11	9	56	34	59	
E4	8	100	64	36		E8	4	22	20	11		E11	10	21	20	18	
E5	13	—	—	42	重複	E8	5	38	28	9		E11	11	53	40	36	
E5	14	68	45	32	重複	E8	6	38	36	9		E11	12	36	24	不明	重複
E5	15	22	20	15	重複	E8	7	28	25	10		E11	13	—	41	不明	重複
E5	16	—	—	20	重複	E8	8	32	30	13		E11	14	—	41	14	重複
E5	17	60	42	36	重複	E9	1	45	38	11		E11	15	73	71	64	重複
E5	18	57	45	20		E9	2	24	20	24		E11	16	54	52	30	
E5	19	45	34	10		E9	3	53	38	21		E11	17	41	41	18	
E5	20	45	40	7		E9	4	65	31	20		E11	18	47	43	33	
E5	21	32	30	8		E9	5	108	37	7		E11	19	73	67	37	
E5	22	—	40	10		E9	6	30	28	9		E11	20	41	41	15	
E5	23	47	39	46		E10	4	—	33	32	重複	E11	21	49	41	23	
E5	24	72	43	24		E10	5	21	18	11		E11	22	65	64	56	
E5	25	40	34	27		E10	6	41	41	20		E11	23	40	37	15	
E5	26	38	34	24		E10	7	80	60	11	重複	E12	1	—	24	5	重複
E5	27	39	35	52		E10	8	40	30	20	重複	E12	2	37	32	55	重複
E5	28	44	41	25	重複	E10	9	81	—	28		E12	3	—	52	9	重複
E5	29	35	26	57	重複	E10	10	50	35	13	重複	E12	4	69	52	44	
E6	1	36	33	3		E10	11	29	23	12		E12	5	38	33	11	
E6	2	102	64	7		E10	12	36	34	9							

第4表 石器計測表

図No.	遺物No.	出土遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
第11図	2	2H	磨石兼凹石	安山岩	10.4	6.3	3.6	(339.3)
第11図	3	2H	磨石	ホルンフェルス	(5.6)	(7.1)	3.9	(137.8)
第28図	2	5H	磨製石斧	凝灰岩	4.1	1.9	0.8	10.4
第28図	3	5H	磨製石斧	凝灰岩	(16.1)	4.2	3.0	(100.2)
第28図	4	5H	砥石	砂岩	11.9	7.6	1.7	241.9
第28図	5	5H	砥石	砂岩	8.2	6.1	1.4	110.5
第28図	6	5H	石皿	安山岩	(7.7)	(12.3)	3.8	(428.7)
第28図	7	5H	石皿	安山岩	(13.1)	(18.3)	8.7	(4410.5)
第28図	8	5H	石皿(石棒を転用)	硬砂岩	(23.3)	13.7	9.0	(4435.8)
第29図	1	5H	磨石	安山岩	14.3	10.5	10.4	2274.6
第29図	2	5H	磨石	安山岩	(7.0)	(7.5)	5.8	(450.3)
第57図	5	SK3	石鏃	チャート	3.8	1.7	0.3	2.0
第62図	16	SK29	石棒	安山岩	(10.3)	(7.7)	4.4	(409.7)
第65図	21	SK56	石皿	硬砂岩	(6.9)	(6.4)	3.6	(117.3)
第74図	1	グリッド	ナイフ形石器	珪瑁	3.9	2.5	0.9	5.3
第74図	2	グリッド	割片	珪瑁	3.0	1.9	1.0	5.0
第74図	3	グリッド	磨製石斧	凝灰岩	(3.0)	1.3	0.9	(5.6)
第74図	4	グリッド	磨製石斧	安山岩	6.6	(3.5)	1.7	60.1
第74図	5	グリッド	敲石(磨製石斧を転用)	安山岩	15.2	6.0	3.8	634.6
第74図	6	グリッド	有孔石製品	安山岩	5.6	3.3	(1.9)	(5.8)
第74図	7	グリッド	磨石	安山岩	(10.3)	6.6	4.1	(392.4)
第74図	8	グリッド	磨石(石皿を転用)	安山岩	(9.0)	(4.9)	4.5	208.2
第74図	9	グリッド	磨石兼凹石	安山岩	7.2	7.6	4.3	326.6
第74図	10	グリッド	磨石	硬砂岩	10.8	6.7	4.8	456.4
第74図	11	グリッド	磨石	硬砂岩	16.9	5.6	3.2	374.6
第74図	12	グリッド	磨石	安山岩	(10.4)	(8.2)	4.1	(366.8)
第74図	13	グリッド	磨石	安山岩	6.7	6.5	5.6	343.5
第82図	4	グリッド	ナイフ形石器	頁岩	(4.9)	1.4	0.8	(3.8)
第82図	5	グリッド	ナイフ形石器	頁岩	(4.0)	1.1	0.4	(1.7)

※ () 内の数値は残存値を示す

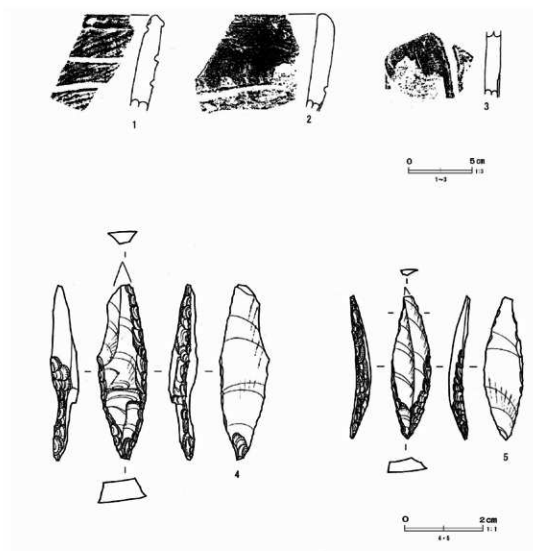
2 第3地点の遺物

土器 (第82図1~3)

1・2は平縁深鉢の口縁部片である。いずれも口縁端部は直線的に立ち上がる。1は口唇部に隆帯が貼り付けられる。外面は縄文を地文として、2条の平行沈線が施される。内面の口縁端部にも単沈線が認められる。2は無文地に単沈線が施される。3は、胴部片である。無文地に縦位の単沈線が垂下する。

石器 (第82図4・5)

4・5は二側縁加工のナイフ形石器である。いずれも先端部を欠く。縦長剥片を縦位に用い、打点部側を基部として用いている。いずれも一側縁のすべてに歯潰し加工を施し、もう一方の側縁も基部から半ば付近まで加工が施されている。5は刃部から基部まで明確な稜線が認められ、刃部断面は三角形を呈す。また、4よりも器体に強く反りが入った素材剥片を用いている。



第82図 第3地点出土遺物

IV 自然科学分析

1 上小笠原遺跡の放射性炭素年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

埼玉県白岡市に所在する上小笠原遺跡では、縄文時代後期とされる住居跡群が検出されている。住居跡群は、南西から北東へ向かう谷に沿って斜面上部に位置する。今回の分析調査は、これらの住居跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と炭化材同定を行い、年代資料を得る。

1. 試料

試料は、第5号住居跡（5H）から出土した住居構築材と思われる炭化材4点（試料番号100.101.102.111）である。この中から、試料の大きさや状態などを考慮して、2点（試料番号101.111）を対象に放射性炭素年代測定と炭化材同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

a) 前処理

水でよく洗浄して表面の異物を取り除いた。乾燥、粉砕後、水酸化ナトリウム溶液を加えて煮沸した。煮沸後の水酸化ナトリウム溶液は傾斜法で除去した。この水酸化ナトリウムの処理は、除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に塩酸を加えて煮沸し、塩酸は水で充分洗い流した。この試料を乾燥後、蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。

b) 測定試料の調整

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン5ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して5mlとした）にシンチレーターを0.075g 加えたものを測定試料とした。

c) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を繰り返して行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

d) 計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

(2) 炭化材同定

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 分析結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第5表に示す。測定年代値は、試料番号101が約2,160年前、試料番号111が約3,780年前である。

(2) 炭化材同定

結果を第5表に示す。炭化材は、いずれも落葉広葉樹のクリに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

第5表 放射性炭素年代測定及び炭化材同定結果

試料番号	試料の質	樹種	年代値 (BP)	誤差		Lab-No.
				+σ	-σ	
No.101	炭化材	クリ	2160	230	220	PAL-1003
No.111	炭化材	クリ	3780	100	100	PAL-1004

(1) 年代値：1950年を基点とした値。

(2) 誤差：測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

(3) PAL：ハリノ・サーヴェイ株式会社で測定。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) プナ科クリ属

環孔材で、孔部は1~4列、孔部外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

4. 考察

測定年代値は、キーリ・武藤（1982）らによれば、試料番号101が関東地方における、縄文時代晩期末、試料番号111が縄文時代後期に相当する値である。発掘調査所見では、検出された住居跡は縄文時代後期とされ、試料番号111の年代値はその所見とほぼ一致する。一方、試料番号101の年代値はこれより1,000年以上も新しい。現地所見によれば、測定試料の炭化材はいずれもその出土状況から住居跡に伴うものであることは確実とされている。また、樹種も試料番号111と同じクリである。したがって、試料番号101が住居廃絶後に流れ込んだ後代の炭化材であるということでは、試料番号111との年代差を説明できない。次に考えられることは、周囲の物質を吸着する炭化材の性質である。今回の試料はいずれも土壤中に数千年も埋没していることから、土壤中に由来する物質、特に炭素を多く吸着していると考えられる。覆土中の炭素分は主に遺構埋没後の植物に由来するため、覆土の放射性炭素年代を測定すると新しい年代が測定される。前述のように今回の測定試料の炭化材は、このような周囲からの影響を除去するための前処理を行っている。しかし、試料番号101は、試料番号111に比べて地表面に近い位置から検出されたこと、回収された炭素が微量であったことなどにより、相対的に周囲の影響が強くこれを除去しきれなかったと考えられる。結果として、試料番号101は周囲の新しい年代の炭素の影響により、試料番号111よりも新しい年代が測定された可能性が高い。

以上のことから、第5号住居跡の構築年代は、試料番号111の測定年代値に相当する縄文時代後期の約3,800年前頃の可能性がある。この年代は発掘調査所見と概ね調和的である。

今後、住居跡のより詳細な年代の特定のためには、同一住居跡から出土した炭化材の測定例を増加させ

ることや、他の住居跡出土炭化材の測定例との比較を行い、さらに測定試料の詳細な出土状況の検討などの考古学的な所見と合わせて評価することが望まれる。

引用文献

キーリ・C.T.・武藤康弘 1982 縄文時代の年代 縄文文化の研究1 縄文人とその環境 246-275 雄山閣

V 考 察

1 土器文様の構造的理解について

～「視覚認識構造」と「連鎖構造」に関する2,3の実例～

奥野 麦生

1. はじめに

これまでの土器研究の主流は、いわゆる文様帯系統論に基づく型式・編年研究であるが、この方法を検証・補完すべき新たな方法論の構築が今後の土器研究の活性化に必要であると考えている。

これまでの土器文様の分析は、ある型式のある文様帯を担う文様要素を抽出し、その変化の度合いで分類する方法が一般的であるが、今後は、土器に表象される文様全体とその構造を把握して分類・分析する研究法を併用してゆく必要性が高いものと考えられる。

筆者は、これまで白岡市内の発掘調査の成果を報告する中で、入耕地遺跡や前田遺跡出土の後・晩期の土器の文様帯に特徴的に見られるパネル状の文様の構造的分析を行ったり、山遺跡では加曾利E式土器について、またタタラ山遺跡では花積下層式土器について縄文土器の文様構造の分析を行ったりしてきた。

今回、上小笠原遺跡第2地点の第57号土坑の資料に注目し、これまで見てきた資料とともに、土器文様の全体構造をはじめ、文様帯同士のまたは、単位文様同士の「連鎖構造」や、文様構造同士をつなぐことによって生じる2次的構造である「視覚認識構造」などについて把握する文様帯内部の構造的理解についての考察を試みたい。

2. 研究略史

これまでも、展開図や展開写真を用いた土器文様の構造的把握についての研究は行われているが、その方向性は必ずしも定まったものとはいえない。確かに、縄文時代をはじめとする無文字社会の思考や抽象的な土器文様の意味について直接理解することは困難であるといわざるを得ないが、レヴィ・ストロースの示した一連の神話研究の成果や、近年中沢新一が試みた、考古学・民俗学と神話学との融合的研究を踏まえて、土器文様の構造的研究も次のステップに進むべき段階にあるといえよう。

土器文様の構造的研究について先鞭をつけたのは我孫子昭二であろう。その後、何人かの先学がこうした視点での挑戦を試みてきたが、体系的にまとめその後の研究の基礎を築いたのは、鈴木敏昭の「縄文土器の施文構造に関する一考察—加曾利E式土器を媒介として(序)—」(鈴木1983)であるといえよう。鈴木は、下南原遺跡(現・深谷市)出土の土器を端緒に縄文土器研究の視点を見直す提言ともいえる考察を行う中で、土器文様の構造研究の試みについて「文様同志の類似性、類縁性が指摘できない限りそれらの関連性を推考することが不可能であったレベルから、たとえ文様が違っていても、施文段階で共有されていた<意識>を通じて、それらの関係性が認識されるレベルに」できるものだと述べている。また、その視点は「(土器の)空間分割の原理と社会の組織原理とはいかなる関係にあるのかという、遠大な課題」へ注がれており、後続研究者の「灯台」となったといえよう。

さらに、鈴木敏の最近の論考「土器にみる縄文人の思考」を考える(鈴木2011)では、旧稿を引き継い

で縄文時代早期から晩期まで全体を通しての考察を行い、縄文人の間で世代や地域を超えて脈々と伝わる「心」に迫る論考が披露された。

一方、近年「認知考古学」の視点から桜井準也や小杉康らが土器文様の構造に言及している。特に、小杉の示した「可視範囲分割」に関する知見（小杉2006）は、私自身も十数年来研究してきた土器文様の構造的理解の主要テーマの一部として重要なものであるといえる。

そして石井匠は、『縄文土器の文様構造』（石井2006・2009）の中で、新たな土器文様の構造的研究の方向性を説いている。石井の研究は、ストロースや中沢をはじめ、先行研究をよく踏まえたもので、筆者との意見交換の成果も生かされたものとなった。分析した資料数は群を抜く。派生する諸問題にも一定の解釈を行っており、これまでの土器文様の構造的把握に関する研究から一步踏み出さんとする意欲に満ちた論考であると高く評価したい。しかし、土器文様の構造のバラエティの集約方向を非常に抽象的に「神話的思考」としてしまったところは残念に思う。言わんとするところは良くわかるが、軌道を修正してやはり考古学としての論理的整理が行われるべきであった。さもないと土器文様構造に関する研究の考古学的定着が遠のいてしまうのではないかと考えるからである。その点を度外視しても、石井の論考によって現時点での土器文様の構造研究の視点の整理が行われ、一定の共通認識を得ることができたと考える。鈴木のように、今後多くの研究者がこの問題に関心を寄せ、議論が活発化していくことを期待している。

3. 土器文様の構造的理解のための事例

さて、具体的に資料を見て行くこととするが、土器の文様構造解釈についての理解の一助として、本稿で使用する記号について次のとおりとしておきたい。

- ① 基本構造 → A、B、C
- ② 基本構造内の細分割 → a、b、c
- ③ 単位モチーフ → ア、イ、ウ
- ④ 視覚認識構造 → I、II、III
- ⑤ その他 → ①、②、③

(1) 上小笠原遺跡出土例（第83図）

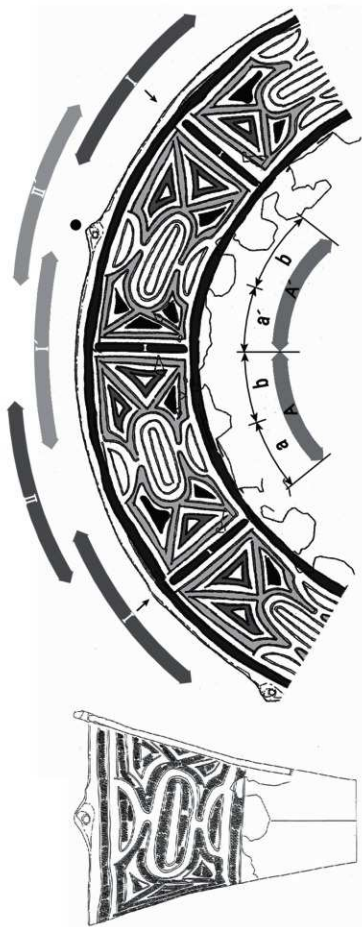
上小笠原遺跡第57号土坑出土の資料である。本資料は、楕円形土坑に逆位で埋設されていた2個体の深鉢形土器のうちの1個体で、口径30cm、推定器高40cmを測るものである。底部を欠くものの、胴部文様はほぼ完存している。

① 基本構造の把握

本資料の基本構造は2本の縦位分割線による2面構造 $A + A'$ である。A をモデルとすると、 A' では、パネル左端の縦長三角形区画内の地文施文部位に白抜き三角形がないことに気づく。また、 A' パネル中央には突起を有する。誤差の範囲ともいえないが、A パネルと A' パネルの一番濃いトーンの白抜き部分のない三角の形状が対比されるもの同士でやや異なることもわかる。

② 基本パネルの細分

縦位分割線と楕円文の中軸線により4つに区分される $a + b + a' + b$ の構造と理解でき、基本構造とあわせて標記すると $A (a + b) + A' (a' + b)$ となる。



第83图 上小笠原通隆出土例

③ 分帯構造の把握

本資料は、明確な分帯構造はもたないともいえるが、内包する分帯意識として楕円区画の中軸を成す白抜き線と2面のパネルを分割する垂下縄文帯中位の白抜き部分とを結ぶ線を分帯線と見立てることが可能である。

2面のパネルとも分帯線上部に位置する左右の横長三角形区画内は、左が地文充填、右は白抜きとなるが分帯下部の左右下の三角形区画では、2面のパネルとも同様に地文充填の三角形が配される。

④ 見かけの構造

楕円文正面と縦位垂下線正面（見かけの菱形正面）という見方が可能であり、楕円文+菱形文+楕円文+菱形文の4面構造と解釈できる。

⑤ 視覚認識構造

「視覚認識構造」を支える「視覚認識範囲」とは、土器を真横から見た時、主幹モチーフが歪むことなく正しく認識できる範囲をさすものとする。例えば、見かけの構造として認識した楕円文と菱形文を正面から見た時、それぞれ隣接するモチーフの端は視野には入るが、歪んでいるため正しく認識できないことがわかる。観察者が視点の移動なく把握できる範囲のことを「視覚認識範囲」と呼ぶこととする（註1）。

また、「視覚認識範囲」に規定される器面分割等は、展開図で把握できるモチーフ本来の器面分割構造（＝基本構造）に対するものとして「視覚認識構造」として把握しておくこととする。

楕円文正面同士を比較するとⅡ'面には突起が存在する（●印）、楕円が左上がりに歪んでいる等の差異が見られる。見かけの菱形正面同士を比較すると、Ⅰ'面では右側三角形の白抜き部分が欠落することになる。式化するとⅠ+Ⅱ+Ⅰ'+Ⅱ'と表すことができる。

展開図で把握した基本構造はA+A'の2面構造に違いない。しかし、これとは別に立体としての土器を観察するときはA+A'パネルの分割軸も「面」として機能している。結果的にⅠ+Ⅱ+Ⅰ'+Ⅱ'の4面の視覚認識構造が浮き彫りになる。

⑥ 小結

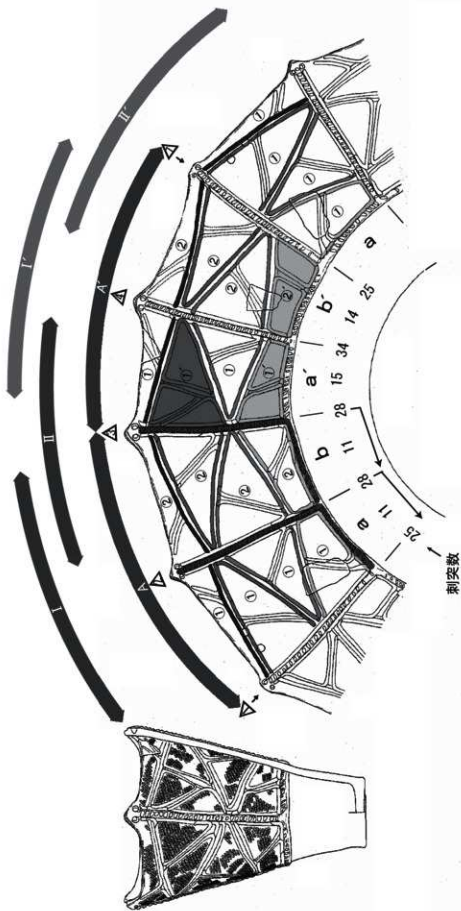
本資料は、基本構造であるA(a+b)+A'(a'+b)と、視覚認識による分割Ⅰ+Ⅱ+Ⅰ'+Ⅱ'の2者に支配されている。前者は作り手の、後者は観察者の視点といえなくもないが、Ⅰ'の縦位三角文の白抜きの拒否は、作り手が明らかに菱形文正面を意識していたものと見てよいだろう。もちろん、Ⅰ+Ⅱ+Ⅰ'+Ⅱ'の視覚認識構造の分割線は仮想したもので目に見える線はない。

視覚認識範囲の端は、隣接するそれと重複するため、明確な線引きはできないというあいまいさを予め内包するが、A(a+b)+A'(a'+b)とⅠ+Ⅱ+Ⅰ'+Ⅱ'の分割線は異なるのである。製作者は視覚認識範囲を想定し、土器文様の対称性を別の対称性で包み込むことで連鎖構造を仕組んだものと解釈できる。

本資料の連鎖構造は、基本構造と視覚認識構造とのずれによって形作られている。

(2) 入耕地遺跡第2地点出土例（第84図）

入耕地遺跡は、埼玉県白岡市白岡に所在する複合遺跡で、縄文時代は後期・晩期の住居跡が検出されている。これまでに10次にわたる発掘調査が行われ、大きな成果が挙げられている。分析対象とした資料は、第2次調査第1号住居跡出土の資料で接合の結果ほぼ完形に復元できた。口径20.5cm、器高28cmを測る。



第84图 入耕地遺跡第2地点出土例

① 基本構造の把握

本資料は、4単位波状口縁を呈する深鉢形土器で、波頂部（それぞれ△・△・△・△）から垂下する鎖状隆帯によって4面に分割されている。

鎖状隆帯によって4面に分割されたパネルは△の分割線を挟んでA + A'の2面に大別できる。Aパネルは△を挟んでほぼ左右対称の構成をとる。これに対してA'パネルは△△間の2段目の三角形区画の処理に変化を加え非対称としている。

② 基本パネルの細分

分割された各面は交互の斜位区画線で横長三角形に区切られる。この横長三角形区画はさらに斜線で分割され小三角形区画に区分されるという“三角形パネルの重畳”が観察される。

また、鎖状隆帯によって分割された各パネルは斜位区画線の観察から、 $a + b + a' + b'$ となる。これを、基本構造とあわせて標記すると $A(a + b) + A'(a' + b')$ と表現することができる。

さらに、各鎖状隆帯に施された突刺を見ると△下では、25、△下と△下が28、△下が34となる。また、下端区画上ではaとbはともに11であるのに対し、a'は15、b'は14である。このことから各パネルと鎖状隆帯との関係は、aと△、bと△が組み合わされていると理解することができる。

③ 分帯構造の把握

本資料は、明確な分帯構造をもたない。底部周辺の無文帯を画する鎖状隆帯の上は、基本的に1帯と理解できる。あえて斜位区画の重なりを“段”と表現し分帯に対比させて考えると、縦位分割された各パネルは横長の三角形（最下段は台形）4段に区分されると見ることができる。

波状を呈する口縁直下の1段目は下位の3段に比べ横に細長い。△と△を挟むように見かけの三角形を構成する。A、A'双方のパネルで同様の構造である。

2段目であるが、前述のとおり△△間の処理に変化を加えており、式であらわすと①+②+①'+②'となる。

3段目はA + A'構造の中核を成す区画で大型の見かけの菱形区画を形成するものとなる。構造は1段目同様①+②+①'+②'であり、安定した構造である。

4段目であるが、この段だけ台形区画となる。Aパネルでは△を挟んで下開きとなるように、A'パネルでは、上開きとなるような構造であり、式化すると①+②+①'+②'となる。

2段目3段目は合い向かいの横長三角形区画となる。おのおの独立した区画と見ることができ、2つあわせた「帯」的な構造と認識できる。

④ 見かけの構造

4単位の波状口縁の土器であることから、それぞれの波頂部正面を想定してみると、各パネルの第1斜位区画線の向きによって波頂部△△は山に△と△は谷となる。谷部には波頂部から「ハの字」に開く三角形が形成されることがわかる。

⑤ 視覚認識構造の確認

前述のとおり4単位波状口縁の土器で、鎖状隆帯4本が垂下し器面を縦位に分割している。視覚認識範囲は単純に4面想定される。すなわち各波頂部を中心に△中心のI、△中心のII、△中心のI'、△中心のII'となる。このとき、視覚認識範囲II、II'の対称性は4段目の細分線の向きによって破られることがわかる。視覚認識範囲IとI'を比較した場合、△を中心に見るI'2段目の三角形区画の処理は、視野の左

端に入るか入らないかという位置である。このことから4段目の上開き下開きの斜線の向きは、大きな意味をもつものであることがわかる。

⑥ 小結

本資料は、基本構造である $A(a+b) + A'(a'+b')$ と視覚認識構造 $I + II + I' + II'$ の2者に支配されている。このことは、縦位区画及び文様帯下端区画に用いられる鎖状隆帯の刺突の数でも裏付けることが可能である。

本資料の連鎖構造は、(1) 同様に基本構造と視覚認識構造とのずれによって形作られているが、これに4単位の波状線という構造が重ねられている。連鎖構造としては、基本構造と視覚認識構造と器形という3つの要素から成り立っていることがわかる。

(3) 前田遺跡出土例 (第85図)

前田遺跡は、埼玉県白岡市実ヶ谷に所在する縄文時代中期から晩期にかけての集落遺跡で、特に晩期の安行Ⅲa式期からⅢd式期にかけて大規模な包含層を伴う墓壇などが検出されている。分析対象とした資料は、平成元年の発掘調査で包含層中から出土した資料で、胴上半部の文様帯は、ほぼ完存する。口径は20.5cm、器高は25cmほどと推定されるものである。

① 基本構造の把握

姥山系講の単沈線区画描出手法をとる土器である。文様帯は4帯に区分して把握できる。すなわち、口唇部突刺文帯、三叉状入組文からなる口縁部主幹文様帯、口縁部文様帯下端区画となる鋸歯文帯、胴部連鎖文帯である。

文様帯は、この時期のほかの多くの土器同様に、器面を1周するように構成されており縦位の分割線は用意されていない。主幹文様は、文様帯内を上下に大きく振幅する鋸歯状単沈線によって、上向き下向き各5区画の三角形に区分される。

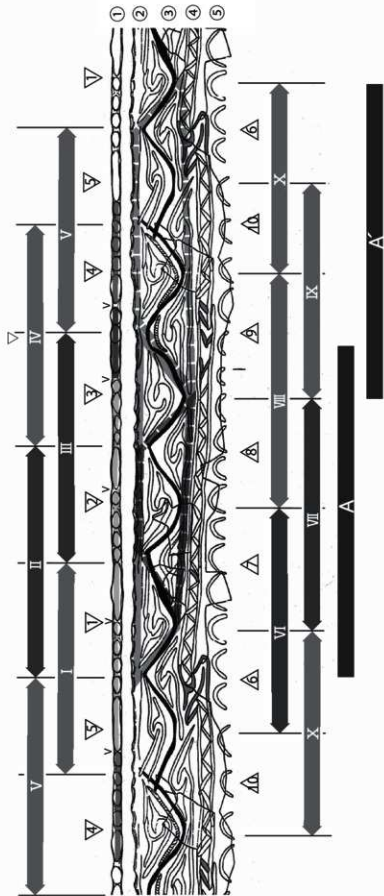
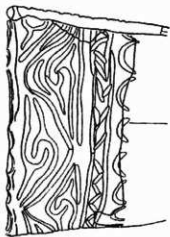
② 各文様帯の構造の確認

4帯に区分した文様帯ごとに対称性の破れの状況を確認してみよう。説明のために主幹文様帯の三叉状入組文に合わせて下向きの三角と上向きの三角として番号を付したので参考に使いたい。

まず、①帯とした口唇部突刺文帯は、長楕円1と楕円4を1組として口縁を1周するものであるが、△の上では、長楕円に取り込まれた楕円1と楕円1という組み合わせ、▽の下では、長楕円の長さが他の半分ほどしかないことがわかる。これを式化すると、△の上から右方向に向かって、①+①+①+①'+①'となる。

次に、口縁部主幹文様帯は、単沈線による鋸歯状区画内に上向き下向きの三叉状入組文を交互に配したものである。鋸歯状の区画線の上を②帯、下を③帯と仮称する。▽△では、三叉状入組文と区画線との間に附加文となる沈線が見られる。また、△の三叉状入組文下端が長く伸び△の下を閉じる形となっている。▽では三叉状入組文の形状が他と異なることがわかる。②帯は、▽から右に向かって②+②+②+②'+②'、③帯は、△から右へ向かって③+③+③+③'+③'となる。

三つ目に、④帯となる鋸歯文帯であるが、△の上で区画線自体が三叉文文化し、入り組むように構成されている。また、△では鋸歯を矢羽に替えている。△でも鋸歯の斜線を1本重複させていることがわかる。これを式化すると、△から右へ向かって④'+④'+④'+④'+④'となる。



第85圖 前田遺跡出土例

最後に、胴部に付された連弧文帯⑤帯では、弧線の大きさにばらつきが目立つ。数は16と推定され、5で割り切れない可能性が高い。一部欠損部もあり断定できないが、空きスペースを考慮すると、△で4個となる可能性が高く、式化すると△から右へ向かって⑤+⑤+⑤'+⑤+⑤となろう。

各文様帯相互の関係性について見てみると、口唇部刺突文帯は5区分されているが主幹文様帯の三角形区画とは連動しない。胴部連弧文帯についても、見かけ上口縁部文様帯とは連動しない可能性が高い。

③ 視覚認識構造の確認

本資料の視覚認識範囲は、三角形区画の中の三叉状入組文1つ1つを中心に据え、両側1つずつを加えた3区画を1面として捉えた台形又は逆台形10面と認識することができる。△を中心とする下向きの台形区画をIとして右向きに見ていこう。Iでは②'+③'+②、△中心のIIと、△中心のIIIでは②+③+②、△中心のIVでは②+③'+②'、△中心のVでは②'+③+②'と見ることができる。同様に、▽中心のVIと、▽中心のVIIでは③+②+③、▽中心のVIIIでは③+②+③'、▽中心のIXでは③'+②'+③、▽中心のXでは③+②+③'となる。

要するに、本資料の視覚認識構造には必ず重複する区画を伴う「連鎖構造」が形成されていると理解できる。

④ 分割線によらない分割

本資料は、前項まで何度も述べてきたように、縦位分割は行われないタイプの土器である。全体構成は、鋸歯状区画によって上下に組み合わせる三叉状入組文10単位と見ることができる。しかし、口唇部の刺突文帯が暗示するように5つに集約されるものと考えられる。上向きの三角形区画1つと下向きの三角形区画1つの平行四辺形が1単位と解することも可能かもしれない。この平行四辺形の組み合わせに着目すると▽+△・▽+△・▽+△が基本構造で▽+△・▽+△と対峙する構造と見ることができる。①帯も概ねこれに呼応すると見てよい。

しかし、この構造に④帯と⑤帯は呼応しない。実は、平行四辺形を施文パターン最小単位と捉えようとすると、必ずどこかの文様帯に「破れ」が留意されていることに気付く。例えば、Aの中心▽で見てみよう。△との組み合わせでは、⑤帯が「破れ」、△との組み合わせでは④帯が「破れ」となるという具合である。主幹文様帯の平行四辺形の組み合わせだけでは基本構造の意識を反映しないようである。

それでは、これに視覚認識構造を加味してみよう。台形を意識してみると視覚認識構造II+VII+IIIとIX+V+Xの2面に大別できることがわかる。前者を基本構造A、後者をA'とすることとしたい。基本的に視覚認識構造では、口唇部の①帯は構造自体に関与しない。基本構造Aにおいても④帯の△や⑤帯の△に「破れ」があるが、「分割意識」を考へるときには度外視してよいだろう。明確な縦位分割線をもたない本資料も視覚認識構造を把握することで分割の意識がしっかりと存在することがわかる。

⑤ 小結

本資料は、主幹文様帯を構成する10単位の三叉状入組文とこれ等が上下に組み合わせられる台形又は逆台形の視覚認識構造、さらに視覚認識構造3単位ずつによるAA'2面の基本構造に整理することができる。

一方、口唇部刺突文帯、口縁部文様帯下端区画となる鋸歯文帯、胴部連弧文帯はそれぞれ「破れ」をもつが、これらは主幹文様帯の分割意識とは異なる位置で基本構造の対称性を破っていることがわかる。各文様帯の「破れ」が最も重畳する部分は、△の上あたりである。また、④帯とした鋸歯文帯の始点終点となる△や、三叉状入組文帯を画する大振幅の鋸歯状沈線が大きく食い違う△の上なども注意される。

このような文様帯ごとの「破れ」の位置の意図的な「ずらし」はなぜ行われるのだろうか。文様帯ごとに観察するとき、文様帯構造の「破れ」は、他の文様帯の「破れ」や「破り方」とは無関係に見える。しかし、5帯全ての文様帯を通して見たときに単純に「ここで切れる」と気取られないように巧妙に「破れ」をずらし、組み合わせで全体構成を行っているように思える。

本資料は、主幹文様のもつ単位性と視覚認識構造、さらに二項対立型の基本構造で3重の連鎖構造であるが、その他の文様帯との関係性の視点から見るとさらに3重、都合6重の連鎖構造をもっていると見ることができる。

(4) 上小笠原遺跡出土土例2 (第86図)

上小笠原遺跡第57号土坑出土の資料である。(1)に示した事例と共存する資料である。楕円形土坑に逆位で埋設されていた2個体の土器のうちの1個体で、口径23cm、推定器高40cmを計る甕形土器である。胴下半を欠くものの、胴部文様の単位はほぼ確認できる。

① 基本構造の把握

本資料は、口縁部無文帯の下、括れる頸部に2条の沈線を引き立面図正面に12個の刺突が観察されるが、この刺突は単位文化したり列化したりすることはない。胴部には、単節縄文の地文上に垂下する沈線文が施される。沈線文は、頸部から5cmほどの位置で「H」字状に連結し、連結部は外側に突出する。この垂下沈線文は胴部に6箇所施されるが、その間隔は一樣ではなく縦位分割の意図も判然としなない。

② 分帯構造の把握

基本構造を把握するために考慮すべき文様帯は、頸部に設けられた刺突文帯と胴部の沈線文帯の2帯である。本資料と同系統の資料の中には、口唇部に装飾突起等をもつものが見られるが、本資料にはこうした加飾は認められない。

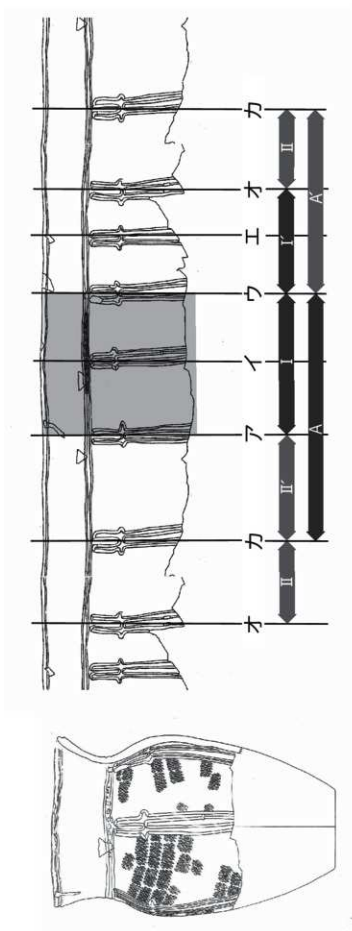
③ 見かけの構造

本資料は、胴部懸垂文帯に6個の沈線文が描かれる。しかし、その間隔は前述のとおり非常に不規則で6単位と見るのにはいささか抵抗がある。頸部の刺突文に注目し一つの「正面」と見立てた立面図を見てみよう。立面図は視覚認識範囲を反映し、イを中心にアとウまで視野に納めることができる。よって、この面が一つのモデルとなる3分割の視覚認識構造が成立する可能性が想定される。器面の構成比率を調べると、ア～ウは32.3%を占め、概ね1/3と見てよい。

もう一つの文様帯、頸部の刺突文帯について見てみたい。刺突のある部分は立面図に見える1箇所のみで、わずかな欠損部が認められるものの、大小12個の刺突が見られる。胴部と同様に器面の構成比率を確認すると17%となり、器面の1/6にあたる16.6%とほぼ一致する。これを偶然の一致と見るべきか否かは見解の分かれるところであろうが、筆者は偶然とは思わない。土器の作り手は、器面を3分割にも6分割にもできていたのであろう。

④ 視覚認識構造の確認

6個の懸垂文が2つずつ組みとなって3単位の縦位分割構造を形成すると仮定して器面の構成比率を計算してみると、ア～ウは32.3%、ウ～オは24.2%、オ～アは43.5%となる。これをもって3分割とするにはパネル間のばらつきが大きすぎる。懸垂文モチーフ2つという組み合わせを棚上げすれば、ア～ウは32.3%、ウ～カ44.2%、カ～ア23.5%という組み合わせもあり得る。しかし、オ～アの43.5%やウ～カの



第86図 上小笠原遺跡出土例2

44.2%という比率は、角度に直すと160度近い広角度であり、視覚認識範囲には収まらない。

器面構成比率に加えて器面分割軸に見立てる懸垂文と、その間に入る懸垂文の数に着目して見てみよう。

イを中心と見るア〜ウとエを中心と見るウ〜オは、懸垂文2本の間に懸垂文1本を挟む構造、これに対して、オ〜カとカ〜アは2本の懸垂文間に懸垂文を挟まない構造、この2者2組があることに気付く。頭部に刺突文を配し、ほぼ1/3の器面構成比率をもつ視覚認識範囲ア〜ウは、器面の3分割を暗示しているものと思われた。しかし、視覚認識構造を細かく検討することによって、実は4面構造が隠されていると理解することができる。すなわち、ア〜ウのⅠ、ウ〜オのⅠ′、カ〜アのⅡ、オ〜カのⅡ′である。これによって、本資料の基本構造の見方もはっきりする。ウを中心左右に分かれる2面構成で、左からカ〜アの視覚認識構造Ⅱとア〜ウの同Ⅰを基本構造Aとすると、視覚認識構造Ⅰ′のウ〜オと同Ⅱ′のオ〜カを基本構造A′と理解することができる。

本例のように、モチーフらしいモチーフをもちかず分割意識のあいまいな事例の場合、器面がどのような意識に支配されているかを認識することは簡単ではない。しかし、視覚認識構造という視点を活用することで土器に込められた製作者の意識を読み解くことができる。

⑤ 小結

本例は、前掲の3例とは視点の異なる事例である。器面に描出されたモチーフの規則性を読み取りにくい場合、どのようにして視覚認識構造を把握するかということを示す一例として紹介した。

まず、胴部の基本のモチーフとしてはア〜カの6単位と考えられる。モチーフの施文間隔は不均一で、一見器面構成計画をもちたず施文されたかと判断されても仕方がないであろう。器面構成比率と懸垂文の数に着目して視覚認識構造を考えてみると、Ⅰとしたア〜ウとⅠ′としたウ〜オそしてⅡとしたカ〜アとⅡ′としたオ〜カの4つに分けて捉えることができる。さらにこれを括る基本構造は、ウを中心とした左右2面ウ・Ⅰ・ア・カとウ・Ⅰ′・オ・カに集約することができる。

本資料の「正面観」を考えると視覚認識構造Ⅰの器面に占める割合1/3は、あまりによく整っており器面3分割の思考が支配しているかのように思われた。しかし、両脇の視覚認識構造Ⅱ（カ〜ア）と同Ⅰ′（ウ〜オ）の器面構成比率はそれぞれ23.5%と24.2%であり、概ね1/4に近似する。さらにⅠの真裏に当たるⅡ′のそれは、20%で1/5である。このように、一見全く無計画に施文されたかのように見られる本資料は、実に緻密な計算の上に成り立っていると見ることができる。

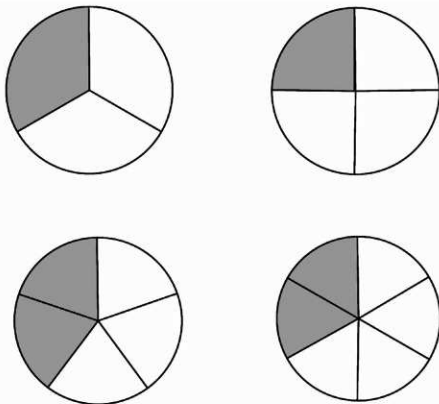
最後に、本例の連鎖構造を確認しておきたい。ア〜カの単位モチーフと基本構造のA + A′さらに視覚認識構造のⅠ + Ⅰ′ + Ⅱ + Ⅱ′の3重の連鎖構造であるが、これに、1/3、1/4、1/5、1/6という器面構成比率を加えて考えることもできるのである。

4. まとめ

(1) 器面分割と器面構成計画

器面を縦位に区画する「分割」は、時期や型式によって採用されたりされなかったりする。しかし、円環志向の土器群の中にも、埋没してはいるものの分割に対する意識は存在する。単位モチーフの割付や波状縁、突起などがそうした要素として数えられる。

器面分割はモチーフ割付を行いやすくする意味も強くもっていたものと思われ、入耕地例等にはこの傾



第87図 器面分割と視覚認識範囲

(土器を上面から見た時の分割線と視覚認識範囲の相関関係：3単位・4単位・5単位・6単位の場合)

向が窺われる。しかしこれらの土器の器面分割軸と文様構造上の分割軸とは必ずしも一致するものではなく、見かけの分割（視覚認識構造）と文様構造上の分割とがあらかじめ用意されていたものと考えられる。このような器面分割の仕組みをもつ土器の中には、緻密な器面構成計画をもつものがあり（註2）、文様構造上の分割を隠すために見かけの分割を顕在化させていると思われる例すらある。

(2) 奇数単位土器と視覚認識範囲（第87図）

土器の器面分割は通常3～5単位程度のものである傾向にある。最も多く行われている4分割法を基準に、実際に視野に入り意味ある単位モチーフを読み取れる範囲を「視覚認識範囲」として観察するとき、観察者は分割軸あるいは単位モチーフを正面にその両側を視野に入れる。文様展開図を見るときとは45度ずれることになる。また、文様構造を理解して2分割構造の土器を観察する場合でも、180度すべての構造を意味ある状態で視野に入れることは不可能で、両端は至んで把握しきれない。観察者の視野に入る有効範囲は120度から140度内外である。

器面分割の数と視覚認識範囲との相関を見ると、3分割のとき1面120度、5分割のとき2面で144度となる訳で、分割単位と視覚認識範囲とがほぼ一致する。しかし、分割線を正面にして見ることを考えると3分割では4分割同様視野の両端は認識できないこととなる。これに対して、5分割の場合分割線を正面にすると、ちょうど視覚認識範囲に単位モチーフが収まることになる。晩期の安行式などで多用される5分割を志向する土器群の存在は偶然ではなく緻密に計算された結果と受け止めるべきである。

(3) 器面2分割に対する潜在的志向性と2分割を隠すレトリック

単位モチーフを連ねていくつもの面構成を行う土器の中に、見かけの分割の影に文様構造上の真の器面分割を隠すように行うものがあり、その多くが2分割を志向する傾向の高いことがわかる。このような土器の場合、1面を「モデル」としてもう1面を「変形」として捉えることができる。変形は意図的で計算されたものである。

音楽の1形式である「ロンド」形式も主題と変奏を繰り返しながら進行する。音楽は形をもたないが、時空を超えた人の意識の中に、通奏低音として響くものがあると感じられる。

器面の2分割は「表と裏」「正と反」「真と偽」といった「二項対立」の抽象概念に通じ、これを「モデルと変形」という2面構成を行うことで、土器の器面に具現化したと見ることが出来る。

反面、2分割（2面構成）がはっきりとわかる構成の土器は少なく、（器形的に2分割を志向するものを除けば）多くは、2分割を気取られないように4分割に見立てたり、円環型に見立てたりして、真の分割意識が直接表面に現れないようにしている。

視覚認識構造は、このような真の分割が顕在化しないようにするレトリックであるともいえる。

(4) 連鎖構造

さて、土器の器面を縦に区分する「分割」を軸に「視覚認識構造」に関する考察をまとめてきたが、最後に、本論のもうひとつの主題「連鎖構造」に関する視点に関して整理しておきたい。

すでに述べたとおり縄文土器の文様には、見かけの分割と真の分割とをもつものが存在し、見かけの分割と真の分割とはその分割軸が異なる。(1)の上下笠原例は、基本構造と視覚認識構造の2者に支配される最も基本的な好事例である。(2)の入耕地例では、これに4単位波状縁という器形が加わる3者、(3)の前田例では、主幹文様のもつ単位性+基本構造+視覚認識構造の3者に加え、付属する文様帯3つが加わりなんと6重の連鎖が形成されている事例として紹介した。

器面を構成する要素である文様の単位モチーフ、突起や口縁部形態といった器形的特徴、分割、分帯、そして視覚認識構造などの要素は緻密に計算され複雑に連絡しながら構成されている。しかし、作り手はそのようなことは考えていないのかもしれない。彼らは意識下で平然とそれをやっつけてのける。それが縄文人の「常識」なのであろう。鈴木 の言葉 を借りれば「縄文人の思考」である。

連鎖構造は、一種の螺旋構造であり、今のところ1つの文様帯内で帰結し、これと器形や分割が関わる(1)や(2)に類するパターンと、分帯構造を絡めた(3)に類するものがある。分帯構造が関わる場合、より複雑な連鎖構造となるケースが多いことから、これを「多重連鎖構造」と仮称しておきたい。

また、本稿では触れなかったが、文様帯内での連鎖構造があっても、より複雑なケースが存在することもわかっている。これについては稿を改めたい。

土器の文様構造の解釈は、従来型の「一面的」「断片的」解釈では情報量に限界があり、そればかりか誤解を招く恐れすらあるということを再認識する機会とすることができた。

現在は、資料の分析を重ねている段階であるが、今後、ある程度時代や地域の指標となる代表的事例を一定量集積した段階では、文様構造のネットワークや構造の変遷、変化しない基本構造などを浮き彫りにすることができ、将来的に既存の土器型式や編年体系を別角度から捉えなおすことができれば、縄文土器研究の更なる進展に貢献できるものと考えている。

註

- 註1 石井が、「縄文土器の文様構造」の中で「可視範囲面」という用語を用いている。ほぼこの概念と共通するものだが、「可視」＝「見える」という受動でややあいまいさのある印象を改めたいと考え「視覚認識範囲」「視覚認識構造」という言葉を用いることとした。
- 註2 板井は、土器文様の割付に関して民族例を引きながら「当時の文様施文方法があらかじめ印をつけるなどして、区画を均等に割り付けるといった行為は行わず、基本的に集積型割付法（追いつし施文）によって文様を施文している可能性が高い」（板井2006）と述べている。しかし、割付角度が分度器で測ったように正確に行われているかどうかは問題なのではなく、彼らが予め文様構成計画をもった上で施文しているかどうかという観点で捉えるべきであると考えている。縄文土器の中には確実に文様割付や文様構成計画をもつと思われるものが存在する。前期羽状縄文系土器群の中には、縄文の割付線が残されるものがあることが知られている。少なくとも本論で取り上げる資料などは、かなり緻密な文様構成計画に基づき施文されていると考えなければ説明できないであろう。

参考文献

- 石井 匠 2006 「縄文土器の文様構造」『國學院雑誌』107-7
- 石井 匠 2009 「縄文土器の文様構造」【未完成考古学叢書7】アム・プロモーション
- 奥野友生他 1997 白岡町埋蔵文化財調査報告書第8集『入耕地遺跡（第2地点）』白岡町教育委員会
- 奥野友生 1998 白岡町埋蔵文化財調査報告書第9集『前田遺跡』白岡町教育委員会
- 奥野友生 2008 白岡町遺跡調査会調査報告書第7集『山遺跡-第2地点-』白岡町遺跡調査会
- 奥野友生 2008 白岡町遺跡調査会調査報告書第6集『タタラ山遺跡-第2地点-』白岡町遺跡調査会
- 小杉 康 2006 「土器造形の発達とカテゴリ操作」『心と形の考古学-認知考古学の冒険-』同成社
- 板井準也 2004 『知覚と認知の考古学-先史時代の心』雄山閣
- 板井準也 2006 「土器の文様区画と認知構造-文様の割付と「うつわ」の認知の問題をめぐって-」『心と形の考古学-認知考古学の冒険-』同成社
- スティーブン・ミズン 1998 『心の先史時代』青土社
- 鈴木敏昭 1983 「縄文土器の施文構造に関する一考察-加曾利E式土器を媒介として（序）-」『信濃』35巻4号 信濃史学会
- 鈴木敏昭 1984 白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集『茶屋遺跡』白岡町教育委員会
- 鈴木敏昭 1987 「加曾利EⅡ式土器における施文構造の変容について-埼玉県北西部を中心に-」『埼玉の考古学』新人物往來社
- 鈴木敏昭 2011 「土器にみる縄文人の思考」を考える『埼玉県立史跡の博物館紀要』5号
- 谷井 彪 1977 「勝坂式土器の文様構造について」埼玉考古第16号
- 谷井 彪 1979 「縄文土器の単位とその意味」『古代文化』31-2・3
- 中沢新一 2002 『熊から王へ』カイエ・ソバージュⅡ講談社
- 中沢新一 2004 『対称性人類学』カイエ・ソバージュⅤ講談社
- 中沢新一 2006 『芸術人類学』みすず書房
- 中沢新一 2008 『狩猟と編み籠 対称性人類学Ⅱ』講談社

写真図版



掘削作業状況



実測作業状況



現地説明会の様子 (1)



現地説明会の様子 (2)



第1地点調査区南側全景



第2地点調査区南側全景



第1地点調査区北側全景



第2地点調査区北側全景

図版4



第1A・B号住居跡



第2号住居跡



第2・3A・B号住居跡



第4·10号住居跡



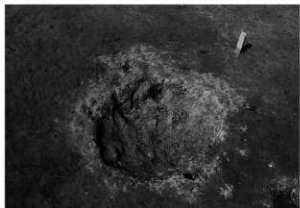
第5号住居跡



第6号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



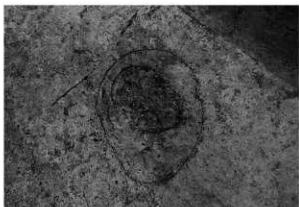
第4号住居跡炉跡



第5号住居跡遺物出土状況



第5・6号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡炭化材検出状況



第10号住居跡炉跡

第7·8·11号住居跡

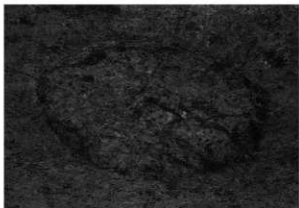


第9号住居跡



第12号住居跡





第2号土坑



第6号土坑



第8号土坑



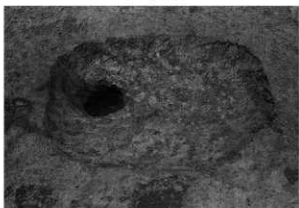
第10号土坑



第13号土坑



第14号土坑



第15号土坑



第17号土坑



第19号土坑



第20号土坑



第21号土坑



第22号土坑



第24号土坑



第32号土坑



第34号土坑



第35号土坑



第39号土坑



第45号土坑



第49号土坑



第53号土坑



第55号土坑



第56号土坑



第57号土坑遗物出土状况



第4号屋外炉跡



第1A・B号住居跡 (第8図1~10)



第3A・B号住居跡 (第16図1~50)



第2号住居跡
(第10図1~44・第11図1~3)

図版12



第3A・B号住居跡（第14図1）



第4号住居跡（第19図1～10）



第5号住居跡（第24図1）



第5号住居跡（第24図2）



第5号住居跡（第24図3）



第5号住居跡（第24図4）

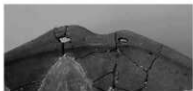


第5号住居跡（第28図1～8・第29図1・2）



第5号住居跡 (第25図1~39・第26図1~35・第27図1~34)

図版14



第6号住居跡 (第32図1)



第6号住居跡 (第33図1)



第6号住居跡 (第33図2)



第6号住居跡 (第34図1~37・第35図1~15)



第6号住居跡 (第35図16~23)



第7号住居跡 (第37図1~10)



第8号住居跡 (第40図1)



第8号住居跡 (第40図2)



第8号住居跡 (第40図3)



第8号住居跡 (第40図4)



第9~12号住居跡 (第46図1~37)



第13号住居跡 (第48图1)



第13号住居跡 (第48图2)



第13号住居跡 (第48图3)



第13号住居跡 (第48图4)



第13号住居跡 (第48图5)



第13号住居跡 (第49图1~39)



第13号住居跡 (第50図1~13)



第14号住居跡 (第53図1~15)



第16号住居跡 (第55図1~28)



土坑出土遺物 (第57図1~25)





土坑出土遺物 (第59図1~13・15~24)



土坑出土遺物 (第59図14)



土坑出土遺物 (第62図1~16)



土坑出土遺物 (第65図1)



土坑出土遺物 (第65図2~21)



土坑出土遺物 (第65図22)



土坑出土遺物 (第66図1)



土坑出土遺物 (第66図2)



グリッド出土遺物 (第68図1~26・第69図1~31・第70図1~24)



グリッド出土遺物 (第70図25~33・第71図1~45・第72図1~30)



グリッド出土遺物 (第73図1)



グリッド出土遺物 (第73図2~13)



第3地点調査区全景



グリッド出土遺物 (第74図1~13)



ナイフ形石器出土状況



第3地点出土遺物 (第82図1~5)

報 告 書 抄 録

カミオガサワライセキ (ダイイチ・ニ・サンチテン)									
書 名 上小笠原遺跡 (第1・2・3地点)									
副 書 名 市内遺跡群発掘調査報告書XX									
シ リ ーズ 名 白岡市埋蔵文化財調査報告書第22集									
編 著 者 名 杉山和徳 奥野麦生 松崎慶喜									
編 集 機 関 白岡市教育委員会									
所 在 地 〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL. 0480-92-1111									
発 行 年 月 日 2013 (平成25) 年3月29日									
所 収 遺 跡	所 在 地		コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
			市町村	遺跡	北緯	東経			
上小笠原遺跡	第1地点 彦兵衛字下小笠原 120-1・120-2		11445	077	36°	139°	第1地点	第1地点 1,131	第1地点 農地改良
	第2地点 彦兵衛字下小笠原 121-2				00′	41′	20010601 ?		
	第3地点 彦兵衛字上小笠原 154-1				54″	49″	20010810 ?		
						20010828 ?	第2地点 561	第2地点 農地改良	
						20010928 ?	第3地点 84	第3地点 農地改良	
						20090115 ?			
						20090121			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
上小笠原遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代後期	住居跡	18軒	縄文土器・土製品・石器		長径10mを超える大型の縄文時代後期前葉(堀之内式期)の住居跡を検出		
<p>遺跡の概要</p> <p>上小笠原遺跡は白岡市東部に位置する慈恩寺支台上に所在している。縄文時代後期を中心とする集落跡で、本調査地点では18軒の住居跡を検出した。また、第3地点で見えられたナイフ形石器は、慈恩寺支台では市域初の出土例となった。</p>									

白岡市埋蔵文化財調査報告書第22集

上小笠原遺跡（第1・2・3地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XX

平成25年3月25日 印刷

平成25年3月29日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社